

クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の源泉資料について*

山崎一穂

1 はじめに

アショーカ王に関する伝説の研究は、彼が仏教の有力な庇護者であったこと、彼の即位年代が仏滅年代を推定する基準となることもあり、Eugène BURNOUFの研究を先蹤として¹、多くの学者によってなされて来た²。

本論で扱うクシェーメンドラ(ca. 990–1066)の *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (以下 Av-klp) はアショーカ王伝説を直接扱った作品ではないが、第59、69–74章がアショーカ王の伝記に充てられている。Av-klp所収のアショーカ王伝は成立年代が相当に下ることもあり、史料的价值は高くないが、アショーカ王伝説の歴史的展開を追う上では重要な文献である。本論はその第59章 Kuṇālaの源泉資料の解明を目的とするものである。

2 クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の研究史

クナーラ太子伝を伝える伝本は複数存在している³。クシェーメンドラ本その他、本論で主に取り上げる伝本は次の五本である。

*本論は拙論「クシェーメンドラ本クナーラ・アヴァダーナについて」『印仏研』56-1(2007): 294–297に発表した内容を大幅に加筆、修正したものである。当該論文は筆者が2006年に九州大学に提出した修士論文を要約したものであるが、後日随所に数多の不備があることが判明したので、改めて起稿した次第である。原典の翻訳にあたっては、当時の指導教官であった岡野潔先生より写本情報及び原典の解釈全般にわたる懇切丁寧な御教示を賜った。また片岡啓先生からはネパール・カトマンドウのNGMPPに収録されているAv-klpの写本の複写を頂いた。また、京都大学の横地優子先生からはAv-klpの原典の解釈に関し有益な御教示を賜った。原典訳の異読を提示した箇所はYOKOCHIとあるのは先生から御指摘頂いた読みである。茲に記して御礼申し上げる。

¹アショーカ王伝説の梵文原典からの最初の翻訳は、Eugène BURNOUFがBrian Houghton HODGSONから送られた *Divyāvadāna* の写本を基に『インド仏教史序説』において行ったものである(Eugène BURNOUF, *Introduction à l'histoire buddhisme indien* (Paris: Maisonneuve, 1876), 319–388)。BURNOUFは *Divyāvadāna* 所収のアショーカ王伝説を一種のプラナーナと評し、アショーカがウパグプタ長老と同時代の人物であったこと、アショーカの出現した年代が仏滅後百年に置かれることを指摘し、若干の論考を加えている。

²アショーカ王伝説を伝える諸伝本は複数存在するが、これらの断面は横並び一列に対応している訳ではないので、その対応表の作成が多くの研究者によってなされて来た。これらの成果を批判的に検討して提示した研究がHisashi MATSUMURA, “On the Structure of the Aśoka Legend,” in *Premier colloque Étienne Lamotte* (=Publications de l'institut orientaliste de Louvain 42) (Paris, 1993), 71–82である。尚、北伝のアショーカ王伝説を伝える重要な資料として『雑阿含経』及び正量部所伝の宇宙論文献 *Lokapaññatti* があるが、クナーラの伝説は収録されていない。

³この他漢訳、ジャイナ伝本中に存する並行資料については、松村[1984]を参照されたい。

- *Divyāvādāna* (Divy) 第 27 章 *Kuṇālāvādāna*⁴
- *Aśokāvādānamālā* (AAM) 第五章 *Kuṇālāvādāna*⁵
- *Ku na la'i rtogs pa brjod pa*⁶ (Kun) Padmākaravarman & Rin chen bzang po 訳 11 世紀
- *Dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar bston pa, dgos 'dod kun 'byung* (Tāranātha) of Tāranātha 第八章⁷ 1608 年
- 『阿育王伝』(『王伝』) 第三卷「駒那羅本縁⁸」西晋・安法欽訳 306 年
- 『阿育王経』(『王経』) 第四卷「鳩那羅本縁⁹」梁・僧伽婆羅訳 512 年

クシェーメンドラ本についての最初の論考は、G. M. BONGARD-LEVIN と O. F. VOLKOVA によってなされた。BONGARD-LEVIN と VOLKOVA はレニングラードのソビエト科学アカデミー東洋学研究所所蔵の AAM の写本一本に基づき AAM 第五章 *Kuṇāla* の原典を校訂、露訳し¹⁰、校訂原典の部分を BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965] として発表した。BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965] はその序文中でクナーラ伝説の諸伝本の比較検討を行い、AAM 第五章 *Kuṇāla* 中の 160 詩節がクシェーメンドラ本の、33 詩節が Divy のそれと逐語的に一致すること、Lüders [1926: 74] が後代の改竄と指摘した、Divy に見られる主人公クナーラの目の回復に関する詩節がクシェーメンドラ本からの借用であること、ターラナータの所伝が「タクシャシラーの藩主の名を伝えていること」¹¹、「乞食となったクナーラが象にその素性を知られたこと」¹²、「クナーラの目の回復」¹³、「クナーラの息子が即位したこと」¹⁴ を伝えている点でクシェーメンドラ本の伝承に従っていることを指摘した¹⁵。

⁴Divy 405.16–419.13.

⁵BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965: 125–132, 315–318, 25–29, 310–319].

⁶D227b3–240a4; P281a1–299b5; G325a1–344a5; N256a1–270b3.

⁷Tāranātha 38.21–40.9.

⁸T#2042, 108a4–110b9.

⁹T#2043, 144a9–147c6.

¹⁰G. M. BONGARD-LEVIN & O. F. VOLKOVA, *Legenda o Kunale (Kuṇālāvādāna iz neopublikovannoj rukopisi Aśokāvādānamālā)* (Moskva, 1963).

¹¹Tāranātha 39.10–12: nam zhig na nub byang a sma pa ra nta ces bya ba yul thag ring po zhig na rgyal po glang po'i rna ba zhes bya ba ngo log pa 'dul ba'i don du rgyal bu ku na la dmag dang bcas pa song (「或る時、北西にあるアシュマパラータという遠方地域で反旗を翻した、クンジャラカルナという藩王を制圧する為にクナーラ太子は軍勢を率いて出発した。」)

¹²Tāranātha 39.21–22: mthar pa ta li pu tra'i glang po che'i ra bar sleb pa las | glang po che cang shes kyis ngo shes te phyag byas so (「[クナーラ夫妻は] 終いにはパターリプトラの巨象の檻の所に辿り着いた。すると巨象は全てを知ったので、[王子だと] 再認識し、[彼を] 崇敬した。」)

¹³Tāranātha 40.5–7: bdag ni skar rgyal bsrung ma dang | bdag gi bu la mnyam par byams shing sdang ba'i sems med na | mig sngon bzhin du gyur cig ces bden pa gsol bas sngon las kyang lhag pa'i mig thob par gyur to (「[クナーラは] 『私がティシュヤラクシターと我が子に等しく愛情を抱いており、[ティシュヤラクシターを] 憎悪する気持がないならば、眼は元の如くとなれ』 という真実語を発したことで、以前 [の眼] にも勝る眼を獲得した。」)

¹⁴Tāranātha 40.7–9: de rab tu byung nas dgra bcom pa thob ste | de'i phyir phyis de rgyal srid la ga la zhig ste | 'on kyang de'i sras mya ngan bral rgyal srid du bskos (「彼(クナーラ)は出家し、阿羅漢果を得た。そのような訳で彼は次に王位に就くことを拒絶したが、彼の息子ヴィガタショーカーが王位に就いた。」)

¹⁵加えて山崎 [1979: 10–11] が指摘するように、ターラナータは『仏教史』第六章末 (Tāranātha 32.18–33.4) でアショーカー王伝を著すに際し四種の文献群に拠ったことを述べており、その中に *Ku na la'i rtogs brjod* (**Kuṇālāvādāna*)、*dpag bsam 'khri shing* (**Kalpalatā*) という書名が見られる。故にターラナータがクナーラの物語を著すに当たり、クシェーメンドラ本を参照していたと見てほぼ間違いのないであろう。

尚、BONGARD-LEVIN と VOLKOVA の研究は後期アヴァダーナ文献研究に糸口を与えた点で重要であるが、後述するように両氏の提示する原典の読みと翻訳には多々問題があり、これについては DE JONG [1965] の書評を読む必要がある。

BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965] と時を同じくして、MUKHOPADHYAYA [1963] は Divy 所収のアショーカ王伝説の新たな校訂原典を発表した。MUKHOPADHYAYA [1963] はその校訂原典に付した序文において Divy 所収のアショーカ王伝説の成立史、成立年代、著者問題についての考察を行った。MUKHOPADHYAYA [1963: i-lxxi] によれば、Kun の冒頭部にアショーカ王の人生の三段階に関する記述が存在すること、主人公クナーラの誕生と成婚の祝典を描写する箇所が存在することを除いて、Kun の所伝は Divy の所伝と一致するという¹⁶。

松村 [1984] は Hemacandra (12世紀) の *Parīśiṣṭaparvan* と Jinabhadra (八世紀) の *Viśeṣāvaśyakabhāṣya* の複註二本に存するジャイナ所伝のクナーラ太子伝の和訳研究を発表した。松村 [1984] はクナーラ太子伝の諸伝本を脚註に挙げ、MUKHOPADHYAYA [1963] を基にそれらの類型化を行い、Kun の所伝が Divy、『王伝』、『王経』と同系統に属することを指摘した。

METTE [1985] は「アショーカ王伝説のチベット伝承について」と題する論文において論考の半分を Kun に割いて、Divy、クシェーメンドラ本との比較考察を行った。METTE [1985] は Kun が Divy の所伝と顕著に相違する部分として次の五点が存在することを明らかにした。すなわち

- (a) 冒頭のアショーカ王の人生の三段階を記述する散文の存在
- (b) 王妃の主人公クナーラ誘惑場面における著しい詩節の付加
- (c) 王妃の出した偽の勅書の内容を述べる散文の存在
- (d) クナーラの帰還部分の内容付加
- (e) クナーラの真実語による目の回復

である。このうち (b)(c) には字句内容は一致しないもののクシェーメンドラ本に対応するものが見られ、特に (b) に見られる毒の喩えを述べる詩節の類似詩節がクシェーメンドラ本の第 56 詩節後半に存すると述べた。

METTE [1985] が先鞭を付けた Kun は岡本 [2001] により改めて検討され、岡本 [1999, 2001–2002] に和訳された。岡本 [2001] は Kun と Divy 及び漢訳の並行資料を入念に比較検討し、Divy 及び漢訳に見られないクナーラ太子の目の回復に関する因縁譚が Kun とクシェーメンドラ本に見られることを指摘した。

引田 [2006–2007] は P. L. VAIDYA の教本 (*Darbhanga: The Mithila Institute, 1959*) を底本にしてクシェーメンドラ本の和訳を行った。同訳ではその訳註において Divy、『王伝』、『王経』及び AAM の所伝との字句内容の違いが指摘されている他は岡本 [2001] に言及するのみであり、残念ながら METTE [1985] の研究業績は踏まえられておらず、Kun との対比も行われていない。

以上の研究史を振り返るに、先行研究はクシェーメンドラ本の源泉資料への直接的な言及を避けて来た感がある。特にクシェーメンドラ本と Kun は成立/翻訳年代が降ることもあり、写本

¹⁶MUKHOPADHYAYA の校訂原典とそれに付した序文については J. W. DE JONG の重要な書評があり、MUKHOPADHYAYA [1963] が COWELL & NEIL 本の読みと顕著に相違する読みを殆ど含まないベンガル・アジア協会蔵の Divy の二写本を校訂に用いた点、MUKHOPADHYAYA [1963] が原典を修正するに際し『王伝』、『王経』のうち、系統的に Divy から遠い『王伝』の仏訳に大部分で依拠し、系統的に Divy に近い『王経』を参照しなかった点などが批判されている (J. W. DE JONG, “Review of Sujitkumar MUKHOPADHYAYA, *The Aśokāvadāna*,” *IJ* 12 (1969–1970): 269–274)。DE JONG の指摘する点は概ね妥当であるが、“En outre, l’*Aśokāvadānamālā* a emprunté beaucoup au *Divyāvadāna* comme l’ont prouvé M. Bongard-Levin et M^{elle} Volkova dans leur édition du *Kuṇālāvadāna*.” (p. 271) という点を根拠に MUKHOPADHYAYA [1963] が AAM の借用詩節を対校しなかったことを難ずるのには問題があろう。確かに AAM 所収のアショーカ王伝はその大部分が Av-klp と Divy の借用詩節から構成されているが、AAM の編纂者は Av-klp と Divy の伝える内容を結び付ける為に借用詩節に相当数の改変を加えている。また編纂に当たって参照した写本が欠損していて判読不明な箇所を新たに読み変えたと思われる箇所もある。従って AAM 所収の Divy の借用詩節を Divy の本文校訂に用いるべきであったという見解は妥当ではあるまい。

校訂の基礎となる原典成立史研究への関心に乏しい本邦の学界では殆ど取り上げられることがなかった。翻訳研究における欧州の研究者の業績の無視がそれを端的に物語っている¹⁷。しかし近年 Martin STRAUBE や Jonathan A. SILK 等により Av-klp の研究が急速に進む状況下で、クシェーメンドラ本の源泉資料の問題を正面から取り上げることは早急の課題と言えよう。そこで以下に Divy を始めとするクナーラ太子伝の諸伝本とクシェーメンドラ本との比較検討を行い、クシェーメンドラ本の源泉資料の問題に光を当てることにしたい。尚、AAM とターラナータの所伝は BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965] によりクシェーメンドラ本に基づいていることが明らかであるので、以下考察の対象からは除外する。

3 クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の類型化

では以下に、METTE [1985]、岡本 [2001] を基にクシェーメンドラ本の内容を具体的に検討してみよう。クシェーメンドラ本は「クナーラ鳥に因む命名」、「上座の説法」、「継母の誘惑」、「タクシャシラー派遣」、「王の病」、「王子の失明」、「王子の帰還」、「父子の再会」という Divy、『王伝』、『王経』、Kun 所収のクナーラ太子伝の枠組みをなす構成要素を全て共有している。従ってクシェーメンドラ本は Divy、漢訳二本、Kun と同系統に属すると見て間違いはない。しかし全体的に見てクシェーメンドラ本は Divy、漢訳二本、Kun の所伝に比べて著しく簡潔である。それを端的に示す例として Divy、漢訳二本、Kun に見られる「バラモンの占術師によるクナーラの目の喪失についての予言」¹⁸、「アショーカの悪夢とその夢占いの内容」¹⁹、「クナーラの目を抉ることを拒むチャンダーラ」²⁰ に関する記述がクシェーメンドラ本には全て欠如している。そこでそれぞれの伝本が伝える説話構成要素を簡潔に示すならば、以下の図表の如くとなろう。

¹⁷近年の Divy 所収のクナーラ太子伝の翻訳研究としては、岩本裕『仏伝文学・仏教説話 (= 仏教聖典選 第二巻)』(東京: 読売新聞社, 1974), 337-378, 401-402; 定方晟『アショーカ王伝 (= 法蔵選書 9)』(京都: 法蔵館, 1982), 104-136, 224-225; John S. STRONG, *The Legend of King Aśoka* (= Buddhist Tradition Series vol. 6) (Princeton: Princeton University Press, 1983), 268-286; 平岡聡『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳—』(下) (東京: 大蔵出版, 2007), 134-148, 166-175 がある。このうちクナーラ太子伝の伝本研究史に言及しているものは岩本訳のみであり、後三者には BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965] 以降得られた研究成果への言及は見られない。特に STRONG の書は前半をアショーカ王伝説の論考、後半を MUKHOPADHYAYA 本に基づいたアショーカ王伝説の英訳に割いた研究書であるが、その記述する所は相当に杜撰なものであることが HINÜBER と DE JONG によって指摘されている (Oskar von HINÜBER, “Review of John S. STRONG, *The Legend of King Aśoka*,” WZKS 30 (1986): 203-204; J. W. DE JONG, “Review of John S. STRONG, *The Legend of King Aśoka*,” *IJ* 29 (1986): 70-73)。

¹⁸Divy 408.11-20; 『王伝』108b23-25; 『王経』144c23; Kun D231a1-3; P286a1-5; G330b2-4; N259b6-260a2.

¹⁹Divy 410.8-29; 『王伝』108c26-109a6; 『王経』145b14-29; Kun D232a7-232b6; P288a3-288b6; G332b4-333a6; N261b2-262a2.

²⁰Divy 411.13-413.2; 『王伝』109a21-24; 『王経』145c16-22; Kun D233a7-233b1; P289b4-6; G334a4-5; N262b4-5.

	Divy	王伝	王経	Kun	Av-klp
(1) アショーカ王の人生の三段階	×	×	×	○	○
(2) クナーラの技艺への習熟	×	×	×	○	○
(3) 春の到来	×	×	×	×	○
(4) 神々の存在の言及	×	×	×	○	○
(5) 毒の喩え	×	×	×	○	○
(6) アショーカ王妃による目の喪失の予言	×	×	×	○	○
(7) バラモンの占い師による目の喪失の予言	○	○	○	○	×
(8) 病床のアショーカ王を取り巻く妃	×	×	×	×	○
(9) 藩王の名クンジャラカルナ	×	×	×	×	○
(10) 勅書	×	×	×	○	○
(11) アショーカの悪夢・夢占い	○	○	○	○	×
(12) クナーラを目を抉ることを拒むチャンダラ	○	○	○	○	×
(13) クナーラの妻の誓いの言葉	×	×	×	○	○
(14) クナーラの奏でる歌	×	×	×	○	○
(15) クナーラを遮る門番	○	○	○	×	×
(16) クナーラを遮る園林の守衛	×	×	×	○	○
(17) 象の崇敬	×	×	×	×	○
(18) 王宮の描写	×	×	×	×	○
(19) 目の回復	○	×	×	○	○
(20) クナーラの息子の即位	×	×	×	○	○
(21) アショーカ王妃とタクシャシラーの藩主の処刑	○	○	○	○	○
(22) 鹿の眼を抉る獵師の物語	○	○	○	○	○
(23) 仏像の眼を抉り宝石を嵌める少年の物語	×	×	×	○	○
(24) 仏塔の修復を行う長者の物語	○	○	○	○	○

まず(5)(23)については、それぞれ既に METTE [1985: 305]、岡本 [1999: 937-938] によって Kun とクシェーメンドラ本に同内容の記述が存在することが指摘されている。

(19) は Divy、Kun、クシェーメンドラ本にのみ見られる要素であるが、この Divy の伝承は BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963: 116-117] が指摘するように、クシェーメンドラ本に基づく Divy の後代の改竄と見なすべきである。何故なら Divy の詩節が元来存在していたと理解した場合、クナーラの業と異熟の対一の対応関係が成り立たなくなるからである。すなわち Av-klp 及び Kun に説かれる業と異熟の関係は以下のように対応している。

前世の業	現世の果
五百匹の鹿の眼を抉る	五百生の間眼を抉られる
仏像の眼を抉り出し、宝珠を嵌め込む	継母の奸計により眼を抉られるが、再び眼を回復する
狗留孫仏の仏塔を修理する	高貴な家柄に生まれ、美しい容姿を得る

このうち「仏塔の眼を抉り出し、宝珠を嵌め込む」という内容の物語は岡本 [2001: 103-104] が指摘するように Divy、漢訳二本には見られない。ところが Divy の所伝は過去の因縁譚を欠いているにもかかわらず、「眼を回復する」という果報の記述を含んでおり、これでは業と異熟の関係が説明され得ないことになる。注意すべきはここでの真実語の力による眼の回復が、Kun (D240a3; P299b4; G344a3; N270b1-2) に gang des spyang phyung nas slar yang in dra nī la'i spyang bcug pa de'i

las kyi 'bras bu mig phyung nas yang thob pa yin no 「彼が〔仏像の〕眼を抉り出してから、再度ファイアの眼を入れ込んだという、その業の果が〔彼が〕眼を抉られた後、再度〔眼を〕得たことなのである。」とあるように業と無関係なものとして語られていないということである。従って BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963] の主張する改竄説をとって差し支えない。

最後に (21) に相当するクシェーメンドラ本の第 164 詩節の解釈を廻っては、王妃と藩主を寛恕したという BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963: 116] の解釈と王妃を処刑、藩主を寛恕したという DE JONG [1965: 237-238] の解釈があり、METTE [1985: 307] は前者を支持し、山崎 [1979: 218-219] は後者に理解を示しつつ「タクシャシラー藩主の寛恕」については判断を保留している。しかし問題となる詩節は「さて王は、〔王妃が太子に加えた〕恐ろしい危害と同等の報復を王妃に加え、タクシャシラーの王にも、彼が〔クナーラの目を抉り出すことを〕黙認してしまったので、耐え難い怒りの炎を放った」、即ち王妃と藩主を処刑したと解釈すべきである。従ってこの要素は全ての伝本が伝承するものと見て問題ない²¹。

以上からクシェーメンドラ本と Kun は Divy、漢訳二本が伝えていない説話構成要素を複数共有していることが知られる。では具体的な字句内容に一致は見られるであろうか。以下に Kun とクシェーメンドラ本の字句内容が合致する箇所を原文を引用しながら検討して行こう。

3.1 字句内容が一致する要素

3.1.1 アショーカ王の人生の三段階

まず冒頭部を見てみよう。Kun には既に METTE [1985: 304-305] が指摘しているように、アショーカ王が人生の三段階をおくったことを述べる次のような散文が見られる。

[Kun D227b3-4; P281a2-5; G325b1-3; N256a1-3]

l ku na la'i rtogs pa brjod pa la l 'di ltar rgyal po a sho ka'i na tshod gsum gyi tshad du gyur pa la l de na tshod dang po la ni 'dod pa'i a sho kar gyur to l na tshod gnyis pa la ni gtum pa'i a sho kar gyur te l gang gis btson ra bzang po byas nas skye bo bye pa'i srog brlag par gyur to l na tshod gsum pa la ni chos kyi a sho kar gyur te l gang gis chos kyi rgyal po pa brgyad khri bzhi stong rab tu gnas shing spyen phyed'o l

²¹問題となるのは次の詩節である。

ghorāpacāre sadṛśaṃ vidhāya
patnyāḥ pratīkāram atha kṣitīśaḥ l
krodhānalaṃ takṣaśilādhipa 'pi
tanmarṣaṇād duḥsaham utsasarja ll Av-klp 59.164 ll

DE JONG [1965: 237-238] は、当該詩節を “Ensuite le roi, après avoir puni sa femme de son crime terrible conformément (à son crime), envoya au roi de Takṣaśilā (sic) le feu de sa colère qui était difficile à supporter en raison de sa clémence.” 「そして王は、〔彼女の犯した罪に〕見合った恐ろしい大罪で自分の妃を罰した後、自身の情け深い心の故に、タクシャシラーの王に耐え難い怒りの炎を放った。」と解し、cd 句は「〔アショーカ〕王はタクシャシラーの王に対し怒りを露わにしたが、結局彼を許した (“... le roi manifesta sa colère au roi de Takṣaśilā mais finit par lui pardonner.”)」という内容を意味するとする。筆者は当初これを原典の破損と見る立場をとったのであるが、後日、京都大学の横地優子先生より私信があり、tanmarṣaṇāt の tan- はアショーカを指示する代名詞ではなく、タクシャシラーの藩主を指示する代名詞であり、これに従い cd 句を「タクシャシラーの王にも、彼 (タクシャシラーの藩主) が〔クナーラの目を抉り出すことを〕許してしまったので、耐え難い怒りの炎を放った。」と解釈すべきであるとの訂正意見を頂いた。この解釈をとるならば「妃を焚刑に処し、タクシャシラーの藩主住人を虐殺した」という Divy (418.1-2); 『王伝』 (110a14-15); 『王経』 (147b5-6); Kun (D238b6; P297b5; G342a4-5 N269a1) の内容と整合する。よってこの解釈をとることにする。

クナーラのアヴァダーナにおいて、かくアショーカ王の人生の段階を三つの期間に分けた時、彼は最初の時期には愛欲のアショーカとなった。第二の時期に、怒りのアショーカとなり、彼によって美しい牢獄が造られ、百万人の命が失われた。第三の時期には法のアショーカとなり、彼は八万四千の仏塔を建立し、開眼した。

ところがクシェーメンドラ本の第三詩節を見ると、以上の Kun の内容とほぼ合致する記述を見ることが出来る。

[Av-klp 59.3]

pūrvam sa kāmopapadena kāmī
caṇḍopacāreṇa tataś ca tīkṣṇaḥ |
*dharmopadhānena jagāma paścād
vivekapāke vayasi prasiddhim || 59.3 ||

以前彼は「愛欲」という、名前の前に添えられるその性格を表す呼称から知られるように、愛欲に耽り、そしてその後、残忍な振る舞いをなしたことから分かるように、粗暴な者となったが、後には、辯別能力の熟す年頃を迎えた時、仏法に依拠することで、名を知られるようになった。

この記述は Divy 及び漢訳二本には見られない。というのも unnecessary 記述であるからである。Divy 及び漢訳二本ではクナーラの物語の前でアショーカ王が死刑執行人を雇って多数の人民を虐殺したこと、仏教に帰依し八万四千塔を建立したことが語られるので、上記の記述を入れる必要はない。では何故この記述が存在しているかと言えば、これは Kun の原本となった **Kuṇālāvadāna* の編者がクナーラ太子伝をアショーカ王伝説群から抽出し、独立したアヴァダーナとした際、それまでの内容を総括して提示する目的で付け加えたことによる。また上記の文がクシェーメンドラ本に存在していることは、クシェーメンドラが詩形改稿に用いたクナーラ太子伝の祖形が、クナーラ太子伝を含んだアショーカ王伝説群から抽出されたものではなく、独立したアヴァダーナ **Kuṇālāvadāna* であったことを意味する。この推定はクナーラ太子伝が Av-klp のアショーカ王伝説を収録した章である第 69–74 章までの間ではなく、59 章と言う一見場違いとも思われる場所に収められている事実からも間接的に裏付けられよう。

3.1.2 証人としての神々の存在の言及・失明の予言

議論を元に戻そう。王妃ティシュヤラクシャーの誘惑に端を発するクナーラとティシュヤラクシャーの対話は、Kun とクシェーメンドラ本では大幅に内容が付加されており、METTE [1985: 305] が指摘するように、両者が一致する字句内容として毒の喩えに関する記述が存在していることは先に述べた通りである²²。しかしこの個所を更に詳細に見てみると、METTE [1985] の指摘し

²² 対応箇所は次の通りである。

[Av-klp 59.56]
rahaḥkṛtaṃ karma phalaty avaśyaṃ
na karmaṇām asti phalapraṇāśaḥ |
viṣaṃ nipītaṃ vijanāndhakāre
prāṇeṣu kiṃ na praharaty asahyam || 59.56 ||

人気のない場所でなされようが、業は必ず果をもたらします。諸業の果が消えてなくなることなどありません。〔身体にとって〕耐え難い毒を人気のない暗闇の中で飲んだとして、〔それが〕 どうして生命を害さないことがありますか。

ていない一致個所が存在している。すなわち毒の喩えの直前の詩節には、人気のない場所では悪事が露見することがないと主張する王妃に対し、不可視の神々が監視しているとして反論するクナーラの言葉を Kun とクシェーメンドラ本に次のような形で見るができる。

[Kun D230a4-5; P284b6-7; G329a5-329b1; N258b7-259a2]

l gang khyod kyis 'di na gnas kyang mi mthong ngo zhes smras na de re zhig nyon cig l
*'dir ni¹ gzi brjid 'bar ba'i shing la gnas pa'i me lhas bdag ni mthong gyur la l tshangs pas
mthong zhing brgya byin dag dang chu lha zla ba gshin rje dag gis mthong l gzhan yang
gzhal yas khang pa mchog na gnas pa gzhan gyis nges par mthong 'gyur na² l

汝が「ここにいても〔誰からも〕見られない。」と言うならば、まずお聞き下さい。ここで²³、燃えている燈明の木に住するアグニ神が私を見ており、ブラフマー神が見ており、インドラ神が見ており、ヴァルナ神、ソーマ神、ヤマ神達が見ています。更に、最高の御殿に住む他の〔神々〕が見ているからには・・・

[Av-klp 59.55]

na nirjane pāpam *upaiti guptim
antarhitah svargigaṇo 'tra sākṣī l
chāyā prayātā hi sahāyabhāvaṃ
jāyeva jānāti janasya sarvaṃ ll 59.55 ll

人気のない場所で〔犯された〕過失が明るみに出ないことなどありません。人目にはふれなくとも、ここには神々の集団という証人がおります。恰も妻の如くに、実に影は〔人に〕付きまとしており、人の全てを知っているのです。

また誘惑が不首尾に終わり、クナーラから咎められた王妃が逆上して目の喪失を予告する言葉は岡本 [1999: 89] が指摘するように、Divy、『王伝』、『王経』の所伝には見られないが、Kun には次のような偈文の形で見られる。

[Kun D230b2-3; P285a8; G329b6-330a1; N259a7]

l mig ni gnyis po gang yin pas ll khyod ni 'di na dregs thob pa l
l mi ring bar³ ni de dag gis ll rgud par gyur la blta bar bya l

目が二つあることで汝はそれに驕りを抱いている。遠からずそれ（二つの目）が衰えることとなるのを〔私は〕見るであろう。

¹*'dir ni l Ex conj.; 'di ni Σ. Cf. footnote.

²na l Σ; la P.

³bar l Σ; ba D.

[Kun D230a6; P285a1-2; G329b1-2; N259a2-3]

gang zhig dregs pas 'bras bu mngar () D; dngar Σ (also correct.) l tar dug za de ni nyams par mi
'gyur ram l

「驕り故に甘い果実にも似た毒を食する者、その者が傷つかないことがありましようか。」

²³四版共に'di ni であるが、'di ni を主語と解した場合、後の bdag ni と論理的に繋がらなくなる。従って*'di na 或いは*'dir ni という形が推定されるが、na → ni と伝承される可能性は低いので、terminative 助辞の欠落と見て*'dir ni の読みを提案する。

しかしここでもクシェーメンドラ本には Kun と同じく、クナーラの目を奪わんと王妃が予告する言葉を見ることが出来る。

[Av-klp 59.58]

ity arthanābhaṅgaparāṇmukhī sā
tiraskṛtā tena nitāntataptā |
harāmy avaśyaṃ tava netradarṣam
uktveti pāpā svapadaṃ jagāma || 59.58 ||

以上のように〔クナーラに〕邪険にされ、彼女は切なる望みを砕かれたので〔彼に〕顔を背け、激昂し、「必ずや、爾の目という驕りを奪ってくれよう。」と述べ、〔その〕邪悪な女は、自分の住処へと戻って行った。

従って王妃の誘惑場面では少なくとも三個所について、クシェーメンドラ本と Kun が等しく共有する字句内容が存在していることが指摘されよう。

3.1.3 カンチャナマーリカー妃の貞女の言葉

次にクナーラの王妃カンチャナマーリカーが盲目となったクナーラに貞女として添い遂げる決意を表明する場面を見てみよう。Kun の相当箇所は次の通りである。

[Kun D235a3; P292a3-4; G336b3-4; N264b3-4]

l skyes bu gang zhig dpal rgyal bud med ni || brtse bas rjes 'jug pa la ngo mtshar med |
l gang tshe dpal nyams pa na rjes 'brang ba'i || bud med de ni mi nang lha dang mtshungs |

貴方、吉祥なる王家の女性が、愛情の故に、〔夫に〕従い行くことは不思議ではありません。権力を失う者にも従うその女は、人間の中で神と等しいのです。」

これに相当するクシェーメンドラ本の記述は次の通りである。

[Av-klp 59.105-107]

tyajāmi na tvām aham āryaputra
naitat kulārhaṃ vratam aṅganānām |
yad āpadi svaṃ patim anyarūpaṃ
vibhūṣaṇaṃ śīlam iva tyajanti || 59.105 ||

satīvratam vittavatāṃ priyāya
yatnena veśyā api darśayanti |
patiḥ satīnām adhikaṃ priyas tu
vipadgato 'rthīva mahājanānām || 59.106 ||

yaṣṭiḥ prakṛṣṭā nayanāndhakāre
chāyā vipattāpapaṛīrameṣu |
padacyutānām viṣameṣu pumsām
nāsty eva jāyāsadrśaḥ sahāyaḥ || 59.107 ||

貴方、私は爾を捨てたりなどしません。それは良き一族に相応しい、女達の生き方ではありません。不幸に陥っている時、恰も品行という飾り〔を捨てるか〕のように、

姿を変えた自分の夫を捨てるなどということは。(105) 遊女でさえ、財ある男達のうちで愛する男に、努めて貞女としての生き方を見せます。貞女というものは、夫を殊の外愛するのです。実に偉大な者達が、不幸にある物乞いを〔愛する〕ように。(106) 男達にとって〔彼の〕目が見えない時には、妻に勝る優れた杖はなく、災いをもたらす熱の苦しみに憔悴している時には、妻に勝る日陰はなく、苦難にある時、地位から転落した〔男達〕には、妻に勝る伴侶は存在しないのです。(107)

クシェーメンドラ本の過度に粉飾された詩節内容に比し、Kunの内容は各脚七音節の短い詩節一連で表現された簡潔なものとなっている。しかし、いずれもカーンチャナマーリカーが逆境に遭った夫を見捨てないことが女の選ぶべき最上の生き方であることを述べる点では同じである。

3.1.4 クナーラを遮る園林の守衛

さて、タクシャシラーを追放されたクナーラ夫妻は苦難の旅の末パターリプトラの都に到着するのであるが、都に入ろうとした夫妻を遮る人物に Divy、漢訳二本とクシェーメンドラ本、Kun で相違が見られる。Divy 及び漢訳二本の記述は次の如くである。

[Divy 413.24–25]

yāvad aśokasya gr̥ham ārabdhā praveṣṭum | dvārapālena ca nivāritau |

そして、〔夫の手を引いたカーンチャナマーラーは〕アショーカ王の住処に入ろうとした。すると 門番によって〔彼等二人は〕阻止された。

[王伝 109b24–25]

至王宮門欲入宮中。守門之人不聽使入¹⁾。

[王経 146b11–12]

漸漸遊行至於本国欲入宮門。時 守門人不聽其前²⁾。

これに対する Kun とクシェーメンドラ本の記述は以下の通りである。

[Kun D235b5; P293a3–4; G337b3–4; N265a6–7]

de nas skyed mos tshal yid 'phrogs pa zhes bya ba rgyal po mya ngan med kyis rang gi bu ku na la'i don du byas pa zhig yod pa der zhugs par brtsams te zhugs pa dang | ji tsam na skyes mos tshal srung bas mthong nas smras pa |

そしてマノーラマという、アショーカ王が自らの息子クナーラの為に造った園林があり、〔クナーラが〕そこに入ろうとして入ると、丁度その時 園林の守衛が〔彼を〕見て言った。

[Av-klp 59.116]

śanaiḥ sa rājopavanāvalīnām
samīpam āptaḥ kṣaṇaviśramārthī |

¹⁾PRZYLSKI [1923: 290]: “Arrivés à la porte du palais royal, ils voulurent entrer dans le palais. Le gardien de la porte refusa de les laisser entrer.” 「王宮の門に至りて宮中に入らん欲するに、守門の人入らしむことを聴さず。」

²⁾蓮沢 [1936: 360]: 「漸々に遊行して本国に至り、宮門に入らんと欲しぬ。時に守門の人、其の前むを聴さず。」

udyānapālaiḥ parūṣapralāpair
amaṅgalatvāt pratiṣidhyamānaḥ || 59.116 ||

漸くにして、彼は王の領有する一連の園林の近くに辿り着いた。〔彼は〕ほんの僅かの間の安らぎを求めたが、園林の守衛達は〔彼が〕めでたくない者であるので、罵詈雑言を発して〔彼を〕追い払ったので・・・

Divy、漢訳二本がクナーラ夫妻を遮る人物を「門番」とするのに対し、Kun とクシェーメンドラ本は共に「園林の守衛」とする点で同じである。

3.1.5 クナーラの息子の王位継承

さてクナーラと父王アショーカが再会し、事の一部始終を知ったアショーカ王は王妃を処罰しようとする。クナーラはこれを制止し、自身が王妃に対し微塵の怒りも抱いていないことを述べる。そしてKun とクシェーメンドラ本では、クナーラが自身の言葉に嘘偽りがないことを証すべく真実語を発し、過去の善業の力で両眼を回復したことが述べられることは先に述べた通りである。加えてKun とクシェーメンドラ本ではここでクナーラの息子が王位を継承したことが物語られる。すなわち以下の通りである。

[Kun D238b4-5; P297b2-3; G342a2-3; N268b6-7]

l de nas rgyal po mya ngan med kyis ku na la rgyal tshab du dbang bskur bar zhugs pa dang
l ku na las smras pa l rgyal po chen po bdag la ni rgyal srid dgos pa ma mchis so l bdag gis
ni bden pa mthong lags so l l de nas gzhon nu skyed byed rgyal tshab du dbang bskur ro l

そして、アショーカ王は王子クナーラを灌頂させようとした。クナーラは言った。「大王よ、私は王権が欲しくありません。私は真実を見たのです。」と。そこで、〔クナーラの妻がクナーラとの間に〕産んだ王子が灌頂を受けた。

[Av-klp 59.163]

nṛpaḥ sukhotsāhakaram prajānām
virājamānaṃ nayanadvayena l
taṃ yauvarājye vimukhaṃ viditvā
tadātmajaṃ *sampratīnaṃ nyayūṅka || 59.163 ||

〔彼は〕生ける者達に楽と力を与え、両目の輝きによって光輝を放っていた。王はその彼が、王位継承に関心がないのを知り、彼の息子サンプラティン〔王位継承者〕に任じた。

Kun ではクナーラの息子の名は明かされないものの²⁴、クナーラの息子が即位したことが述べられる点では同じである。

以上から、クシェーメンドラ本とKunにはMETTE [1985]、岡本 [1999] が指摘する他にも複数の字句内容の一致箇所が存在していることが知られよう。

²⁴METTE [1985: 306] はクナーラの息子の名をKun (D235a4; P292a6; G336b5-6; N264b5) の de nas de gser phreng ma'i lag () DP; lags GN) pa la 'jus te l gzhon nu skyed byed phrag par khur nas 'di skad ces smras so という一文に基づいて*Janaka とするが、これは再考を要しよう。skyed byed (*janaka) という復元は確かに正しいが、ces pa 「～という名の」という語が抜けている点を考慮すると、敢えてskyed byed を固有名詞としてとる必要はなく、「そして彼はカーンチャナマラーの手を握り、〔彼女が〕産んだ息子〔を〕肩に背負って、次のように言った。」と解して問題ないように思われる。

3.2 字句内容は一致しないが、相当する要素が存在する事例

3.2.1 クナーラの技芸への習熟

以上 Kun とクシェーメンドラ本の字句内容が一致する要素を見て来た。次に字句内容は一致しないが、対応箇所が見られる要素を順に検討して行こう。Kun ではクナーラがカーンチャナマーリカーを妻とした後に、様々な技芸に習熟したことが次のような定型表現を用いて述べられる。

[Kun D229a2-4; P283a4-7; G327b4-6; N257b4-6]

glang po che'i gnyar bzhon pa dang | rta la bzhon pa dang | shing rta'i thabs dang | mda' gzhu'i thabs dang | lcags kyu's bsgyur ba'i thabs dang | mda' bo che 'phen pa'i thabs dang | lcags mda' 'phen pa'i thabs dang | thag mdung 'phen pa'i thabs dang | mdun du bsnur ba dang | phyir bsnur ba dang | bcad pa dang | dral ba dang | rgyang nas phog pa dang | sgra grags par phog pa dang | gnad du phog pa dang | mi 'chor bar phog pa dang | tshabs che ba dang | dgas pa dang | 'dzin stangs dang | gom stangs la byang bar gyur to |

巨象の首の上に乗ること、馬に乗ること、戦車を操る術、弓矢の術、鉤を用いて〔象を〕自在に操る術、大きな矢を射る術、鉄で出来た矢を射る術、縄投の術、正面から粉碎すること、背後から粉碎すること、斬ること、引裂くこと、遠方から攻撃すること、声を出して攻撃すること、急所を攻撃すること、違えず目標に攻撃を与えること、強烈な一撃を与えること、割ること、弓をあてがう法、歩行法に熟達した²⁵。

これに対応するクシェーメンドラ本の記述は以下の通りである。

[Av-klp 59.7]

vidyāvadhūnām vimalātmadarśaś
caitrotsavaḥ sarvakalālatānām |
sa sarvalokābhīmato babhūva
candrodayaḥ kīrtikumudvatīnām || 59.7 ||

彼は、学問という女にとっては曇りのない鏡であり、あらゆる技芸という蔓草にとってはチャイトラ月の始まりであり、名声という月待睡蓮の池にとっては月の昇天であり、ありとあらゆる人々が愛する者となった。

両者の字句内容に一致は見られない。Kun の武芸への習熟の記述が辛うじてクシェーメンドラ本の b 句に対応すると言った所であろうか。尤もクシェーメンドラ本が長い定型表現をそのまま詩形改稿したとは考えられないから、大鉦を振るって上記の定型文を一詩節に圧縮したとも考えられる。しかしクシェーメンドラ本の a 句ではクナーラが学問へ習熟したことが語られるが、これに対応する定型表現は Kun には見られない点に注意すべきである²⁶。

3.2.2 勅書

METTE [1985: 306] が指摘するように、クシェーメンドラ本と Kun には王権を掌握した王妃が偽の勅書を出す箇所に散文で勅書の内容を提示する部分がある。いずれも解釈の難しい文であるが、両者の内容を挙げるならば次の通りである。

²⁵ 以上の定型表現の用例については、平岡聡『説話の考古学—インド仏教説話に秘められた思想—』（東京：大蔵出版，2002），163ff を参照されたい。

²⁶ 学問への習熟に関する定型句については、平岡 前掲書 p. 163 を参照されたい。

[Kun D231b7–232a5; P287a8–287b7; G332a1–332b1; N261a1–6]

shin tu dpa' zhing stobs dang pha rol gnon pa thogs pa med pa'i rtsal gyis nmam par gnon pa thob pa'i rgyal po rgya mtsho bzhi dang l sa'i bdag po'i spyi bo'i⁴ cod pan gyis stan dang l rkang par yongs su gtugs pa l mya ngan dang bral nas myang na med pa l ma ga dha'i⁵ grong khyer nas pa ta li pu tra dang l rdo 'jog la gnas pa'i bar la *rgyun du⁶ mi 'chad par dge ba'i las kyi rtsom pas nye bar 'tsho ba l sde tshogs⁷ gsum pa'i grong khyer kyi skas la gnas pa'i skye bo rnams la ji ltar grong khyer pa rnams kyis shes par 'gyur ba de ltar khong du chud par gyis shig l 'dir nga'i bu zhes btags pa'i dgra bcos ma'i spyod pa 'jam pa la mkhas pas *sbyang⁸ ba'i sgyu'i⁹ bsgyings pas thal mo sbyar ba byas pa l rigs kyi sol bar gyur pa'i ku na la des l shin tu gcam bag¹⁰ gi tshul gyis kho bo phebs par byas nas l bag phebs pas gnod pa byed cing l tsun mo'i 'khor la lta bar byed pas l gang gi phyir 'di ni ma brtags par byed pa l snying rje med pa l 'jig rten pha rol spangs pa l pha'i chung ma la yongs su lta bas de'i mod la dngos po'i rjes su zhugs pa l gzugs kyi khengs shing ma'i phyogs la dregs pa 'phel bar byed pa l rigs kyi chos kyi gzhung lugs sun 'byin par byed pa'i mig gnyis myur du phyung nas bkren pa nyid du gyis la shin tu dengs pa'i gos bskon te l chung ma dang bcas pa phyi rol du skrod cig ...

非常に勇壮であり、猛々しさと百戦百勝をもたらす進軍に秀でていることで武勇を獲得した王は、四〔方〕の海と大地を支配する者の頭冠で座と足に跪かれる者であり²⁷、憂いを離れたが故に憂いなき者であり、マガダ国の都城からパータリプトラとタクシャシラーに住する者にまで絶えず²⁸、途切れることなく善き行いをなすことで、〔彼等に〕報いている者である。兵士達は、三つ目の都城(即ちタクシャシラー)という身の置き場に住まう人民に、〔彼等〕都城の住人達が理解するように知らしめよ。ここにいる、私の息子と〔言葉の上で〕理解されている、まがいの人当たりの良い振る舞いに長けた敵は、繰り返し行う術策の示現で〔人々を〕合掌せしめる者である²⁹。一族の火種となったこのクナーラは、極めて欺瞞的な、〔私への〕気遣いの振る舞いで私を遠ざ

⁴spyi po'i] Σ; skyi po'i D.

⁵ma ga dha'i] GN; ma ga dhā'i DP.

⁶*rgyun du] Ex conj.; rgyun Σ. Cf. footnote.

⁷tshogs] Σ; tshom D.

⁸*sbyang] Ex conj.; sbyar Σ. Cf. footnote.

⁹sgyu'i] Σ; rgyu'i D.

¹⁰bag] D; gsag Σ.

²⁷岡本 [1999: 92] は rgya mtsho 以下を「四つの海と、地上の王の頭頂の冠を伴って、坐処と足場とを征服する」と解釈する。しかしこれでは意味が通じない。JÄSCHKE の辞書には gtugs は “to touch” の意味で挙がっており、LC Suppl. は *Nāgānanda* 237, 238 の用例を根拠に gtugs が zhabs dag la と共に用いられた形で padayoh patati 「足元に跪く」の訳に充てられるとしている。これに従うならば、「〔征服した国々の王の〕頭冠で座と足に跪かれる者」と解釈することが可能である。

²⁸四版ともに rgyun であるが、これでは解釈が困難である。恐らく terminative が欠落しているものと思われる。従って *rgyun du として読む。

²⁹解釈の難しい箇所である。岡本 [1999: 93] は dgra bcos ... sbyar ba byas pa を「偽りの柔和な行為に長けた敵が造作した、まやかしの示現によって〔人々は〕合掌する。」と解するが、sbyar ba'i sgyu'i bsgyings pas の解釈が曖昧である。sbyar ba'i sgyu'i bsgyings pas を梵文に還元すると *yuktamāyāvijrmbhaṇena となろう。しかしこれでは「妥当な術策の示現」ないしは「結び付けられた術策の示現」となり意味が通じない。四版何れも支持しないが、*sbyang ba'i sgyu'i bsgyings pas 「繰り返し行う術策の示現で」の誤写の可能性が考えられる。そこでこの読みの可能性を提案する。

けて³⁰、恐れを知らなくなっているが故に危害を与え、後宮を眺める者であるが故に、それ故にこの者は思慮に欠けており、憐みの心を抱かず、来世を否定する者であり、父親の妻を目にして、その刹那に事を起こした者であり、美しい容姿を武器に尊大に振る舞い、母親に対して高慢な心を増長せしめる者である。〔この〕一族の〔遵守すべき〕ダルマの決まりを破る者の両眼を速やかに抉り出し、窮乏した態になせ。そして破れた衣を着せ、妻と共に〔都城の〕外へと追放せよ。

[Av-klp 2.207.13–209.8]

svasti śrīpāṭaliputrād asamasamarasāhasasamāsādītasamastasiṅdhusīmāsamucchaladaviralavimalayaśaḥkalāpakalitadhavaladukūlavasudhāvadhūdattabhogasaubhāgyagarvakhavīkṛtavipularipupratāpaḥ śāpa ivārātīramaṇīvilāsānām praṇatipratibimbītānantasāmantavaktraśataptraikapātrīkṛtavimalamaṇīpādapīṭhaḥ sukṛtakuśalakamalavikāsavāsareśvaraḥ sphītasauryaamauryamahāvamaśavanapañcānaḥ śrīmadaśokadevas takṣaśilādhipaṃ śrīkuñjarakarṇaṃ sambodhayati | yathā eṣa me nirapatrapaḥ kucaritamaitrī parisrastacāritraḥ putramukhaśatrur apavitraḥ śāstravidveṣī piṭṛkalatrābhiḥśaṣapātrīkṛtanetraśataptraḥ pāpānurūparūpauvanotsāhasāhasaḥ *samutpāṭitalocanamaṇir nirvastro nirvāsyatām janāñjanabhujāṅga ity asmadabhyarthanāpraṇayaḥ ||

幸あれ。吉祥なるパータリプトラより。

〔その数、激しさの点で〕無比なる干戈において〔発揮された〕勇猛さにより得られた、全ての（四方の）大海まで広く行き渡る、大いなる、汚れなき名声という飾りを付け、白い絹衣に身を包んだ大地という女が付与した楽と繁栄と誇りによって、夥しい敵のもたらず苦しみを退ける者であり、敵が妻との間で交わす戯れにとっては、恰も呪いの如きであり、その無垢な宝珠の足載せ台を、平伏して写し出された無数の藩王の蓮華のような顔を一つに収める場とし、善い行いから生まれる幸福という蓮華を開花させる太陽であり、最盛の極にある日種のマウリヤという偉大な一族の獅子である、吉祥なるアショーカ王は、タクシャラー藩主、吉祥なるクンジャラカルナに次のように申し伝える。ここに居る者（クナーラ）は、凶々しく、素行悪しき者に好意を寄せ、善き振る舞いを失い、息子の顔をした私の敵であり、不純な者であり、教書を厭い、蓮瓣のようなその目を〔自分の〕父親の妻への欲求という毒の器とし、邪悪さに見合った美しい容姿を備え、若く、堅忍不拔で、勇猛である。〔この者の〕宝珠のような目を抉り出し、衣を剥ぎ、追放せよ。〔この者は〕母親にとっても蛇のような輩である。以上の私の要求〔を満すこと〕を所望する次第である。

クシェーメンドラ本、Kun 共にアショーカが武勇誉れ高く、多数の国々の王を従えたこと、善政を布いたこと、クナーラに対する誹謗の言葉を並べていることでは同じであるが、字句内容の一致は余り見られない³¹。しかし注目すべきはクシェーメンドラ本の文体である。当該箇所冒頭のクシェーメンドラ本の文体には *anuprāsa* と長大な複合語が用いられており³²、文字の遊戯

³⁰当該箇所を岡本 [1999: 93] は「偽りの行いにより、私がいなくなると」と解釈するが、*shin tu gcam bag gi tshul gyis* の訳が不明確である。しかし *shin tu gcam* (**atikrtrima*) と *bag gi tshul* (**apramattaśīla*) を結ぶ助辞が抜けているので解釈が難しい。ここでは同格と解釈し「極めて欺瞞的な、〔私への〕気遣いの振る舞いで」の訳語を充てる。また *phebs par byas nas* は使役の意味でとり、「私を遠ざけて」と解釈すべきであろう。

³¹確かに字句の一致は余りないが、手紙の文面が“völlig anders”という METTE [1985: 306] の発言は言い過ぎであろう。

³²*anuprāsa* の定義については、GEROW [1972: 102–107] を参照されたい。*anuprāsa* には後代の詩論家によって数種の下位分類がなされたが、この勅書に見られる *anuprāsa* は *Agnipurāna* 343.4–5 及び *Rudrata* (10

に耽っている感すら窺える。クシェーメンドラの Av-klp における anuprāsa の使用は夙に指摘されている点である³³。当該個所は韻律的制約を受けることがなく、文体に様々な修辭的技巧を加えることが可能であるから、Kun とクシェーメンドラ本の字句内容の相違はクシェーメンドラによる改編の所産と見て問題なからう。

3.2.3 クナーラの奏でる歌

METTE [1985: 306] が指摘するように、タクシャシラーを追放されたクナーラがパーティリプトラへの途上で施しを得る為に口にする歌の内容は Kun 及びクシェーメンドラ本に見られるが、その字句内容は一致しない。Kun の詩節は以下の通りである。

[Kun D235a7–235b2; P292b3–6; G337a3–6; N265a1–3]

l bsnyen¹¹ bkur chen po las nyams shing || 'ong ba skal dman sems can ni l
l slong¹² mos rgyu bar byed pa la || chos ldan skyes bu su zhig ster l
l pha dang ma spangs longs spyod dang || zas dang mal cha khyim med pa l
l nyam ngar rab zhugs long ba la || slong mo ma yis ster bar mdzod l
l longs spyod glog 'gyu dang 'dra zhing || zil pa'i chu thigs 'dra pa la l
l 'gro bkren¹³ snyan tshig sbyin pa yis || snying po myur du len par gyis l
l dbul po skra ni brdzes gyur cing || 'jig rten kun gyis brnyas¹⁴ pa dang l
l dpal nyams khyim khyim slong mos rgyu || nga la ma yis slong mo byin l

「大いなる敬意を受けずやって来る薄幸な有情が、施しを求めて彷徨ったとしても、かの行い正しき者の一体誰が〔彼に〕施したりしようか。父母を捨て、財と食物、寝具、家庭を持たず、苦難に陥っている盲人に母は施しを施されよ。財は雷光の如きものであり、露の雫の如きものである。そして、貧しい者は美しい言葉を与えるので、〔その〕真髓を速やかに受け取られよ。惨めな者は頭髪を束ねて、あらゆる世間の人々から軽蔑され、誉れを打ち砕かれ、施しを求めて家から家へと歩き回る。我に母は施しを施されよ。」

¹¹bsnyen] Σ; bden D.

¹²slong] D; slongs Σ.

¹³bkren] DN; bkron PG.

¹⁴brnyas] D; brnyad Σ.

世紀頃)の *Kāvyaḷāṅkāra* 2.29–30 に定義される *lalita* の特徴と合致する。

³³この点については STRAUBE [2006: 35–38] を参照されたい。この技巧が顕著な詩節として第 10(11) 章 *Sundarīnanda* 第一詩節が挙げられよう。

[Av-klp 11(10).1]

te ke 'pi sattvahitasam̐nīhitānukampā

bhavyā bhavanti bhuvane bhavabhītibhājām |

vātsalyapeśaladhiyaḥ kuśalāya puṁsām

kurvanti ye param anugraham āgrahēṇa || 10(11).1 ||

衆生を利益する為に憐憫の心に向けた者達、彼等は誰であれ、世界における輪廻生存に恐れを抱く〔人々〕にとって吉祥なる者達である。〔何故なら〕彼等は愛情の故に心が温和であり、人々の幸福の為に好意によって無上の恩恵を施すのであるから。

上記に対応するクシェーメンドラ本の詩節は次の如くである。

[Av-klp 59.111–113]

gurujanakopasamudgama-
rāhunigīrṇaprabhāvasūryāṇām |
vitathaparivādaviplava-
kṛṣṇadinakṣapitacaritacandrāṇām || 59.111 ||

guṇigaṇadūṣaṇanipatita-
guṇavararatnaprabhādaridrāṇām |
bahutaraduṣkṛtapariṇati-
pavanāhativigatanetrādīpāṇām || 59.112 ||

bhavavipulajalavidyut-
taralataśrīprakāśarahitāṇām |
punyaiḥ prasarati punar api
dharmasmarāṇaṃ navālokaḥ || 59.113 ||

父の怒りから現れ出た者であるラーフにその力を飲み込まれてしまった太陽、嘘の醜聞に起因する不幸という暗い夜の日にその動きを止められてしまった月、有徳者を難ずることに陥り、優れた美德という宝珠の輝きを欠いている者達、数多の過失の異熟という風に打たれて目という燈明を消失した者達、輪廻生存という大きな雨雲から起こる稲妻のように儂い世俗の富に執着するがゆえに輝きを失った者達に、法の想起という新しい光明が、福德を通じて、再び訪れてくれるだろう。

両者は並行詩節というには距離があるようである。しかしここで注目すべきは韻律の問題である。Kunの一連の詩節は七音節四脚であり、恐らくその祖形では *anuṣṭubh* で表現された詩節であったと推定される。ところがクシェーメンドラ本では対応箇所は全て *gaṇacchandās* (正確には *āryā* と *gīti*) である。クシェーメンドラは Av-klp において各章冒頭の題辞と末尾の内容総括の詩節の韻律にしばしば *jāti* を用いることがある。しかし物語の内部で用いている箇所は当該箇所を除いて見られない³⁴。Kunに見られる一連の詩は METTE [1985: 306] が指摘するように歌曲的な内容である。故にクシェーメンドラ本の種本の詩節は Kun と同様のものではなかったのが、クシェーメンドラによって韻律形式と内容に大幅な改編を加えられたものと思われる。クシェーメンドラが *Bhāratamañjarī* 3.543 において同様の手法を用いていることも、この改編の推定を裏付ける証左となろう³⁵。従ってクシェーメンドラ本と Kun に字句内容の一致が見られない以上の三要素についても、クシェーメンドラ本の種本においては Kun とほぼ同一であったものが、クシェーメンドラにより改編を加えられたものと見ることが出来よう。

³⁴Av-klp に見られる韻律については、拙論「クシェーメンドラの仏教説話に見られる韻律について」『哲学』62 (広島哲学会, 2010): 130–133 を参照されたい。

³⁵拙論「クシェーメンドラの仏教説話に見られる文学技巧について—「クナーラ・アヴァダーナ」を中心に—」『哲学』61 (広島哲学会, 2009): 115–128 を参照。当該論文はクシェーメンドラ本を文学作品の側面から検討することを主眼とした論文であるが、備忘録的な内容であり文献学的精査が不十分であった。本論と併せて批判的に参照されたい。

3.3 クシェーメンドラ本に固有な要素

尤もクシェーメンドラ本に固有の要素がない訳ではない。例えば3の図表に示した要素(3)春の到来(8)病床のアショーカ王を取り巻く王妃(9)藩王の名クンジャラカルナ(17)象の崇敬(18)王宮の描写は他の並行伝本の何れにも見出し得ない。しかしこれらはクシェーメンドラの付加ないしは改竄と推定できる。すなわち(8)藩王の名クンジャラカルナについては、クシェーメンドラの常套手法である固有名詞の付加と考えられる³⁶。また(3)春の到来(8)病床のアショーカ王を取り巻く妃(17)象の崇敬(18)王宮の描写は古典詩の常套文句を連ねた部分であり、物語の進行上殆ど意味を持たない。故にこれら四要素はクシェーメンドラが物語の肉付けとして付け加えた部分と見てほぼ問題ないであろう。また微細な点であるが、クシェーメンドラ本は内臓疾患に侵されたアショーカの駆虫に用いられた薬草名について Divy、漢訳二本、Kun と相違を見せる。すなわちクシェーメンドラ本の記述は次の通りである。

[Av-klp 59.84]

ūrdhvaṃ pracāreṇa javād adhaś ca
śakṛt sṛjantaṃ tam avekṣya hantum |
sā pippalīhiṅguviḍaṅgayuktaṃ
cikṣepa tasmai maricādivargam || 59.84 ||

素早く〔体内を〕上下して動き回り、糞を排出しているそれ(虫)を見て、〔それを〕殺す為に、彼女(ティシュヤラクシャー)は畢鉢の実、阿魏の樹脂、ヴィダングの実に加えて、胡椒の実等の類を、それ(虫)に振り掛けた。

これに対する Divy、漢訳二本、Kun の記述は次の通りである。

[Divy 409.15–18]

tasya pakvāsayasthāne | antrāyāṃ kṛmir mahān prādurbhūtaḥ | sa yady ūrdhvaṃ gacchati
tenāśuciṃ pragharati athādho gacchati adhaḥ pragharati | yāvat tatra maricān peṣayitvā
dattaṃ na ca mriyate | evaṃ pippalī śṛṅgaveram ca |

[Kun D231b2–3; P286b8–287a2; G331b1–2; N260b2–3]

de zhu ba'i gnas na rgyu mar 'bu chen po zhig byung ste | de steng du 'gro ba dang | de'i
ngan sgyugs gyen du 'byung ngo | gal te thur du 'gro na ni 'og tu 'byung ngo | des der na le
sham btags te blugs kyang ma shi'o | de bzhin du pi pi ling dang | sring ga dang lan rtshwa
la sogs pa *blugs¹⁵ pa nas...

彼(殺された牛飼)の消化の場所(腹)にある腸に一匹の大きな虫が現われ、〔死体の〕上方に行くと、それ(虫)の糞が上方に現れた。〔虫が〕下方に行くと、下に現れた。彼女(ティシュヤラクシャー)はそれ(虫)に胡椒の実を粉末にして振り掛けたが、〔虫は〕

¹⁵*blugs] Ex conj.; blud Σ. Cf. footnote.

³⁶同様の例については岡野潔「Kṣemendra の Daśakarmaplutyavadāna—Bodhisattvāvadānakalpalatā 第 50 章の校訂と訳—」『南アジア古典学』2 (2007): 202–203 を参照されたい。尤も単純に考えればクシェーメンドラ本の種本にクンジャラカルナの名が存していたと考えられなくもないが、それを実証するにはそれなりの証拠が必要となろう。

死ななかつた。同様に畢鉢の実と生姜の根茎と塩等をふり掛けた〔が死ななかつた〕³⁷。

[王伝 108c12-15]

見其腹中有一大虫。虫上去時糞亦随去。虫若下時糞亦逐去。於是便以末椒而与。亦復不死。種種辛物用持与之。猶故不死³⁾。

[王経 145a22-27]

於熟蔵中有一大虫。虫若上行糞從口出。虫若下行便從下出。若左右行諸不淨汁從毛孔出。時王夫人。磨摩梨遮以置虫辺。而虫不死。復以畢鉢以置虫辺。虫亦不死。復以乾薑以置虫辺。虫亦不死⁴⁾。

すなわち Divy と『王経』、Kun に見られる「生姜の根茎 (*śṛṅgavela*)」、「塩 (*lan Itshwa*)」に相当する語がクシェーメンドラ本では「阿魏の樹脂 (*hiṅgu*)」、「ヴィダングの実 (*viḍaṅga*)」に置き換わっているのである。しかしこの点についてもクシェーメンドラの改竄を支持する有力な証拠がある。すなわち「ヴィダングの実」という語は医学書 *Carakasamhitā* 中の内臓寄生虫駆虫法を記した *Vimānasthāna* 第七章、及び同箇所に対応する *Suśrutasaṃhitā* の Uttarantra 第 54 章に用例が見られる³⁸。また「阿魏の樹脂」が内臓寄生虫駆虫に用いられていたことについては、クシェー

³⁾PRZYLSKI [1923: 285]: “Elle vit que dans le ventre il avait un grand ver. Quand le ver remontait, les excréments étaient évacués de ce côté; quand il descendait, les excréments sortaient par le bas. Alors elle donna au ver du poivre en poudre, mais il ne mourut pas. Elle employa toutes sortes de matières âcres et les donna au ver, mais cela ne le fit pas mourir.” 「その腹中に一の大虫あるを見る。虫上に去く時、糞も亦た随ひて去く。虫若し下る時は糞も亦た逐ひて去く。是において便ち末椒を以て与ふ。また死せず。種々の辛き物を用ひて之に与ふ。猶、故に死せず。」

⁴⁾蓮沢 [1936 :355]: 「熟蔵中に一の大虫有り、虫若し上に行けば、糞は口より出で、虫若し下に行けば、便ち左右に行けば諸の不淨の汁は毛孔より出でたり。時に王の夫人は摩梨遮を磨して、以て虫辺に置くも、虫は死せず、復、畢鉢を以て、以て虫辺に置くも、虫は亦死せず、復、乾ける薑を以て、以て虫辺に置くも、虫は亦死せず」

³⁷⁾四版共に *blud pa nas* であり、岡本 [1999: 92] は「飲ませるようにして与えた」と解するが、Divy の相当箇所 *pesayitvā*、及び『王経』の相当語「磨」に従い、**blugs pa nas* に修正すべきであろう。尚、岡本 [1999: 92] が指摘するように、Divy、漢訳二本は「塩」(*lan rtshwa*) に相当する語を欠いている。

³⁸⁾*Carakasamhitā* 3.7.17: ... *mūlakasarsapalāsūnakarañjaśigrumadhuśigrukharapuspābhūstr̥ṇasumukhasurasak-utharakagaṇḍīrakālamālakaparnāsakṣavakaphanijjhakāni sarvāny athavā yathālābham tāny āhrtāny abhisamīkṣya khaṇḍasāś chedayitvā prakṣālya pānīyena suprakṣālitāyām sthālyām samāvāpya gomūtreṇārdhodakenābhiścya sādhyet satatam avaghaṭṭayan darvyā tam upayuktabhūyiṣṭhe 'mbhasi gataraseṣv auśadheṣu sthālīm avatārya suparipūtam kaṣāyam sukhoṣṇam madanaphalapippalīviḍaṅgakalkatāilopahitam svarjikālavānitam abhyāsicya vatau vidhivad āsthāpayed enam ... (「或いはまた、ムーラカ、サルシャバ、ラシュナ、カラシヤ、シングル、マドウシングル、カラブシュパー、ブーストリナ、スムッカ、スラサ、クテラカ、ガンディーラ、カーラマーラカ、パルナーサ、クシャヴァカ、パニツジャカという〔以上〕それらが全て得られた通りにもたらされたのを確認してから、〔それらを〕細かく刻み、水に曝し、よく消毒された容器にとり、半量の水を加えた牛糞と混ぜ、絶えず匙で攪拌しながら煎じるべきである。水がほぼ蒸発し、葉の水分がなくなった時点で容器を下ろし、よく精製されて粗熱のとれたその煎薬にマダナの実、畢鉢の実、ヴィダングの実の搾り滓、胡麻油を混ぜ、炭酸曹達(?)で塩味を加え、浣腸器に注ぎ、規定通りにそれを処方すべきである。)」*

Suśrutasaṃhitā 6.54.20cd-22: *eṣām anyatamaṃ jñātvā jighāmsuḥ snigdham āturam || surasādivipakvena sarpiṣā vāntam āditāḥ | virecayet tīkṣṇatarair yogair āsthāpayec ca tam || yavakolakulatthānām surasāder gaṇasya ca | viḍaṅgasnehayuktena kvāthena lavaṇena ca ||* (「これらの〔寄生虫の〕うちいずれか一つを駆除しようとする者は、スラサ等と一緒に煎じた酥が患者に効能をもたらしたのを知り、まず初めに吐剤を施し、非常に刺激性のある治療薬(粘液素を除去する下剤)を用いて、〔患者に〕通じをつけるべきである。彼(患者)にヴィダングの実〔からつくられた〕油、〔海水〕塩を混ぜたヤヴァカやコーラ、クラッターの煎薬、〔同じく〕スラサを始めとする一群の煎薬を用いて、油性浣腸を施すべきである。)」

メンドラの年代とは稍隔たりがあるものの、13世紀カシミールの医学者ナラハリ (Narahari) の編纂した植物、鉱物学辞典 *Rājanighaṇṭu* にこれを裏付ける記述がある³⁹。従ってクシェーメンドラが何故当該個所にこのような改竄を加えたかは不明であるが、薬草名の相違部分もクシェーメンドラによる改竄と見て大過はなかろう。

3.4 クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」と *Ku na la'i rtogs pa brjod pa* の祖形

以上から、クシェーメンドラ本には多数の改竄や内容付加の形跡が認められるものの、その骨子は Kun の所伝と一致し、両者は同じ祖形 **Kuṇālāvadāna* に基づくと考えられよう。そこで以下にこの **Kuṇālāvadāna* の祖形の問題について考察を加えてみよう。

岡本 [1999, 2001–2002] の翻訳研究からも知られるように、Kun は Divy 及び『王経』の所伝に逐語的に一致する箇所が多く、『王伝』と一致する箇所は少ない。従って Kun が **Kuṇālāvadāna* を逐語的に翻訳したと見るならば、この伝本は LÜDERS [1926] の仮定する Divy と『王経』二本の祖形伝本 **Aśokarājasūtra* から抽出され⁴⁰、大幅な付加を加えられて成立した新しい伝本と見なせよう。しかし以上を俄に断定することは出来ない。それを端的に示す例を見てみよう。それはパー

³⁹*Rājanighaṇṭu* 5.74: *hṛdyaṃ hiṅgu kaṭuṣṇaṃ ca krimivātakaphāpahaṃ | vibandhādhmānāsūlaghnaṃ cakṣuṣyaṃ gulmanāśanam ||* (「阿魏 (hiṅgu) は 風味が佳く、刺激性があり、温かく、内臓寄生虫による体風素と粘液素を取り除き、便秘、鼓腸、疝痛を除き、視力に効果あり、腹部腺腫を取り去る。」)

⁴⁰LÜDERS [1926] は中央アジア・キジル出土の断片写本を基に童受 (Kumāralāta、二世紀中頃) の *Kalpanāmaṇḍitikā* の原典を復元し、その序文において Divy、『王伝』、『王経』所収のアショーカー王伝説中に見られる *Kalpanāmaṇḍitikā* 所収の三つの並行話に注目してアショーカー王伝説の成立史についての論考を行った。LÜDERS [1926: 71–132] は Divy、漢訳二本の祖形として **Aśokarājasūtra* という祖形伝本の存在を推定し、この祖形伝本はアショーカー王伝説とウバグプタ長老伝説という別個の二伝説の合わさったものであり、これに *Kalpanāmaṇḍitikā* 所収の二説話 (半アーマラカ布施物語、マラーの教化物語) が挿入され三世紀頃成立したと主張した。更に LÜDERS はこの **Aśokarājasūtra* の一伝本は四世紀頃、**Aśokarājasūtra* の内容とかなり微細な点で異なる **Aśokarājāvadāna* という新たな一伝本として存在しており、306年に安法欽が漢訳した『王伝』はこの **Aśokarājāvadāna* に基づいており、512年に僧伽婆羅によって漢訳された『王経』は、幾らか改竄を受けているものの祖形 **Aśokarājasūtra* の形をほぼ忠実に再現したものと考えられ、Divy の編者は僧伽婆羅の漢訳と同一祖形に遡る **Aśokarājasūtra* を基に、現行 Divy に見られるアショーカー王伝説を著したと推定した。

Kalpanāmaṇḍitikā の著者名と題名を巡っては、これを童受作 *Kalpanāmaṇḍitikā* とする LÜDERS 説と馬鳴作 *Sūtrāṅkāra* とする LÉVI 説があり、長らく決着を見なかったが、1982年に至り Michael HAHN の研究によって漸く決着を見た。HAHN は *Kalpanāmaṇḍitikā* の内容、表題、作者名について再検討し、チベット大蔵経テンギュルに存する *Kalpanāmaṇḍitikā* の序文及び第一章 *Drṣṭāntapaṅkti* の蔵訳と馬鳴の作とされる *Sūtrāṅkāra* の漢訳『大莊嚴経』の対応箇所の内容を読み比べた結果、物語自体とは左程関わりを持たない教義の応用を短く述べる結語部分を除き、両者が隙間なく対応していることを明らかにした。また両者の散文部と韻文部の位置が変わっている点については、訳者鳩摩羅什の漢訳において頻繁に見られる現象であり、漢訳に二箇所見られる付加部分はそれぞれ繰返し部分、詩節の内容を言い換えた修飾部分であって問題視され得ないとした。次に作品名を *Sūtrāṅkāra* とした LÉVI の所説については、中央アジア写本に作品名が *Kalpanāmaṇḍitikā* ないしは *Kalpanālamkṛtikā* と記されている点に着目し、鳩摩羅什が *Kalpanālamkṛtikā* という表題を漢訳するに当たり、意味の明瞭な後分要素 *alamkṛtikā* に「莊嚴」を充て、多義的に解釈可能な前分 *kalpanā* を出来る限り無難な訳語である「経」で訳した可能性があることを指摘した。また蔵訳の導入詩節に存する論師の名 'Tsher に *Aśvagoṣa* の訳語を充て、作者を馬鳴説と見なした LÉVI の見解については、蔵訳者が *Aśvagoṣa* 標準的な訳語 *rTa dbyangs* を充てなかった可能性が低いこと、'tsher の語が「嘶く」の意味の外に「輝く」を意味し、漢訳の導入詩節に見られる論師の名「弥織」(**Mecaka*) を蔵訳者が後者の意味で訳したものであるとして、これを否定した (Michael HAHN, "Kumāralātas *Kalpanāmaṇḍitikā* *Drṣṭāntapaṅkti*: Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha," *ZAS* 16 (1982): 309–336)。本論では HAHN の見解に従い、童受説をとることとする。

タリプトラに帰還したクナーラ夫妻が園林を追放され、王宮に遁竄したことを述べる箇所であるが、Kun とクシェーメンドラ本の記述は次の通りである。

[Kun D236a3; P293b4; G338a4-5; N265b6]

ji tsam na rim gyis pa'i glang po che'i bres su mtshan mo gnas bcas par gyur to l

そこで、次に〔クナーラは〕父の巨象の飼育場に夜の間身を寄せるようになった。

[Av-klp 59.117ab]

niḥsamśrayaḥ samśrayam tḥamānaḥ

sa hastiśālām nrpater viveśa l 59.117ab

彼（クナーラ）は寄る辺なく、身を寄せる場所を求めて王の象の飼育場に入った。

クシェーメンドラ本と Kun はクナーラ夫妻が「象の飼育場」に身を寄せたことを述べる。これに対し、Divy と『王経』の所伝では「象の飼育場」に相当する語は「車の舎」ないしは「車馬の厩」である。

[Divy 413.25]

yāvad rājño 'śokasya yānaśālāyām avasthitau l

そこで〔クナーラ夫妻は〕アショーカ王の車置場に留まった。

[王経 146b12-13]

既不得前而復還出住 車馬厩⁵⁾

ところが『王伝』の相当箇所の記述は次の通りである。

[王伝 109b26]

駒那羅即於門辺 象厩 中宿⁶⁾

すなわち『王伝』の記述はクシェーメンドラ本と Kun と同じく、クナーラ夫妻が身を寄せた場所を「象の飼育場」としているのである。従ってここで **Kuṇālāvadāna* の源泉について次の可能性が考えられよう。

- (i) **Kuṇālāvadāna* の作者は Divy、『王経』の祖形 **Aśokarājasūtra* からクナーラ太子伝を抽出し、『王伝』の祖形 **Aśokarājāvadāna* を参照しながら「車置場」とあった記述を「象の飼育舎」に改編した。
- (ii) **Kuṇālāvadāna* の作者がアショーカ王伝説群からクナーラ太子伝を抽出した段階で「象の飼育場」に関する記述は存しており、「象の飼育場」の記述は『王伝』の祖形 **Aśokarājāvadāna* と Divy、『王経』の祖形 **Aśokarājasūtra* との二系統が分かれる以前の段階に遡るものである。

(i) の可能性をとった場合、**Kuṇālāvadāna* の作者は作為的に物語の進行上重要な役割を果たす複数の要素を混ぜ合わせると考えられるから、Kun、クシェーメンドラ本と『王伝』が合致するそのような要素を広範囲に涉って見出し得る筈である。しかし三者が合致する個所は当該個所を除いては見られず、また Kun と『王伝』が合致する記述を探しても、些細な語の一致を除いて共通の記述は見出されない⁴¹⁾。従って (i) の可能性より寧ろ (ii) の可能性が高いことが推測されよう。

⁵⁾ 蓮沢 [1936: 360]: 「既に前むを得ざれば、復、還って出で 車馬の厩 に住し」

⁶⁾ PRZYLSKI [1923: 290]: “Alors Kunala passa la nuit près de la porte, dans l'écurie des éléphants.” 「駒那羅即ち門辺の象厩中に宿る。」

⁴¹⁾ Kun と『王伝』が合致する記述は、岡本 [1999, 2001-2002] の脚註で指摘されている。

4 結論

本考察から導かれる結論は以下の通りである。

- クシェーメンドラ本と Kun は同一祖形に基づく。
- この祖形は 11 世紀までにアショーカー王伝説群から抽出され、**Kuṇālāvadāna* と称する独立したアヴァダーナとなった。クシェーメンドラ本の冒頭にアショーカー王の人生の三段階の要約が見られることは、クシェーメンドラが Av-klp 第 59 章の種本とした「クナーラ・アヴァダーナ」が Divy 所収のアショーカー王伝説群から抽出されたものではなく、この独立したアヴァダーナであったことを示唆する。
- この **Kuṇālāvadāna* は多くの点で Divy、『王経』に一致する伝承を継承しているが、Divy、『王経』及び『王伝』の祖形に溯ると思われる古い記述を含んでいた。
- **Kuṇālāvadāna* は 11 世紀にそれぞれチベット訳、クシェーメンドラによって詩形改稿され、現行の形を整えるに至った。但し Kun の訳者が **Kuṇālāvadāna* をほぼ逐語訳したのに対し、クシェーメンドラは詩形改稿に際しかなり自由な立場をとっていた。春の描写、象の崇敬場面の挿入、薬草名の改竄、継母とクナーラの対話と勅書の文面の大幅な粉飾などはクシェーメンドラの改作の所産である。

残された課題としては、クシェーメンドラ本及び Kun に見られる付加部分が如何なる源泉資料に拠ったものかを検討することである。PRZYLSKI [1923: 98–105] はアショーカー王伝説の東西二伝承の存在を推定し、両伝承がカシミールにおいてクシェーメンドラによって混ぜ合わされ、Av-klp 第 69–74 章に見られるアショーカー王伝説が成立したという説を立てている。この推定を考慮するならば、クシェーメンドラ本及び Kun の付加部分が東方伝承に基づいてなされたという憶測も成り立とう。但しこれを実証するには Av-klp 第 69–74 章に含まれるアショーカー王伝説の源泉資料も併せて検討する必要がある。これについては目下原稿を準備中であるので、別稿で改めて論じる予定である。

5 クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」試訳

5.1 和訳に当たって

5.1.1 対校に用いた梵文写本及びチベット訳

以下にクシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の和訳を試みる。和訳に際してはピリオテカ・インディカ版 (Calcutta: Baptist Mission Press, 1888–1997) を底本とし、これに対する DE JONG [1979] による本文批判及び以下の梵文写本とチベット訳を対校した⁴²。

- A ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 (BENDALL, Cat Add. 1306)、貝葉、プロト・ベンガル文字、1302年筆写、fols. 226b3–238b1
- B ケンブリッジ大学図書館所蔵本 (BENDALL, Cat Add. 913)、紙、デーヴァナーガリー文字、筆写年代不明、fols. 20b5–29b3
- E ネパール・ナショナル・アーカイブス所蔵写本 (NGMPP reel #B 95/5)、紙、ネワール・デーヴァナーガリー文字、1713年筆写、fols. 24b1–33a4
- Z ダライラマ五世版 (東北目録#7034) fols. 370a3–388b6 (Sanskrit & Tibetan)
- D デルゲ版 #4155 Khe50a3–69a2 (Sanskrit & Tibetan)
- P 北京版 #5655 Ge223a2–233a8 (Tibetan only)
- G ガンデン版 (天津古籍版) Ge278a4–290b2 (Tibetan only)
- N ナルタン版 #3646 Ge196a7–205b6 (Tibetan only)

また先行訳として引田 [2006–2007] による和訳を参照した⁴³。

5.1.2 チベット系梵文音写の系統

原典訳を行う前に、STRAUBE [2006, 2008] の先行研究を基に、上記梵文ネパール写本、ダライラマ五世版、デルゲ版梵文音写の系統を明らかにしておく⁴⁴。

⁴²DE JONG の本文批判は André BAREAU が書評で指摘しているように、網羅的なものではなく、*editio princeps* の梵文原典、或いはチベット訳中の訂正を要する個所に限定してなされたものである。また DE JONG の用いたチベット訳は北京版テンギュル一本であった為、デルゲ版から回収可能なチベット訳及び梵文音写の重要な異読が放置されている (André BAREAU, “Review of J. W. DE JONG, *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā Pallavas 42–108*,” *BEFEO* 70 (1981): 303–304)。しかし、DE JONG の本文批判は Av-klp の校訂、翻訳研究の出発点となるものであり、益する所は多大であると言わねばならない。尚、この本文批判には他に二本の書評がある。Per KVAERNE, “Review of J. W. DE JONG, *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā Pallavas 42–108*,” *WZKS* 29 (1985): 227–228; Paul M. WILLIAMS, “Review of J. W. DE JONG, *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā Pallavas 42–108*,” *JRAS* (1981): 91–92。前者はその大部分が Av-klp の梵文写本、梵文音写、チベット訳の概説に充てられており、Av-klp の写本情報を知るに便利である。後者は DE JONG が Av-klp の梵文原典に対して北京版テンギュルのチベット訳を基に復元した読みがチョーネ版テンギュルの梵文音写の読みに一致するか否かを第 52 章 Rukmavati を例に書評者が確認したものである。

⁴³引田 [2006–2007] の翻訳は重要な先行研究であるが、訳の精度及び原典の文献学的な扱いの両面で問題が見られる。両問題点が顕著に現れている箇所については、第 52 詩節及び第 63 詩節の本訳と引田 [2006–2007] の翻訳を比較対照されたい。尚、松村 [1984: 82] によれば、クシェーメンドラ本に対する英訳として、Rāy Śrīśaracchadr Dās, *BAKL* (Calcutta, 1923) (未見) があるという。しかしこの英訳の価値は頗る疑わしい。

⁴⁴チベット訳五版の系統に関しては、拙論「クシェーメンドラ本「舍衛城神変説話」の源泉資料について」『比較論理学研究』7 (2010): 141–184 を参照されたい。

梵文原典の写本系統はチベット系統（ダライラマ五世版、デルゲ版及びチョーネ版梵文音写）とネパール系統（写本 ABE）に大別される⁴⁵。チベット系統に属するダライラマ五世版、デルゲ版及びチョーネ版の梵文音写の読みは正書法上の余り重要でない異読を除いてほぼ一致する。ダライラマ五世版は西暦 1664–1665 年、デルゲ版音写原典は 18 世紀、チョーネ版はデルゲ版を基に刷られたことが知られるので⁴⁶、ダライラマ五世版とデルゲ版、チョーネ版は全て純粋な親子関係にあることが理解される。従ってチベット系統の梵文伝承として対校されるべきはダライラマ五世版一本となる。しかしダライラマ五世版は状態が悪く、時に文字を判読し難い箇所があるため、我々は状態の良好なデルゲ版を補助的に参照しなければならない。

5.1.3 ネパール系梵文写本の系統

ネパール系三写本は複雑な経緯を辿っており、写本の親子関係を系統樹に明示することは不可能である。しかし写本相互の関係を或る程度知ることが可能であり、STRAUBE [2006: 81–85] によると、以下のような写本間の関係が見られるという。

- 最古の写本 A が誤った読みを呈示する場合に、若い写本 BE が正しい読みを伝えていることがある。これらの読みの中には写本 A 以外の写本に溯ることなく修正不可能な読みも含まれる。従って写本 BE が写本 A の純粋な子世代の写本であるという可能性は排除される。また写本 A の欄外には、若干の誤写箇所を修正すべく写本 B を基に施されたと思われる注記がある。
- 写本 AE は写本 B とチベット系の伝承に対して共通の誤りを伝えており、写本 E には写本 A の写経生が施した修正が反映されている箇所がある。従って写本 E は写経生による修正を受けた写本 A^{korrr} を基に筆写された写本である可能性が高い。

STRAUBE [2009: 10–12] が指摘するように、ネパール系の若い写本から得られる読みは、写本 A、ダライラマ五世版梵文音写及びチベット訳から回収される読みと比べて重要な読みを殆ど呈示しない。従って Av-klp の対校に際し、ネパール系の若い写本の従属関係を明らかにすることは余り重要ではない。Av-klp の原典校訂に当たっては最古の梵文写本 A、デルゲ版梵文音写及びチベット訳から回収される写本伝承を対校し、梵文写本 A の判読し難い箇所については若い写本 BE を、ダライラマ五世版梵文音写の判読不能箇所についてはデルゲ版梵文音写を補助的に用いるという校訂方針を我々はとる必要がある。

5.1.4 *Aśokāvadānamālā* の借用詩節について

本章を構成する 171 詩節のうち 160 詩節が借用されている AAM 第五章 Kuṇāla の原典は本訳では対校していない⁴⁷。それは STRAUBE [2006: 88] が指摘する以下の理由による。即ち *Avadānamālā* 文献群の写本伝承が Av-klp のネパール写本の伝承に見られる誤りをそのまま継承していること、

⁴⁵前者は Straube [2006, 2009] においてそれぞれ “[t]”、“T” の記号で示されるものに相当する。

⁴⁶チョーネ版がデルゲ版の純粋な子世代の版本に属することは、既に STRAUBE [2006: 78–79] が指摘しているように (1) チョーネ版の読みが例外なくデルゲ版の読みより劣った読みを保持していること、(2) チョーネ版の貝葉番号数と頁組みが常に正確にデルゲ版のそれに一致することの二点から明らかである。

⁴⁷Av-klp と *Avadānamālā* 文献群との関係については、岡野潔「*Avadānakalpalatā* から *avadānamālā* 類へ」『印仏研』54–1 (2005): 368–374 を参照されたい。

Avadānamālā 文献群の編者が編纂上、Av-klp から借用した原典に改変を加えているばかりでなく⁴⁸、原典中に新たに夥しい誤りを生じていることによる⁴⁹。

5.1.5 読みの選定方針

写本の読みの採用に当たっては次の方針をとった。

- 複数の写本が論理的に解釈可能な読みを呈示し、本来の読みが推定出来ない場合、最古の梵文写本 A の読みを優先させる。
- 梵文写本 A 以外の梵文写本及びデルゲ、グライラマ五世版の梵文音写、チベット訳の読みを採用した場合は必ず注記する。但しヴィサルガ、アヌスヴァーラの欠落ないしは挿入、歯音、二重母音の混同など正書法、字体に起因する異読及び内容上意味を持たない特殊な異読 (Sonderlesung) は除く。

原典の提示、異読の表記方法は前回の拙論のそれに従った。梵文写本に修正が施されている場合、修正前の読みを *ac* (*ante correctum*)、修正後の読みを *pc* (*post correctum*) で示した。

本訳はあくまで試訳である。若い写本の読みを採用した箇所、推定に基づいて原典の読みをかえた部分については、その読みが本来のものであるという根拠を出来るだけ提示したが、厳密な原典批判の観点から見て不適切な箇所も多々見られることかと思う。御叱正を請う次第である。

5.2 韻律

Michael HAHN が指摘するように、クシェーメンドラは原則 *anuṣṭubh* を基調として Av-klp の大部分の章を著しているが、この原則から逸脱するのが当該章及び 22, 38, 53, 65, 101 の各章である⁵⁰。韻律の使用状況の比較対照は、原典の成立事情解明に客観的証拠を提供する上で重要であるので、以下に本章で用いられている韻律の一覧を示す。

⁴⁸典型的な例としては、Av-klp 59.99 と AAM 5.176 を参照されたい。

⁴⁹STRAUBE [2006: 88] は、このことは Avadānamālā 文献が編纂された時点で、既に少なくともその編纂者には今日我々が入手できる Av-klp の伝承に勝る伝承がなかったことを意味するとする。このことは諸 Avadānamālā 文献には Av-klp の最古の写本 A に含まれない第 1–41 章の詩節借用部分がないことから間接的に裏付けられよう。

⁵⁰Michael HAHN, “Kṣemendra’s Garbhāvakraṅtyavadāna,” *Journal of the European Āyurvedic Society* 5 (1997): 84. 尚、余談となるが、クシェーメンドラは upajāti の望ましい音の配列を *Suvṛtatilaka* 2.6–8 に定義している。稍抽象的な表現で分かりにくいのが、その記述する所は以下の通りである。

[Suvṛ 2.6]

upajātivikalpānām siddho yady api saṃkaraḥ |
tathāpi prathamam kuryāt pūrvapādākṣaram laghu || Suvṛ 2.6 ||

仮に upajāti の様々な異形の組み合わせが正しいものとして確立されているとしても、そうであるとしても、前半二脚の第一音節は〔韻律的に〕短 (laghu) とすべきである。

[Suvṛ 2.7]

sūtrasyevātra tīkṣṇāgram ślokasya laghunā mukham |
karṇam viśati nirvighnam saralatvam ca nojjhati || Suvṛ 2.7 ||

〔韻律的に〕短い音によって詩節の頭は糸の〔尖った先端の〕ように尖った先端を持ち、耳にすっと入る。そして〔音の流れが〕直線をなすことを失わない。

[Suvṛ 2.8]

gurvākṣareṇa saṃruddham granthiyuktam ivāgrataḥ
karoti prathamam sthūlam kiṃcitkarṇakadarthanām || Suvṛ 2.8 ||

- **indravajra**: 21 (12.28%)⁵¹
- **upendravajra**: 4 (2.34%)⁵²
- **upajāti**: 133 (77.78%)⁵³
- **vasantatilakā**: 2 (1.17%)⁵⁴
- **mandākrantā**: 1 (0.58%)⁵⁵
- **hariṇī**: 2 (1.17%)⁵⁶
- **śārdūlavikrīḍita**: 5 (2.92%)⁵⁷
- **āryā**: 1 (0.58%)⁵⁸
- **gīti**: 2 (1.17%)⁵⁹

和訳

1 主題提示

[A226b3; B20b5; E24b1; D50a3; Z370a3]
ekah sa eva sukr̥tocitacakravartī
suvyaktakīrtitilakā guṇaratnabhūṣā |
amlānadānakusumā kṛtasatyacarcā
yasyāvabhāti śuciśīladukūlinī śrīḥ || 59.1 ||

1a ekah | Σ; ekas AE. 1b guṇaratna- | ABE^{Pc}DZ (Ed.); guṇarakta- E^{ac}.

[D50a4; Z370a4; P223a2; G278a2; N196a7]
| shin tu rab gsal grags pa'i tshon ris yon tan rin chen rgyan |
| ma nyams sbyin pa'i me tog dang ldan bden pa'i byug pa byas |
| gang gi dpal ni tshul khrims gtsang ma'i du gu las mdzes pa |
| de nyid gcig pu legs byas la 'os 'khor los [N196b1] sgyur ba yin | 59.1 |

1c gtsang ma'i | DZ; gtsang ba'i Σ. 1d 'khor los | Σ; 'khor lo Z.

かの御方こそが率先して善い行いをなす唯一人の転輪王である。何故なら、かの御方のもとには幸運の女神が現れているからである。〔その女神は〕広く知れ渡っている名声という額印を付け、美德という宝珠を飾りとし、枯渴することのない布施という

〔詩節〕冒頭で〔韻律的に〕長い音節によって〔直線的な音の流れが〕妨げられ、第一〔音節〕が瘤を結んで太くなると、何とも表現し難い耳への不快感をもたらす。

クシェーメンドラは以上のように述べ、*upajāti* の第一脚の第一音節が韻律的に短となることを推奨する。本章で用いられる *upajāti* のうち、この定義に従うものは 61 詩節あり、45.86%に相当する。

⁵¹5, 38, 39, 42, 46, 53, 57, 66, 68, 70, 72, 75, 77, 84, 89, 93, 96, 110, 130, 132, 164.

⁵²61, 116, 133, 145.

⁵³2-4, 6-37, 40, 43-45, 47-52, 54-56, 58-60, 62-65, 67, 69, 71, 73, 76, 78-83, 85-88, 90-92, 94-95, 97-109, 114-115, 117-120, 122-129, 131, 134, 139-144, 146-163, 165-170.

⁵⁴1, 121.

⁵⁵135.

⁵⁶136-137.

⁵⁷41, 49, 74, 138, 171.

⁵⁸113.

⁵⁹111-112.

花を手にし、真実語という膏薬を身に塗り込んでおり、汚れなき品行という衣を纏っている。

2 アショーカの登場

2.1 アショーカの登場

purottame pāṭaliputranāmni
mahīyuvatyās tilakāyamāne |
yaśonidhiḥ *sauryakulāvataṃ[Z370b1]saḥ
śrīmān aśokaḥ kṣitipo babhūva || 59.2 ||

2c *-kulāvataṃsaḥ] Ex conj.; -kulāvataṃsaḥ Σ; kulavataṃsaḥ DZ.

| grong mchog pā ṭa li yi bu zhes pa |
| na chung sa gzhi'i thig le ltar gyur par |
| nyi ma'i rigs kyi rgyan gyur grags pa'i gter |
| [Z370b2] dpal ldan sa bdag mya ngan med pa byung | 59.2 |

2b sa gzhi'i thig] Σ; sa gzhi thig DZ. 2c rgyan] Σ; rgyun P.

大地という娘の額印をなしている、パータリプトラという名の最上の都城に吉祥なるアショーカ王が現れた¹。〔彼は〕名声の宝庫であり、日種の飾冠であった。

2.2 アショーカの人生の三段階

pūrvam sa kāmopapadena kāmī
caṇḍopacāreṇa tataś ca tīkṣṇaḥ |
*dharmopadhāne[D50b1]na jagāma paścād
vivekapāke vayasi prasiddhim || 59.3 ||

3c *dharmopadhānena] Ex conj. Tib. *chos ni nye bar 'dzin pa* (DE JONG); dharmapradānena B (Ed.); dharmopadānena Σ.
Cf. footnote.

| dang por 'dod ldan de 'dod nyer tshig dang |
| de nas rnon po gtum po'i nyer spyod dang |

¹パータリプトラはしばしば「大地の額印」に形容され、Dāmodharagupta (8–9 世紀) も *Kuṭṭanīmata* 第 175 詩節でパータリプトラの描写に同じ形容を用いている。

[*Kuṭṭanīmata* 175]
asti mahītalatilakam
sarasvatīkulagrham mahānagaram |
nāmnā pāṭaliputram
paribhūtapurandarasthānam ||

地平の額印であり、サラスヴァティーの一族の住まう場所であるパータリプトラという名の偉大な都城があり、〔そこは〕インドラ神の住処をもしのいでいた。

l phyi nas chos [D50b2] ni nye bar 'dzin pa yis l
l dben pa smin pa'i na tshod rab grags gyur l 59.3 l

3b spyod] Σ; spyad Z.

以前彼は「愛欲」という、名前の前に添えられるその性格を表す呼称から知られるように、愛欲に耽り、そしてその後、残忍な振る舞いをなしたことから分かるように、粗暴な者となったが、後には、辯別能力の熟す年頃を迎えた時、仏法に依拠すること²、名を知られるようになった³。

2.3 帝国の安定

prasannapūṇyopavanasthālīnām
udbhinnasōbhābharaṇāyamāne l
tasminn aśoke kuśalapraroḥair
aśokatām eva babhāra lokāḥ ll 59.4 ll

l mya ngan med de rab dang bsod nams kyi l
l nye ba'i nags tshal sa gzhi mdzes pa'i brgyan l
l rgyas par gyur tshe dge ba'i myu gu yis l
l 'jig rten mya ngan med nyid nges par 'dzin l 59.4 l

4a bsod nams] Σ; bsod nams P. ll kyi] Σ; kyis DZ. 4b mdzes pa'i] Σ; mdzes pas DZ.

かのアショーカが清らかな福德よりなる園地の地面から萌え出る美に飾られていた時、幸福が芽生えたので、人々は憂いなき状態 (aśokatā) を保った。

²DE JONG が指摘するように、写本 AE 及び梵文音写は当該個所を dharmopadānena、写本 B は dharmapradānena としており、校訂本は後者の読みをとるが意味が通じない。対応する Tib. は *chos ni nye bar 'dzin pa* であり、NEGI の辞書の用例に従って復元すると *dharmopagraheṇa という読みが推定されるが、韻律に抵触する上、意味が通らない。但し dharmopa- で始まる語が想定されることは確定的であるので、DE JONG は *dharmopadhānena という読みを推定する。字形上、写本の筆写段階で “d” と “dh” の混同が起こったとは考え難いが、当該個所はアショーカ王が仏法に帰依し、「法のアショーカ」となったことを語る個所であるので、DE JONG の訂正案に従い *upadhānena の読みをとる。

³アショーカが青年期に愛欲に耽り、愛欲アショーカの異名をとったことについては、ターラナータの『仏教史』に以下のように詳述されている。

[Tāranātha 22.12–15]

mya ngan med ni bhri gu'i rigs kyi drang srong mkha' 'gro ma dang srin po mchod par byed pa dag gi
ngag tshig la brten te l lha mo u ma dur khrod kyi ma mor bcas pa la lhar 'dzin no ll de nas lo 'ga' zhig
tu 'dod yon la nram par rtse bas gnas pa las l kā ma a sho ka ste 'dod pa'i mya ngan med ces grag go l

アショーカはダーキニー (Dākinī) や羅刹を崇拝するブリグ族の聖仙の言葉を信じ、墓所の悪魔と並んでウマー女神を神と理解した。そして数年に渉って快楽を享受することによって過ごしたので、「カーマ・アショーカ」すなわち「愛欲のアショーカ」として人口に膾炙した。

3 クナーラの登場

3.1 クナーラの誕生

mūrdhni sthitāntahpurasundarīṇām
padmāvātī tasya sukhāya devī |
sattvotsa[A227a1]vaṃ putram asūta puṇyais
tyāgānugā śrīr iva sādhuvādām || 59.5 ||

5c sattvotsavaṃ] Σ, but Tib. translates *kun spro* (*sarvotsavaṃ).

| de yi bde skyid lha mo pa dma ldan |
| pho brang 'khor gyi mdzes ma'i gtsug gnas pas |
| kun spro bu ni bsod nams dag gis bskyed |
| gtong ba rjes 'brang [G278b1] dpal gyis legs brjod bzhin | 59.5 |

5a bde skyid] Σ; bde skyed DZ. 5d gyis] Σ; gyi DZ.

パドマーヴァティーという王妃は後宮の美しい女性達のうちでも最高の座にあり、彼（アショーカ）に幸福をもたらした。〔彼女は〕諸々の福德の故に、生ける者達に悦びを与える者である息子を産んだ。恰も帰捨に随伴する気高さが名声〔を生むが〕如くに。

3.2 クナーラの命名

narendrasūnuḥ kanakāvadātaḥ
śrīpadminīpadmapalāśanetraḥ |
himādrihaṃsasya kuṇālanāmnas
tulyekṣaṇo 'bhūt sa kuṇālanāmā || 59.6 ||

| gser ltar dag pa mi yi dbang po'i bu |
| pad rdzing dpal gyi pa dma'i 'dab 'dra'i sryan |
| gser ri'i ngang pa *ku ṅā la zhes pa'i |
| mig mtshungs de ni *ku ṅā la zhes gyur | 59.6 |

6b gyi] DZ; gyis Σ. 6c *ku ṅā la] Ex conj.; ku lā la DZ; ku na la Σ. || zhes pa'i] DZ; zhes pa yis Σ. 6d *ku ṅā la] Ex conj.; ku lā la DZ; ku nā la Σ.

太子は黄金の如く汚れなく、吉祥なる蓮池に生ずる蓮の花弁のような目をしており、クナーラという名のヒマラーヤに棲むハンサ鳥〔の目〕に等しい目をしていたので、彼はクナーラと名付けられた⁴。

⁴アショーカの名はプラーナの王朝系譜に共通して伝えられているが、彼の息子の名には混乱が見られる。クナーラの名を伝えるものは *Vāyupurāṇa* と *Brahmāṇḍapūrāṇa* の所伝であり、*Matsyapurāṇa* の所伝は Daśaratha、*Viṣṇupurāṇa* と *Bhāgavatapurāṇa* は Suyaśas の名を伝えている (PARGITER [1913: 27–28])。しかしいずれもマウルヤ王朝を八年間統治したという点では一致している。Romila THAPAR は Divy 405.26 に見られるクナーラの幼名 Dharmavivardhana に Suyaśas との関連を推定し、タクシャシラー遠征と失明の物語においてクナーラが中心人物として描かれている事実は、彼が王位継承者たり得た重要な王子であったことを証明し、盲目物語は、アショーカの息子であったにもかかわらず、クナーラが仏教に理解を示さなかつ

3.3 クナーラの学問、技芸への習熟、名声の獲得

vidyā[B21a1]vadhūnāṃ vimalātmadarśaś
caitrotsavaḥ sarvakalālatānām |
sa sarvalokābhimato babhūva
candrodayaḥ kīrtikumudvatīnām || 59.7 ||

| rig pa bu mo'i bdag mthong dri ma med |
| sgyu rtsal 'khri shing mams kyi dga' ba'i dpyid |
| grags pa ku mud ldan pa'i zla rgyas pa |
| de ni 'jig rten kun gyi mngon 'dod gyur | 59.7 |

7b dpyid] DZ; spyid Σ.

彼は、学問という女にとっては曇りのない鏡であり、あらゆる技芸という蔓草にとつてはチャイトラ月の始まりであり、名声という月待睡蓮の池にとつては月の昇天であり、ありとあらゆる人々が愛する者となった。

tārādhavotsa[Z371a1]ṅgamṛgopamasya
tasyāyataṃ netrasarojayugmam |
[D51a1] savibhramaṃ bhrūbhramarābhirāmam
paśyan narendraḥ prayayau na tṛptim || 59.8 ||

8a tārādhavotsaṅga-] Σ (DE JONG); tārādhavotsaṅga- Z (Ed.); tārādhavotsa_ga- D.

| rgyu skar bdag po'i nang [Z371a2] gi ri dwags bzhin |
| de yi mig yangs mtsho skyes zung dag ni |
| [D51a2] g.yo ldan smin ma'i bung bas mngon [P223b1] dga' ba |
| blta bas mi dbang rab tu ngoms ma gyur | 59.8 |

8a ri dwags] Σ; ri dags DZ. 8c smin ma'i] Σ; smin pa'i G. 8d ma gyur] Σ; mi gyur DZ.

彼は月面の鹿にも似ており、〔その〕一対をなす蓮華の花弁のような目は大きく、愛らしく動き、眉毛という蜂に魅力を添えられており、王は〔それを〕見て飽きることがなかった。

nānāguṇālamkaraṇāya tasmai
kandarpamuktālatikāyamānāḥ |
samastadigdvīpadharā[E25a1]dhināthā
dhanyābhimānena daduḥ svakanyāḥ || 59.9 ||

たことを仏教僧団が象徴的に表現したことの所産であるという推測をなしている (Romila THAPAR, *Aśoka and the Decline of the Mauryas* (Oxford: Oxford University Press, 1961), 185–186)。

尚、THAPAR 女史の同書はマウリヤ王朝時代の社会、経済、文化的趨勢に関する考察に基づいてアショーカー王の政治政策を解釈した概論的な書であるが、これについては EGGERMONT と BIRWÉ による厳しい批判があり、学術的には慎重な扱いを要する。前者では仏滅からアショーカーの即位の間に存した諸王の在位期間に関する考察の杜撰さが (P. H. L. EGGERMONT, “Review of Romila THAPAR, *Aśoka and the Decline of the Mauryas*,” *JAOS* 82–3 (1962): 419–421)、後者では文献学的立場から表記の誤り、文献表の誤った記載、重要な先行研究の漏れ、文法学に関する不正確な理解といった諸問題点が批判されている (Robert BIRWÉ, “Review of Romila THAPAR, *Aśoka and the Decline of the Mauryas*,” *ZDMG* 114–2 (1964): 448–451)。

9d svakanyāh] Σ; svakanyām B.

l sna tshogs yon tan rgyan ldan de la ni l
l mtha' dag phyogs dang gling gi sa yi bdag
l skal bzang khengs pas rang gi bu mo dag
l 'dod pa'i mu tig 'khri shing lta bu byin l 59.9 l

四方の島々の王達は富に自惚れて、様々な美質を〔自らの〕飾りとする彼に自分の娘達を与えた。〔その彼女達は〕カーマ神が着けている真珠の首飾りのようであった。

tasyāyatākṣī dayitā babhūva
candrānanā kāñcanamālikākhyā l
janānurāgodbhavabhavyamūrter
janmāntarāpteve ratiḥ smarasya ll 59.10 ll

10c -mūrter] A (Ed.); -mūrtir Σ. 10d janmāntarāpteve] Σ (DE JONG); *janmāntarasyeva Ex conj. Ed. Cf. footnote.

l skye bo rjes chags skyed pa mchog gi gzugs l
l de yi dga' mar mig yangs zla zhal ma l
l 'dod pa'i dga' ma skye ba gzhan thob bzhin l
l gser gyi 'phreng ldan ma zhes bya bar gyur l 59.10 l

10a skyed] DZ; bskyed Σ.

彼には大きな目をした妻がいた。〔彼女は〕カーンチャナマーリカーといい、月のような顔をしており、人々に愛欲を生ぜしめる美しい姿をしたカーマ神に現世に蘇ったラティがいるかのようなようであった⁵。

3.4 上座の説法

tataḥ kadācit pitur antikastham
taṃ vīkṣya saṃghasthaviraḥ kumāram l
matena rājñāḥ suyaśovihāre
viviktadeśaṃ śanakair nināya ll 59.11 ll

11a tataḥ] Σ; tata B. 11c matena] Σ (DE JONG); *sa tena Ex conj. Ed. ll suyaśo-] B (Ed.); suyaśo- AE; svayaśo- DZ; *sa yaśā Ex conj. DE JONG. Tib. translates *rang gi grags pa* (*svayaśo-). Cf. footnote.

l de nas nam zhig pha yi drung gnas pa'i l
l gzhon nu de mthong dge 'dun gnas brtan gyis l
l rgyal po'i 'dod pas rang gi grags pa yi l
l dben gnas gtsug lag khang du dal gyis khrid l 59.11 l

11c grags pa yi] DZ; grags pa yis Σ.

⁵校訂本は冒頭部を janmāntarasyeva 「現世に蘇った〔カーマ神〕のような〔彼（クナーラ）には〕」とする。論理的にはこの解釈が好ましいが、ネパール系写本、梵文音写、Tib. 共にこれを支持しないので、janmāntarāpteve の読みをとる。

それから或る時、父の傍にいるその太子を見て、僧団の長老は王の意向に従って、その名を広く知られた寺院の人気のない場所へと〔彼を〕徐に連れて行った⁶。

sa ta[A227b1]sya kālena vināśam akṣṇor
jñātvā maṇiṣī ṣaḍabhijñāvaryaḥ |
āgāmiduḥkhoddharaṇāya yogī
kāruṇyayogī tam uvāca vṛddhaḥ || 59.12 ||

12b maṇiṣī ṣaḍabhijñāvaryaḥ] B (DE JONG); maṇiṣī ṣaḍbhijñāḥ varyaḥ A; maṇiṣī ṣabhijñāvaryaḥ E^{pc}; maṇiṣī ṣabhijñāḥ varyaḥ E^{ac}; maṇiṣī ṣaḍabhijñācarya DZ; *maṇiṣī ṣaḍabhijñācaryaḥ Ex conj. Ed. Tib. translates *mkan po mngon shes drug ldan mchog* (*maṇiṣī ṣaḍabhijñāvaryaḥ). Cf. footnote. 12c āgami-] Σ; āgami- DZ, Tib. translates *ma 'ongs* (*āgami-).

l rgan po mkhan po [N197a1] mngon shes drug ldan mchog
l snying rje'i 'byor ldan rnal 'byor ldan pa des |
l dus kyis de yi mig dag nyams shes nas |
l ma 'ongs sdug bsngal gdon slad de la smras | 59.12 |

12b 'byor] DZ; sbyor Σ. 12c dus kyis] Σ; dus kyi Z.

その賢者は六神通を備えた者達のうちで最も優れた者であった⁷。〔その〕憐みの心ある年老いたヨーガ行者は、時至って彼の両眼が滅することを知り、将来起こる苦しみを除いてやろうとして彼に言った。

idaṃ tavāpāta[Z371b1]nimittabhūtaṃ
paśyāmi cittaṃ vibhavābhibhū[D51b1]tam |
vayaḥ sahāyaṃ kusumāyudhasya
vapuś ca līlādalitendudarpam || 59.13 ||

13b vibhavābhibhūtam] Σ; vibhāvābhūtam DZ.

l khyod kyī sems ni 'byor pas zil [Z371b2] mnan nas |
l lang tsho me tog mtshon dang ldan pa'i tshogs |
l [D51b2] rol pas zla ba'i [G279a1] dregs 'joms lus la ni |
l mtshan ma byung bar gyur 'di bdag gis mthong | 59.13 |

13a zil mnan] DZ; zil gnan Σ.

⁶該当部分をネパール系統の写本が *suyaśovihāre* (写本 AE では *suyasovihāre* とあるが、“s”と“ś”の混同はネパール系写本では頻繁に起こるので、本来の読みは *suyaśovihāre* であろう。DE JONG は写本 A (fol. 227a5) に *suyaśā* と書写されていると指摘するが、筆者が見た限りでは *suyaso-*と書写されているように思われる) とするのに対し、梵文音写、Tib. は *svayaśovihāre* (Tib. *rang gi grags pa'i dben gnas*) 「自らの名声ある寺院において」という異なる読みを伝承している。これについて DE JONG は Divy の対応箇所 (406.21) に基づいて、*yaśas* をアショーカの師であり、鷄園寺の長老であるヤシャス上座を指すと解し、**sa yaśā vihāre* 「〔教団の長老である〕かのヤシャスは、寺院において」と原文を修正する読みを提示している。しかし、ネパール系写本の支持する本来の読みに従って読んだとしても問題はないように思われるので、敢えて原文に修正を施す必要はなからう。故に校訂本通り *suyaśo-*と読む。

⁷ネパール系写本 A は当該箇所を正しく伝えていない。DE JONG は写本 A に *maṇiṣī ṣaḍabhijñāvaryaḥ* と筆写されていると述べるが、このように筆写されているのは写本 A ではなく写本 B である。そこで相当する Tib. を見てみると *mkan po mngon shes drug ldan mchog* (**maṇiṣī ṣaḍabhijñāvaryaḥ*) とあり、梵文音写の読みも *-carya-* という非重要な異読部分を除いてこれに一致する。Tib. と梵文音写にほぼ裏付けられるので、写本 B の読みを採用する。

「爾のこの心、若さと美貌は破滅をもたらす原因だと〔わしは〕考える⁸。〔爾の心は〕威厳に満ちており、〔若さは〕花の弓を携える者(カーマ)の友であり⁹、〔美貌はその〕魅力ある仕草の故に月の驕りさえも砕いてしまうのだから。

jātyaiva cakṣuś capalaṃ kimanyad
asminn anāsthaiva sukhopapattiḥ |
etena kṛṣṭāḥ svapathapranastāḥ
sprhābhīdhāne kuhare patanti || 59.14 ||

14a capalaṃ] BE (Ed.); capala Σ. 14c kṛṣṭāḥ] Σ (DE JONG); *kṛṣṭā Ex conj. Ed.

l mig ni rang bzhin gyis g.yo gzhan pa ci |
l 'di la bde ba nyer bskyed gnas pa med |
l 'di yis drangs pas rang gnas rab nyams te |
l 'dod pa zhes brjod khung bur ltung ba nyid | 59.14 |

14b bskyed] DZ; skyes Σ. 14c 'di yis] DZ; 'di yi Σ. 14d ltung ba] Σ; lhung ba DZ.

生来儂いのは目であり、他に何があろうか。それ(目)に関心を抱かないことこそが
幸せを生み出す源となるのだ。それ(目)に引っ張られて自分の道を失えば¹⁰、〔人は〕
貪りという穴に落ちる。

idaṃ hi nilotpalapallavābhaṃ
vilocanaṃ nāma nṛṇāṃ viśālam |
rāgoragacchidrasamudram eva
yenendriyaṅy āśu *parisravanti || 59.15 ||

15d *parisravanti] Ex conj. Ed. (DE JONG); parisravanti Σ; parisravanati DZ, Tib. translates *yongs ngal byed* (*parisramay-
ati).

l nges par mi rnams mig bzang yangs pa ni |
l ut pal sngon po'i 'dab ma lta bu 'di |
l chags pa ltos 'gro'i bug pa'i mtsho nyid de |
l gang gis myur du dbang po yongs ngal byed | 59.15 |

15c mtsho] DZ; tshogs Σ.

何故なら、実にこの大きな目は青睡蓮の花弁のように人々には映るからだ。その〔目
の〕せいで、〔人々の〕諸感官は色欲という蛇の棲む穴という大海へと忽ち流れて行っ
てしまうのだ¹¹。

⁸ 「破滅(āpāta)」に相当する語を Tib. は「未だ起こらない(*ma byung bar gyur*)」とする。

⁹ 「友(sahāya)」に相当する語を Tib. は「集まり(*tshogs*)」とする。

¹⁰ 「自分の道(svapatha-)に相当する語を Tib. は「自らの住処(*rang gnas*)」とする。

¹¹ rāgoragacchidrasamudramの解釈が難しい。引田[2006–2007: 167(170)]は「蛇のような愛欲という過失の海」の訳語を充て、rāgaとchidraの隠喩と解釈しているが、この解釈をとる場合「過失(chidra)」と「海(samudra)」の関係が不明瞭になる。これに対し、chidraとsamudraの隠喩と捉える解釈を提示したい。これに従うならば、当該箇所は以下の如く明瞭に分析することが可能となる。

穴	色欲という蛇の棲む場所
大海	海獣や災害に満ちている場所

dhanyās ta evāsamasattvadhīrāḥ
śīlaprabhāvān na bhavanti yeṣām |
lāvaṇyapānena viśeṣatṛṣṇā-
vighūrṇamānāni vilocanāni || 59.16 ||

16a -dhīrāḥ | Σ; -dhīrāḥ DZ.

| tshul khirms mthu las gang dag rnams kyi mig
| mdzes pa'i btung bas khyad par du ngoms shing |
| rnam par g.yo ba min pa de dag nyid |
| snying stobs brtan pa dang ldan skal ba bzang | 59.16 |

16c rnam par | DZ; rnam ba Σ. 16d brtan pa | DZ; bstan pa Σ.

比類なき善なる性質を備え¹²、志操堅固であり、幸せな者達とは次のような者達に他ならぬ。そのような者達とは、美(塩気)を飲んでも、〔自身の〕気高き振る舞い故に激しい渴愛(喉の渴ぎ)で目を回すことのない者達だ。」

ityādi tasya *praśamopapannam
ākarmaṇya vākyam naranātha[B21b1]sūnuḥ |
tatheti kṛtvā manasi prasanne
kṛtapraṇāmaḥ svapadam jagāma || 59.17 ||

17a *praśamopapannam | Ex conj. Ed.; prasamopapannam A; prathamopapannam B; prasamopapannam E; praśapapannam DZ. 17c prasanne | DZ (DE JONG); prapanne Σ, Tib. translates *rab dang* (*prasanne). Cf. footnote.

| zhes sogs de yi tshig ni rab zhi ba |
| nye bar rdzogs pa mi bdag bus thos nas |
| de bzhin zhes de rab dang yid la byas |
| phyag 'tshal nas ni rang gi gnas su song | 59.17 |

心に寂静をもたらす彼の以上の言葉を聞いて、王子は「その通りだ。」と考え、心が曇りなくなったので¹³、頭を下げて自分の住処に戻った。

4 春の到来

athāyayau bhṛṅgagaṇopagītaḥ
sindūrapūrā[Z372a1]yitakiṃśukaśrīḥ |
manasvinīmāna[D52a1]vadhānubandhī
madhuḥ saratsaurabhamattanāgaḥ || 59.18 ||

共通性：危険に満ちた場所であること

¹² 「比類なき (asama)」に相当する語を Tib. は欠く。

¹³ 当該個所のネパール系写本の読みは全て manasi prapanne であるが意味が通じない。これに対し梵文音写、Tib. は manasi prasanne (Tib. *rab dang yid*) の読みを呈示し、DE JONG はこの読みを支持する。“p” と “s” の混同はチベット文字草書体 (dBU med script) の伝承過程で頻繁に見られる現象であり、寧ろ prapanne が本来の読みとも思われるが、DE JONG の復元案を否定する根拠もないので、manasi prasanne の読みを採る。

18d sarat-] Σ; śarat- AB (Ed.), Tib. translates *ston* (*śarat-).

l [P224a1] de nas bung ba'i tshogs ni glu len cing l
l kiṃ shu ka dpal li [Z372a2] khri rgyas pa 'dra l
l khengs ldan ma yi khengs pa [D52a2] 'joms chas pas l
l ston gyi dris myos glang po dpyid 'ongs gyur l 59.18 l

18b kiṃ shu ka] N; ki shu ka Σ. 18d dpyid] Σ; cig DZ.

さて、蜂の群れが音を奏で、朱色一色となったキンシュカ樹の美しさがあり¹⁴、〔自らの美に自惚れる〕尊大な女の驕りの粉碎を引き起こし¹⁵、流れ来る芳香で象の発情する春が訪れた¹⁶。

udyānavallīnavapallavānām
viyoginītāpavipallavānām l
babhūva vṛddhiḥ sahasā sahaiva
pratyagararā[E25b1]godgamaduḥsahaiva ll 59.19 ll

l skyed tshal 'khri shing gsar pa'i yal 'dab dang l
l 'bral ba'i gdung ba rgud pa'i cha shas dag
l gsar du chags pas rab bskyed bzod dka' nyid l
l 'phral la lhan cig nyid du rgyas par gyur l 59.19 l

¹⁴直接的な語句の借用こそ見られないが、b 句に描かれる情景は古典詩の定型表現である。これに類似した描写内容は Vidyākara (11 世紀) の *Subhāṣitaratnaśoṣa* に収められた王の武勇を讃える詩節に見ることが出来る。

[*Subhāṣitaratnaśoṣa* 41.2*1382]
tvadyantrāṇām prayāṇeṣv anavaratavalatkarṇatālaprakīrṇair
ākīrṇe vyomni sarpatsamadagajaghaṭākumbhasindūrapūraiḥ l
bibhrāṇāḥ pāribhadradrumakusumaruco raśmayāḥ patyur ahnām
madhyāhne 'py astasamdhyaḥbhramacakitaḍṛśāś cakrire cakravākān ll 41.2*1382 ll

ひとたび爾の戦に用いる品々が用途に就けば、絶え間なくはためく〔象の〕耳から飛散した、こそこそと動き回る発情した一群の象の頭瘤に塗られた夥しい朱色顔料で空は覆い尽くされ、太陽の放つ光線はパーリバドラ樹の花〔の色〕のような色を帯び、白昼であるにも拘らず、チャクラヴァーカ鳥達に夕焼の薄明だと錯誤させ、恐怖に怯える目を見開かせる。

¹⁵「尊大な女の驕りの粉碎を引き起こす」という文句も古典詩で頻繁に用いられた春の描写における定型表現であり、その典型はカーリダーサの *Kumārasambhava* 第三章の春の描写に以下の形で見ることが出来る。

[Kum 3.32]
cūtānkurāsvādakaśāyakanṭhaḥ
puṃskokilo yan madhuraṃ cukūja l
manasvinīmānavighātadakṣaṃ
tad eva jātaṃ vacanaṃ smarasya ll

チュータ樹の芽を賞味して、喉の赤く染まった雄コーキラ鳥は甘い〔鳴き声を〕発し、まさにその〔鳴き声〕は、カーマ神の発する 尊大な女の驕りを砕くことに秀でた言葉となった。

¹⁶校訂本、写本、チベット訳共に「流れ来る」に相当する語を śarat- 「秋の」とするが、正書法に起因する “ś” と “s” の混同から生じた異読と思われる。写本 E に従い sarat- 「流れ来る」と読むべきであろう。尚、DAS は śarat は 「saptaparṇa 樹の花」を意味するものであると注記する。

19c gsar du] Σ; gsar pa G. 19d gyur] Σ; 'gyur DZ.

まさに時同じくして、園林の蔓草の新芽は忽ち成長し、愛しい恋人と別れた女の苦しみから起こる小さな不幸は忽ち募った。実に〔蔓草の新芽の成長は〕新しい赤色の現れを抑え難く、〔恋人と別れた女の苦しみから起こる小さな不幸の募りは〕新たな色欲の生起を抑止し難いのである。

vāteritaiś ca[A228a1]mpakapattralekhaiḥ
maitrīm samāsūtrayataḥ smareṇa |
sa paprathe dikṣu dhṛtipramāthī
caitrasya jaitraḥ prathamābhiyogaḥ || 59.20 ||

| tsam pa ka 'dab rlung gis bskyod pa yi |
| spring yig gis ni byams pa skyed byed cing |
| 'dod dang lhan cig dpyid kyi dang po yi |
| mngon sbyor rgyal byed brtan 'joms phyogs su grags | 59.20 |

20a yi] Σ; yis DZ. 20c yi] DZ; yis Σ. 20d sbyor] Σ; 'byor DZ. || brtan] Σ; bdag DZ.

風が運んだチャンパカ樹の葉という手紙を通じて、カーマ神と友情を育み¹⁷、そのチャイトラ月の最初の攻撃は〔人々の〕自制心を攪乱し、首尾よく諸方に広がって行った。

lasatsu puṣpeṣv api teṣu teṣu
babhūva bhūmnā madhubāndhavasya |
bhṛṅgasvanair gītayaśaḥprakāraḥ
kṛtopakāraḥ sahakāra eva || 59.21 ||

| me tog rab rgyas de [G279b1] dang de dag las |
| dpyid kyi gnyen la mchog tu phan pa ni |
| grags pa'i mnam pa bung [N197b1] ba'i sgra sgrogs pa'i |
| sa ha kā ra nyid kyis byas par gyur | 59.21 |

21b ni] Σ; 'di G.

それぞれの花という花が輝いている時、蜂の立てる音でその様々な名声を歌われ、蜜を友とする者の大群に恵みを与えられていたのは、サハカーラ樹に他ならなかった。

5 王妃の誘惑

5.1 クナーラに一目惚れする王妃

tasmin vasantotsavavibhrame 'pi
vicintayantaṃ sthaviropadeśam |
narendrasūnum vijane dadarśa
taṃ tiṣyarakṣā kṣitipālapatnī || 59.22 ||

¹⁷samā√sūtr という動詞は PW 及び SCHMIDT, Nachtr に用例が見られない。

22c -sūnuṃ] Σ (DE JONG); -sūnu B; *-sūnuḥ Ex conj. Ed.

l dpyid kyi spro ba'i rnam 'phrul de la yang l
l mi yi dbang po'i bu de dben par ni l
l gnas brtan gyi ni man ngag sems pa dag
l sa skyong btsun mo skar rgyal bsrung bas mthong l 59.22 l

22c gyi ni] Σ; gyis na DZ.

そのような春の祭り騒ぎの中でさえも、かの王子が長老の教えを黙考しているのを王妃ティシュヤラクシャーは人気のない所で見たと¹⁸。

aklībacandradyutim āyatākṣaṃ
pīnāṃśam ājānuvilambabāhum l
[Z372b1] abhyetya taṃ sneha[D52b1] rasārdracittā
yavīyasī sā janānī jagāda ll 59.23 ll

l ma nyams zla ba'i 'od ldan yangs pa'i mig
l phrag mtho pus mor lag pas sleb [Z372b2] de la l
l mdza' bas brlan pa'i [D52b2] blo yis mngon phyogs te l
l ma yi chun ma de yis rab smras pa l 59.23 l

23b pus mor] DZ; pus mos Σ. ll sleb] DZ; slebs Σ. 23c blo yis] Σ; blo yi Z.

彼は満月〔の輝き〕のような輝きを発し、その目は大きく、その肩は肉付きがよく、その腕は膝まで垂れ下がっていた¹⁹。その若い母親は心が愛情という液にじっとり濡れ、〔彼に〕近づいて言った。

kumāra puṣpeṣunāvātāra
saṃsārasāraṃ tava locanaśrīḥ l
dhr̥tiṃ haraty eva na kasya loke
viśeṣataḥ peśala eṣa veṣaḥ ll 59.24 ll

¹⁸ アショーカ王妃ティシュヤラクシャーの名は、北伝南伝双方の伝承 (Divy 397.21–398.18; 『王伝』 104c5–105a15; 『王経』 139a6–139b17; 『大史』 20.4–5) に見られ、ともに菩提樹供養を行う夫アショーカに嫉妬し、木の枯殺を企てる悪名高い王妃として語られる。BONGARD-LEVIN はこのティシュヤラクシャーを皇后法勅 (Queen's Edict) に名前が見られるアショーカ王妃 Kāluvākī と同一人物と見なし、(1) 皇后法勅が破僧伽法勅 (Schism Edict) と一緒に出土していること (2) 皇后法勅に「以上が Tivāra の母である第二王妃 Kāluvākī の命令である」という記述が見られること (3) Divy 中にアショーカ王が大臣に自身の権力の喪失を物語る個所があること (4) アショーカが晩年に発布した勅令を刻んだ碑文が存在しないことなどを根拠に、Kāluvākī (=ティシュヤラクシャー) が王妃の地位を得た時、アショーカは既に権力を失っており、Kāluvākī はそれに乗じて前妻の子クナーラを退け、自身の子 Tivāra を王位に就けようとしていたのではないかと推測する (G. M. BONGARD-LEVIN, “Historicity of Avadānas,” in *Studies in Ancient India & Central Asia* (=Soviet Indology Series #7) (Calcutta: R. D. Press, 1971), 131–141)。

¹⁹ ここで語られるクナーラの身体的特徴は *Mahāvīyūtpatti* に挙げられる偉人の八十種好と対応する。対応は以下の通り。

aklībacandradyuti	sūkṣmasuvarṇacchavi 「皮膚細滑紫摩金色」
āyatākṣa	viśālanetra 「眼修広」
pīnāṃśa	susaṃvṛtaskanda 「臂頭円満」
ājānuvilambabāhu	ssthītanavanatpralambabāhutā 「正立不屈過出」

24a -navāvatāra] Σ (DE JONG); -navāvatāraṃ DZ; *-navāvatārā Ex conj. Ed. 24b saṃsārasāraṃ] Σ (DE JONG); *saṃsārasārah Ex conj. Ed.

l gzhon nu me tog mda' can gsar 'jug pa l
l 'khor ba'i snying po khyod kyi mig gi dpal l
l khyad par mdzes pa'i chas dang ldan pa 'di l
l 'jig rten du ni su yi brtan mi 'phrog 59.24 l

24c mdzes pa'i chas] Σ; mdzes pa 'chas Z.

「太子よ、カーマ神の新たな化身よ、爾の目の美しさは、輪廻世界の歓びの真髄です。この装いたるや²⁰、殊の外魅力的であり、〔それは〕この世で、誰の自制心を奪わないことがありましようか。」

uktveti taṃ sā sahasā bhujābhyām
utsrjya lajjāṃ dṛḍham ālilinga l
prakampaśiñjāmukharair asaktaṃ
nivāryamāṇābharāṇair iva svaiḥ ll 59.25 ll

25a uktveti] Σ; ukteti AE.

l ces brjod de yis 'phral la lag gnyis kysis l
l ngo tsha btang nas brtan par de la 'khyud l
l rang gyi rgyan gyi khral khrol mu cor gyis l
l 'dar zhing rgyun du zlog par byed pa bzhin l 59.25 l

25b brtan par] Σ; brtan pa DZ. 25c gyis] DZ; gyi Σ.

このように述べて、彼女は恥じらいを捨て、不意に両腕で彼を強く抱きしめた。〔その彼女は〕恰も震えのせいでチリンチリンと音を立てて鳴る自分の飾りによって絶えず〔抱擁を〕阻まれているかのようにであった。

parāpy asau me jananī nījeva
vātsalyam āviṣkurute sadaiva l
dhyātveti niḥśaṅkamatih sa [A228b1] tasyāḥ
pādapraṇāmānataśekhara 'bhūt ll 59.26 ll

l gzhan 'di'ng rang gi ma bzhin bdag la ni l
l rtag tu mnyes gshin nyid dag skyed par byed l
l ces bsams dogs med blo ldan de yis de'i l
l rkang par phyag 'tshal zur phud dud [P224b1] par gyur l 59.26 l

26b mnyes] DZ; gnyes Σ. 26d 'tshal] Σ; btsal DZ.

「〔実母〕でもないのに、この御方は実母のようにいつも愛情を示して下さっている。」と考え、彼は彼女に疑念を抱くこともなく、〔彼女の〕足に跪き、深々と頭を下

²⁰veśa- 「変装した姿」の解釈が難しいが、「カーマ神がクナーラの体をとって装っている仮の姿」を意味するものと思われる。

げた²¹。

madoddhatānām ghanamohakāle
prakṣobhitānām makarāṅkapātaiḥ |
taraṅgiṇīnām iva nāṅganānām
śvabhrāvapāte 'sti manān nirodhaḥ || 59.27 ||

27c nāṅganānām] Σ; nāṅganā B. 27d śvabhrāva-] B (Ed.); svabhrāva- A; svabhāva- Σ, Tib. translates *rang bzhin* (*svabhāva-
).

| stug por rmongs dus rgyags pas 'phyar gyur cing |
| chu srin mtshan ma lhung bas rab bskyod pa'i |
| rba rlabs can bzhin bud med rnam la ni |
| rang bzhin 'gros la 'gog pa cung zad med | 59.27 |

27a stug por] Σ; stug po'i G. 27b lhung bas] Σ; lhu bas G. 27c rba] DZ; dba' Σ.

深い迷妄のうちにある時、女というものは不意に海獣を印とする者(カーマ神)に襲われると、溢れんばかりの色情に満たされ、その心は動揺するものである。〔その女が〕地獄へと落ちて行く時²²、〔彼女を〕抑止するものは何らないのである。恰も河というものが、海へと落下すると、水面に波立ちを生じ、〔また〕滝壺へと落ちて行く時には、〔それが決して抑止されない〕ように²³。

sā taṃ babhāṣe madanābhibhūtā

²¹-ānataśekhara の解釈が難しい。引田 [2006–2007: 168(169)] は「王冠が下に曲がるほど」の訳語を充てている。クシェーメンドラは同様の表現を *Bhāratamañjarī* 3.598 において次のような形で用いている。

[*Bhāratamañjarī* 3.598]
praśādyā naiśadhaṃ yāte praṇayānataśekhara |
ṛtuparṇe vidarbhāṅgāṃ babhūva pramadotsavaḥ ||

ニシャダ王を喜ばせ、リトウバルナ王が友情の故に深々と頭を下げて去って行くと、ヴィダルバ国の人々に楽しみと歓びが起こった。

ここではこの用例を根拠に、-ānataśekhara を「深々と頭を下げた」と解釈する。

²²当該個所には二系統の読みがあり、ネパール写本 B は śvabhrāvapāte、ネパール写本 E 及び梵文音写は svabhāvapāte の読みを呈示する。Tib. は後者を支持するが、後者の読みを採ると詩節の意味が通じなくなる。写本 A は svabhrāvapāte という読みを呈示することから、本来の読みは写本 B の伝える読みであり、śvabhrāvapāte → svabhrāvapāte → svabhāvapāte と伝承されていったものと思われる。従って写本 B の伝える読みを採る。

²³直喩 (upamā) と掛詞 (śleṣa) を用いた混交 (saṃsṛṣṭi) による詩節であるが (saṃsṛṣṭi については GEROW [1971: 307–308] を参照されたい)、解釈が難しい。当該詩節で二重の意味が掛けられているのは、以下の三箇所であると思われる。

	女 (aṅganānām)	河 (taraṅgiṇīnām)
prakṣobhitānām	その心が動揺した	水面が波立った
makarāṅkapātaiḥ	海獣を印とする者 (カーマ神) の急襲	海への落下
śvabhrāvapāte	地獄へ落ちること	滝壺への落下

クシェーメンドラは、*Narmamālā* においても、半詩節、半行或いは一行だけに二重の意味を掛ける上記に類した掛詞を用いたようである (Fabrizia BALDISSERA, *The Narmamālā of Kṣemendra: Critical Edition, Study and Translation* (=Beiträge zur Südasienforschung Südasien-Institut Universität Heidelberg Bd. 197) (Heidelberg: Ergon Verlag, 2005), xxiv)。

*praga[B22a1]lbhasaṃrambhaviśṛṅkhaleva |
pāpāvapāte śucinā kalaṅka-
bhī[D53a1; Z373a1]tyeva śīlena vimucyamānā || 59.28 ||

28b *-viśṛṅkhaleva] Ex conj. DE JONG; -viśṛṅkhalena Σ; -viśṛkhalena DZ, Tib. translates *mam par ma bsdams pas* (*-viśṛṅkhalena). Cf. footnote.

| bab col rtsom pa rnam par ma bsdams pas |
| sdig par lung tsho dri mas 'jigs pa bzhin |
| tshul khriṃs gtsang mas rnam par btang gyur [D53a2] cing [Z373a2] |
| 'dod pas zil [G280a1] mnan de yis de la smras | 59.28 |

28a rtsom pa] Σ; rtsol pa DZ.

彼女は、大胆な衝動で束縛を失ってしまったかのように²⁴、愛欲に負けて彼に言った。悪へ墮落して行く時、過失を犯すことへの恐れ〔を捨てるか〕の如く、清浄な品行を捨てて。

5.2 王妃の胸中の告白

priyo 'si me tulyavayāḥ kumāra
mātuḥ sapatnī tava nā[E26a1]smi mātā |
iyaṃ tvadāliṅganaśaṅgayogā
saubhāgyabhogyam bhajatām tanur me || 59.29 ||

| bdag gi mdza' bo gzhon nu lang tsho mtshungs |
| khyod kyi ma yi chun ma bdag ma yin |
| khyod kyi 'khyud pas 'grogs 'os bdag gi lus |
| skal bzang longs spyod 'os 'di sten par mdzod | 59.29 |

29a mdza' bo] Σ; mdza'o Z. 29b ma yi chun ma] Σ; ma yi chung ma P; ma yin chun ma G. 29c gi] DZ; gis Σ. 29d sten par] D; brten par Σ; stan par Z.

「太子よ、〔私は〕同じ年頃にある爾を愛しています²⁵。爾の母と夫を同じくする〔私は爾の〕母親ではありません。爾が抱擁し、性愛に戯れることが出来るこの私の体は、幸運から生まれる享受さるべきものをきつと分け与えることでしょう。

²⁴梵文写本、Tib. とともに相当箇所は *pragalbhasaṃrambhaviśṛṅkhalena* (Tib. *bab col rtsom pa rnam par ma bsdams pas*) となっているが、これでは意味が通じない。そこで DE JONG は相当箇所を *pragalbhasaṃrambhaviśṛṅkhaleva* に修正することを提案する。梵文写本、Tib. からは支持されないが、“n”と“v”の字形に起因する誤写と見れば、DE JONG の提案する読みを本来の読みと見て大過ないであろう。

²⁵ティシュヤラクシャーがクナーラと「同じ年頃にある (*tulyavayāḥ*)」という記述は他の並行伝本には見られない。尚、南伝の『大史』には *aṭṭhārasamhi vassamhi dhammāsokassa rājino mahāmeghavarārāme mahābodhi patiṭṭhahi. tato dvādasame vasse mahesī tassa rājino piyā asaṃdhamittā sā matā sambuddhamāmikā. tato catutthe vassamhi dhammāsoko mahīpati tissarakkham mahesitte ṭhapesi visamāsayaṃ. (Mahāvamsa 20.1–3)* (「ダルマ・アショーカ王となって十八年目の年に、マハーメーガヴァラ寺院に壮大な菩提樹が植樹された。それから〔数えて〕十二年目の年に、その〔アショーカ〕王の最愛の正妻であり、完全に悟った者に愛情を注ぐ、かのアサンディミッターが逝去した。それから〔数えて〕四年目にダルマ・アショーカ大王はティッサラッカー (ティシュヤラクシター) という、好んで悪行を犯す女を正妻の位に就けた。」) という記述が見られる。従ってこれを根拠に彼女をアショーカの晩年を迎えた妃と考えるならば、継子クナーラと近い年齢にあったという推測も成り立とう。しかしこの推測を裏付けるに足る伝承は何ら存在しない。

nirlajjataiṣā param arthanīyā
yad arthayante svayam eva nāryaḥ |
prasīda kiṃ vā kriyate tvadaṅga-
saṅgaś ciraṃ me hr̥daye 'vasannaḥ || 59.30 ||

30a nirlajjataiṣā param arthanīyā | BE (Ed.); nirlajjateṣā paramārthanīyā A; nilajjataithā paramārthanīyā DZ.

l don du gnyer bya bud med rang nyid kyis |
l don gnyer gang de ngo tsha med nyid do |
l ci bgyid bka' drin mdzod cig khyod lus dang |
l 'grogs pa yun ring bdag gi snying la gcags | 59.30 |

30b de | DZ; 'di Σ. || nyid do | Σ; nyid de DZ.

女というものは求められるべき者であるのに、実に自ら〔男を〕求めると言うこと、このことは極めて無恥なことです。お願いですから、どうかして下さい。爾の体と交わることは、長い間私の心中に潜んでいたことですから。

stanasthalaṃ hāralatābhirāmaṃ
nitambabimbaṃ raśanāsanātham |
strīṇāṃ nakhollekhadaridram eti
nonnidraśobhāsubhagābhimānam || 59.31 ||

l nu ngos do shal 'khri shing mngon dga' zhing |
l rked skabs dkyil 'khor dril chung ldan pa yi |
l bud med sen mo 'debs pas dbul ba ni |
l rab [N198a1] mdzes skal bzang ma nor khengs mi 'gyur | 59.31 |

31c 'debs pas | DZ; 'debs pa Σ. 31d ma nor | DZ; mngon par Σ.

女達の、真珠の首飾りで愛らしい乳房、腰帯を巻いた丸い臀部は、もし爪で引っ搔かれていなければ、花開いた美を〔得ることもなければ、自身が〕幸運であるという自負心も得ることがありません。

navābhilaṣātiśayonmukhāni
cittāni vātūlakutūhalāni |
strīṇāṃ svabhāvena bhavanti
loke lāvānyalubdhāni ca locanāni || 59.32 ||

l 'jig rten dag na bud med rang bzhin gyis |
l sems ni rnam g.yengs dge mtshan ldan pa dang |
l gsar pa 'dod la shin tu mngon phyogs shing |
l mig kyang mdzes pa dag la sred ldan gyis | 59.32 |

32b g.yengs | DZ; g.yeng Σ. 32d gyis | Σ; min DZ.

この世で女というものは生来的に、過剰なまでに新しい欲望の対象を求める心を抱き、狂気じみた切望を抱くものです。〔そしてその女の〕目は美を貪るものなのです。」

5.3 愛欲に苛まれる王妃の身体描写

uktveti sã kampatarãṅitãṅī
śvāsābhibhūtādharapallavaśrīḥ |
svedāmbunaśyattilakā vikāraṃ
smaro[D53b1]padiṣṭaṃ prā[Z373b1]kaṭaṃ babhāra || 59.33 ||

33c -naśyattilakā vikāraṃ] Σ (DE JONG); -naśyaṃ tilakā vikāraṃ B; *-naśyattilakādhikāraṃ Ex conj. Ed.

| zhes smras rlung ltar 'dar ba'i lus can des |
| mchu 'dab dpal ni dbugs kyis zil mnan cing |
| rngul chus tshon ris nyams byas nmam 'gyur ni |
| [D53b2] 'dod pas nyer [Z373b2] bstan rab tu gsal bar bzung | 59.33 |

33c chus tshon ris] Σ; chu'i mtshon ris DZ. || nmam 'gyur] Σ; mams 'gyur PN.

以上のように〔彼女は〕語った。そしてその彼女は、震えで手足は波のように震えており²⁶、新芽のような唇の輝きは荒い吐息に屈せられ、額印は汗で消え失せ、性愛に特徴付けられるはつきりとした〔身体の〕変化を備えていた。

5.4 クナーラの身体描写

vāṇīm viruddhām sa niśamya tasyās
tām taptasūcīm iva dīrṇakarṇām |
nirīkṣamāṇaḥ kṣitim akṣila[A229a1]gnaṃ
mumoca tat pāpam ivāvanamraḥ || 59.34 ||

34c nirīkṣamāṇaḥ] BE (Ed.); nirīkṣyamāṇaḥ Σ. Here the margin of E runs as follows: iṣṭarāge kṛto manobhaṅghaḥ | uktaṃ ||
viśādaś ca taso(lies: tamo-)hataḥ upāyābhāvanāśayoh || iti.

| ma ba nyams byed gdung ba'i khab bzhin des |
| de yi tshig ni 'gal ba de dag thos |
| sdig de mig la chags pa 'dor ba bzhin |
| sa la blta zhing gdong ni dud par gyur | 59.34 |

34b yi] Σ; yis PN. 34c mig] DZ; dmigs Σ. || 'dor] DZ; 'dod Σ.

²⁶ 「震えで身体の一部が波のように揺れる」という表現は一種の古典詩の定型表現である。その一例は *Subhāṣitaratnakoṣa* に収められた、男女の別離を描く詩節に見られる。

[*Subhāṣitaratnakoṣa* 22.38 *(738)]
śvāsotkampatarāṅiṇi stanatate dhautāñjanaśyāmalāḥ
kīryante kaṇaśaḥ kṛśāṅgi kim amī bāspāmbhasām bindavaḥ |
kiṃ cākūñcitakaṅtharodhakuṭilāḥ śrotrāmṛtasyandino
hūmkārāḥ kalapañcamapraṇayinas truṭyanti niryānti ca || 22.38 *(737) ||

細身の女よ、眼膏の墨を洗い落としてしまったその涙の雫が飛沫となって、乳房の先に飛び散っているのは何故なのか。〔爾が〕息つこうとして震えるせいで波のように揺れる〔その乳房の先に〕。〔俯いて〕曲がった喉に圧迫されて〔その音に〕波立ちを生じている「ふん」という音が〔沈黙を〕破って、口から出たのは何故なのか。〔コーキラ鳥が発する〕快い第五音階を備え、耳にとつての〔樂をもたらず〕甘露を滴らせる〔その音が〕。

彼は、赤熱した針のように耳を裂く不快な彼女の言葉を聞いて、うつむいて地面を見つめ、恰も目と結びついたその災厄をはらおうとしているかのように見えた。

tasyāḥ śaśāṅkopamam ānaṇaṃ tat
samunmiṣat pāpamalaṃ kumāraḥ |
draṣṭuṃ na sehe sahasā viśāda-
lajjānimīladvadanāravindaḥ || 59.35 ||

| ri dwags rtags can lta bu de yi bzhin |
| sdig pa'i dri ma rab rgyas de ni bltar |
| gzhon nus ma bzod 'phral la [P225a1] yid 'byung dang |
| ngo tshas bzhin [G280b1] gyi pa dma zum par gyur | 59.35 |

35a ri dwags | Σ; ri dags DZ.

月にも似たその彼女の顔は煌々と輝いているのに、過失の故に汚れているのを太子は目にするに耐え難かった。〔そして彼は〕悲しみと羞恥の心から、蓮華のような顔の目を忽ち閉ざしてしまった。

analpapāpaśravaṇaparakampād
vilolaratnojjvalakuṇḍalottham |
tasya kṣaṇaṃ kaṇayugaṃ viśuddhyai
prabhāvanaṃ vahnim ivāviveśa || 59.36 ||

| dag par bgyi slad de yi rna ba zung |
| mi chung sdig thos 'dar bas bskyod pa las |
| rin chen rab 'bar rna rgyan las 'khrungs pa'i |
| mthu ldan me ni skad cig zhugs pa bzhin | 59.36 |

36c rin chen | Σ; rin cen Z.

彼の両耳は夥しい悪を聞いて震えたが為に、恰も揺れる宝石で煌めく耳飾りから生じている猛火の中に、一瞬の間浄めの為に入ったかのように見えた。

sa pāṇinā śrotrayugaṃ pidhāya
sasarjja vācaṃ daśanāṃśuśubhrām |
prakṣālayantīm kṣaṇam aṅgam aṅgam
gaṅgām ivāliṅganadośaśāntyai || 59.37 ||

37c prakṣālayantīm kṣaṇam aṅgam aṅgam | AE (DE JONG); prakṣālayanstām kṣaṇam aṅgam aṅgam B; prakṣyalayantī kṣaṇam aṅgam aṅgam DZ; *prakṣālayamstām kṣaṇam aṅgam aṅgam Ex conj. Ed.

| de yi lag pas rna ba zung bsgribs nas |
| skad cig 'khyud pa'i skyon ni zhi ba'i slad |
| yan lag yan lag 'khrud pa'i gang gā bzhin |
| so yi 'od zer dkar ldan tshig spros pa | 59.37 |

彼は両手で両耳を覆い、〔継母の〕抱擁という過失を償う為に、肢という肢を忽ち洗い流すガンガー河〔の水〕のような、齒の光も眩い〔口から〕言葉を発した。

5.5 クナーラの諫言

mātar na yuktaṃ tava vaktum etat
sadvartmanā gaccha niyaccha vācam |
sadyaḥ parityāgadaśāvilolaṃ
śīlaṃ samāśvāsa[B22b1]ya śīryamāṇam || 59.38 ||

38b sadvartmanā] Σ; sadvatmanā A; saddharmanā B.

| ma ma khyod kyis 'di dag smrar mi 'os |
| dam pa'i lam nas song la tshig dag sdoms |
| 'phral la yongs btang skabs kyi tshul khirms ni |
| nyams shing rnam par g.yo ba dbugs dbyung mdzod | 59.38 |

38a smrar] Σ; smra DZ. 38c btang] DZ; gtang Σ.

「母上、貴女はそのようなことを口にすべきではありません。正しい道をお進み下さい。言葉を慎み下さい。〔貴女の〕品行は、〔正しい道を〕外れようとする状況に陥って揺らいでおり²⁷、死に瀕しています。〔それに〕速やかに息を吹き込んで下さい。」

darpaḥ pramādaḥ para[D54a1]vittavāñchā
pāpānubandhī viṣayā[Z374a1]bhilāṣaḥ |
etāni jantor vinipātakāle
dvārāṇy apāyasya niragalāni || 59.39 ||

| dregs dang bag med gzhan [D54a2] nor 'dod pa dang |
| sdig pa rjes 'brel yul [Z374a2] la mngon sred pa |
| 'di dag srog chags rnam par lhung dus su |
| bsdams pa med pa'i gnod pa'i sgo dag yin | 59.39 |

39d gnod pa'i] Σ; gnod sbyin G.

驕り、注意をなおざりにすること、他人の持ち物を無暗に欲しがること、過失と結びつく感官対象への欲求、これらは生ける者が死んだ時、門の外れた悪趣の門となります。

dhanena kiṃ dānaparāṇmukhāṇām
[E26b1] śrutena kiṃ dveṣavaśīkṛtānām |
rūpeṇa kiṃ sadguṇavarjitānām
kulena kiṃ śīlavinākṛtānām || 59.40 ||

40d -vinākṛtānām] Σ; -vināśakānām BE (Ed.), Tib. translates *tshul khirms btang ba rnam la*. Cf. footnote.

| sbyin las phyir phyogs rnam la nor gyis ci |
| sdang bas dbang byas rnam la thos pas ci |

²⁷要検討。Tib. の翻訳官も解釈に苦労したらしく、cd 句を 'phral la yongs btang skabs kyi tshul khirms ni nyams shing rnam par g.yo ba dbugs dbyung mdzod 「速やかに、壊れかけ、動揺している〔正しい道を〕捨てる時の品行を蘇らせよ」と解釈する。

l yon tan mchog spangs mams la gzugs kyis ci l
l tshul khirms btang ba mams la rigs kyis ci l 59.40 l

布施に顔を背けた者達に財が何の意味を持ちましょうか。憎しみの心に屈せられた者達に学問が何の意味を持ちましょうか。善き性質を欠いた者達に美貌が何の意味を持ちましょうか。品行を欠いた者達に良い家柄が何の意味を持ちましょうか²⁸。

5.5.1 悪業を犯す者には地獄の苦しみが待ち受ける

mātaś cañcalatām vimuñca ruciraṃ rakṣākṣayenduṃ yaśaḥ
śīlaṃ pālaya paśya vaṃśam amalāṃ pāpe matiṃ mā kṛthāḥ l
sphūrjannāarakavahnipākavikalapretapralāpotkaṭāḥ
pāpānām paralokavartmani kila kleśākulā bhūmayāḥ ll 59.41 ll

41b paśya vaṃśam amalāṃ] Σ; vaṃśahetum amalāṃ DZ, Tib. translates *dri med rigs kyi rgyu dag* (*vaṃśahetum amalāṃ). Cf. footnote. 41c -vikalapretapralāpotkaṭāḥ] AE (Ed.); -kalapretapralāpotkaṭāḥ B; -vikalapretapratāpotkaṭāḥ DZ, Tib. translates *'khrugs te yi dwags rab tu gdung bas nyen*. Cf. footnote.

l ma ma g.yo ba nyid dag thong [N198b1] la ma nyams grags pa'i zla ba mdzes par srungs l
l tshul khirms dri med rigs kyi rgyu dag skyongs shig sdig la blo gros yongs ma byed l
l rab 'bar dmyal ba'i me yis 'tshed cing 'khrugs te yi dwags rab tu gdung bas nyen l
l sdig can 'jig rten pha rol lam ni nges par nyon mongs dag gis 'khrugs pa'i sa l 59.41 l

41c yi dwags] Σ; yi dags DZ. ll gdung DZ; gdungs Σ.

「母上様、気紛れを起こしてはなりません。輝かしい、名声という衰えることなき月を御守り下さい。善き品行を御守り下さい。汚れなき家柄を御覧下さい²⁹。悪い行いをなそうという気持ちを起こしてはなりません。悪い行いを犯した人々には、来世への途上で、轟々と音を上げる地獄の炎に焼かれることで肢体を失った餓鬼の上げる悲嘆の声に満ちた³⁰、苦しみに満ちた諸々の地が待ち受けていると言われています。」

5.6 ダルマの教示は迷妄に届かない

śrutveti vākyaṃ kṣitipātmajasya
rāga[A229b1]grahaṃ sā na mumoca tīvram l
mohāndhakūpasya jalasya nāntar
dharmopadeśārkakarā viśanti ll 59.42 ll

²⁸校訂本は写本 BE の読み-vināśakānām を採るが、DE JONG が指摘するように相当する Tib. *tshul khirms btang ba mams la* は写本 A 及び梵文音写の読み-vinākrātānām に近い。従って写本 A の読みを採る。

²⁹paśya vaṃśam amalāṃ 「汚れなき家柄をご覧下さい」に相当する部分を、梵文音写は vaṃśahetum amalāṃ 「汚れなき家柄の為に〔善き品行を御守り下さい〕」と読んでおり、ネパール系梵文写本と読みを異にする。相当する Tib. は *dri med rigs kyi rgyu dag* であり、梵文音写の読みに一致する。

³⁰c 句はネパール系梵文写本、梵文音写、Tib. でそれぞれ読みを異にし、原文に混乱が見られる。梵文音写に従って読むと、sphūrjannāarakavahnipākavikalapretapratāpotkaṭāḥ 「轟々と音を上げる地獄の炎に焼かれることで肢体を失った餓鬼の苦しみに満ちた」、Tib. に従って読むと、*rab 'bar dmyal ba'i me yis 'tshed cing 'khrugs te yi dwags rab tu gdung bas nyen* 「燃える地獄の火に焼かれ、心乱され、餓鬼が苦しみに苛まれる」となる。ここでは梵文写本の呈示する読みをとる。

42c jalasya] Σ (DE JONG); janasya BE (Ed.).

l zhes pa sa bdag sras [G281a1] po'i tshig thos nas l
l mi bzad chags pa'i gdon ni des ma btang l
l rmongs pa'i mun can khron pa'i chu nang du l
l chos kyi nyer bstan nyi ma'i 'od mi 'jug 59.42 l

42b bzad] Σ; zad G. 42d kyi] Σ; kyis DZ.

以上の太子の言葉を聞いても、彼女は熱烈に色欲を抱いて離さなかった。迷妄という暗い井戸の水の中にダルマの教示という日光が差し込むことはない。

5.7 愛欲に苛まれる王妃の身体描写 (II)

corīva sā manmathapārthivena
pramāthinā pravyathitā prasahya l
[D54b1; Z374b1] śvāsaprayāsaskhalitābhīdhānam
asamgatārtham pralalāpa tat tat || 59.43 ||

43c -skhalitābhīdhānam] B (Ed.); -skhalitāvidhānam AE; tyalitābhīdhānam DZ, Tib. translates 'khrul bar rjod byed pas (*-skhalitābhīdhānam). Cf. footnote.

l rab tu 'joms byed yid srubs sa bdag gis l
l chom rkun [P225b1] ma bzhin 'phral la gzir gyur te l
l [D54b2; Z374b2] shugs rings ngal zhing 'khrul bar rjod byed pas l
l 'brel med don gyi cho nge de de smras l 59.43 l

43b rkun ma] Σ; rkun mo D. 43c shugs] Σ; shug PG. || 'khrul] DZ; 'phral Σ. || rjod] DZ; brjod Σ. 43d smras] DZ; smra Σ.

恰も泥棒女の如く、彼女は心を掻き乱して悩ませるカーマ神に酷く苦しめられていたので〔興奮し、〕息をしようとして途切れ途切れに脈絡のない言葉を呟いた³¹。

5.8 王妃の反論

5.8.1 愛欲の火を言葉で消すことはできない

svasthopadeśaḥ kriyate tvayāyaṃ
smarārditāhaṃ na śṛṇomi kiṃcit l
nāyāti vāgbhiḥ praśamaṃ viśāla-
jvālākālāpaḥ prabalaḥ smarāgniḥ || 59.44 ||

l rnal gnas nyer bstan khyod kyis byed pa 'di l
l 'dod pas gzir ba bdag gis 'ga' mi thos l

³¹写本 AE 及び梵文音写はいずれも意味の通る読みを伝えていない。写本 B のみが *skhalitābhīdhānam* 「途切れ途切れになった言葉を」という読みを伝えている。相当する Tib. 'khrul bar rjod byed pas は写本 B の読みを支持するので、これが本来的な読みと考えられる。従ってこの読みを採用する。

l lhag par rab 'bar 'dod pa'i me yi tshogs l
l rgyas pa tshig gis rab tu zhi mi 'gyur l 59.44 l

44b 'ga'] DZ; 'gal Σ.

爾はかく健全な教示をなさる [が]、私は愛欲に苛まれて何も耳に入りません。愛欲の火は大きな炎の集まりからなり、その勢いは強く、言葉で消えなどしないのです。

deśe skhalannirjharaśītale 'pi
bhavanti taptāni marusthalāni l
rāgāturaṇām udaye 'pi bhānor
ghorāndhakārāṇi digantarāṇi || 59.45 ||

l yul na bsil ba'i chu rgyun 'brub mod kyang l
l mya ngam thang rams dag ni gdung bar 'gyur l
l nyi ma shar yang chags pas gzir rams la l
l phyogs mtshams rams ni 'jigs rung mun pa yin l 59.45 l

45a yul na bsil] Σ; yul na gzil PG. 45b mya ngam] DZ; mya ngan Σ. 45d 'jigs] Σ; 'jig N.

滑落する飛泉で冷たい場所にさえ、色欲に苛まれる者達には灼熱した荒野があり、太陽が昇っても [日の射さない] 恐ろしく暗い別の方角があります。

5.8.2 クナーラがダルマを失い、善き者達もダルマを失えば、ダルマは消滅する

nāsty eva taptām abalām dayāloḥ
saṃrakṣatas te yadi ko 'pi dharmah l
tat sādhubhir darśitagauravasya
tasyāpy abhāve katham asti dharmah || 59.46 ||

46a nāsty eva] AE (Ed.); nāsteva B. nāsty ava- DZ.

l gdung ba'i bud med bsrungs la chos ci yang l
l gal te brtse ldan khyod la med na ni l
l dam pa rams kyis gus par bstan pa de l
l med pa la yang chos min ji ltar yod l 59.46 l

爾は憐み深い方であり、苦しめられている女をお守りになる。[そのような爾に、] もし、如何なるダルマもなければ、[それが] 重要であることを善き者達が示す、それ(ダルマ)もなくなってしまう時、どうしてダルマなど存在しましょうか。

5.8.3 苦しみや不幸に苛まれれば、人は善悪の見境もつかなくなる

ye śītalāḥ svasthadhiyaḥ sukhāya
teṣāṃ pramāṇaṃ sthira eṣa dharmah l
saṃtāpitānāṃ vyasanāturānāṃ
niśiddhakāryeṣv api ko vicārah || 59.47 ||

l gang blo mal gnas bsil ba de dag la l
l bde slad brtan pa chos 'di tshad ma ste l
l zhen pas gzir cing yang dag gdungs rnams la l
l bkag pa'i bya ba la yang spyod pa ci l 59.47 l

47b brtan] DZ; bstan Σ.

冷静で心が健全な者達は楽を招きますが、その彼等の規範となるのが、この揺るぎなきダルマです。〔しかし〕苦しめられ、不幸を患っている時、一体どうして〔その者達に〕禁じられている行いを識別したりする働きが生じましょうか。

5.8.4 過失を犯した者を守ることは人に法をもたらす

mayaiva pāpaṃ prathamam gṛhītaṃ
[B23a1] dharmo 'sti te matparirakṣaṇena l
sparśena nirvāpaya samtatāṃ me
saṃtāpajārtiṃ [D55a1; Z375a1] śaśiśītalena || 59.48 ||

48a mayaiva] E (Ed.); mayeva AB; mamaiva DZ, Tib. translates *bdag nyid kyis* (*mayaiva).

l nga nyid kyis ni sdig pa dang por blangs l
l bdag yongs bsrungs pas khyod la chos su 'gyur l
l reg pa ri bong can ltar bsil ba yis l
l rgyun du gdung [Z375a2; D55a2] bas nyen bdag bde bar mdzod l 59.48 l

48c reg pa] Σ; rig pa DZ.

この私は初めて過失を犯しました。私を守ることで爾にはダルマが生じます。月のように冷たい感触で、愛欲の熱から生まれる絶え間ない私の苦しみを鎮めて下さい。

5.8.5 苦しめられる者を守ることから如何なる悪果も生じない

saṃtāpaṃ harato vidhoḥ kṣapayatas tīvraṃ tamo bhāsvataḥ
śītakleśam aharniśaṃ śamayataḥ pāpaṃ kim agneḥ phalam l
brūhi jñāta[A230a1]samastaśāstra [E27a1] yadi vā satyaṃ *tvayaiva sphuṭaṃ
dṛṣṭaḥ kiṃ vyasanārtarakṣaṇasamaḥ satkarmadharmāḥ kvacit || 59.49 ||

49c yadi vā] Σ, yadīva DZ, Tib. translates *gang 'di* (*yad idam?). || *tvayaiva] Ex conj.; tvam eva Σ.

l gdung ba 'phrog byed zla ba dang ni mi bzad mun pa nyams byed nyi ma dang l
l nyin dang mtshan mor grang ba'i [G281b1] nyon mongs zhi byed me la sdig pa'i 'bras bu ci l
l gdung bas gzir ba bsrung ba dang mnyam las bzang chos ni gang [N199a1] du ci zhig mthong l
l bstan bcos mtha' dag shes pa khyod kyis gang 'di bden par gsal ba nyid du smros l 59.49 l

49b mtshan mor] Σ; mtshan mar D. 49c bzang] DZ; bzang pa'i Σ. 49d gsal] DZ; bsal Σ.

月は熱を奪い、太陽は深い闇に終わりをもたらし、火は寒さから生じる苦しみを日夜和らげます。〔これらが〕如何なる悪果を得ることがありましょう。実にまさしく爾は、不幸に苛まれた者を守るに匹敵する、善き行いをなす者達のダルマを、何処か

ではっきりと目にしたことがあるというのですか³²。もし〔目にしているというのなら〕あらゆる教書を知る者よ、語られよ。

5.8.6 秘密を暴露する者はいない

rahasyabhedo 'tra na kaścīd asti
janojjhitaḥ saṃvṛta eṣa deśaḥ |
svecchāpravṛttapraṇayopanamrāḥ
praudhāṅganā bhāgyavatām bhavanti || 59.50 ||

| yul 'di skye bos spangs shing legs par bsgribs |
| dben pa 'byed pa su yang med pa 'dir |
| rang 'dod du 'jug mdza' bas dud pa yi |
| bud med dar ma skal ldan nyid la 'gyur | 59.50 |

50c yi] DZ; yis Σ.

秘密を暴露する者はここには誰もいません。この場所は人一人おらず、隠されています。自らの願望から起こった愛の欲求に身を委ねる奔放な女性は幸運な男達のもので、

klīṣṭādharaṃ klāntakapolapatraṃ
srastālakam svedalavārdrarāgam |
nitambinīnām ratitoṣitānām
paśyanti dhanyā vadanāravindam || 59.51 ||

| bud med dga' mgus yongs su tshims rnams kyi |
| bzhin gyi pa dma 'gram pa'i 'dab dman zhing |
| [P226a1] mchu nyams lan bu 'khrugs shing rngul gyi ni |
| thigs pas brlan chags skal ldan rnams kyis mthong | 59.51 |

51a kyi] Σ; kyis DZ. 51b zhing] Σ; bzhin DZ.

幸運な男達は、性愛の快楽に満悦した臀部豊かな女達の、下唇は傷付き、頬の化粧模様は薄れ、結わえ髪はずり落ち、汗の滴で赤い染料(身体の装飾)は湿った蓮華のような顔を目にするのです。

³²c 句末はネパール写本、梵文音写共に tvam eva sphuṭam で終わっている。しかしこの読みをとった場合、(1) d 句の drṣṭaḥ の主体を欠く (2) c 句冒頭にある brūhi の後に yadi が介在した後、二人称代名詞が明示されるという点で、不自然な構文となる。Tib. は cd 句を gdung bas gzir ba bsrung ba dang mnyam las bzang chos ni gang du ci zhig mthong bstan bcos mtha' dag shes pa khyod kyis gang 'di bden par gsal ba nyid du smros 「不幸に苛まれた者を守るに等しい善業というダルマを、何処かで見たのであるか。〔見たというなら、〕全ての教書を知る者よ、爾はそれを実にはっきりと語られよ」と解するが、drṣṭaḥ に相当する訳語 mthong の主体は明示されない。従って c 句末を *tvayaiva sphuṭam に修正する読みを提案する。但しこの読みは字形上からも裏付けられない上、写本伝承からも乖離する点で問題が残る。

5.8.7 女を得るために男は如何なる危険をも厭わない

viśanti kecit karabālavallī-
vilolajihvaṃ raṇakālavaktram |
yoṣitkr̥te krodhananakra[Z375b1]cakra-
karālam anye [D55b1] makarākarauḡham || 59.52 ||

52d makarākarauḡham] E (Ed., DE JONG); makarākaroghaṃ A; makarālayoyaṃ B; makarākarauḡhaṃ DZ.

| bud med ched du chu srin khros pa'i tshogs |
| 'jigs rung chu srin 'byung gnas 'jings su 'ga' |
| ral gri'i 'khri shing g.yo ba'i lce ldan pa |
| [Z375b2] g.yul ngo dus kyi khar ni [D55b2] gzhan dag 'jug 59.52 |

52c lce] DZ; rtse Σ. 52d gzhan] Σ; bzhan G.

若い女の為に男の中の或る者達は、蔓草のように〔細い〕剣を交え合う戦という舌の揺れ動いている死地に身を投じるのです。また別の或る者達は怒り狂った鱔の群れで恐ろしい大海の潮流に〔身を投じるのです〕。

5.8.8 性愛は法、実利に勝る

tīvraiś cirakleśaviśeṣaśoṣair
artheṣu pumsāṃ paramaḡ prayatnaḡ |
dharmārtha evārthaparigraho 'yaṃ
dharmasya kāmaṃ phalam agram āhuḡ || 59.53 ||

53d agram] Σ (DE JONG): *agryam Ex conj. Ed.

| yun ring nyon mongs khyad par che gdung bas |
| nor mams la ni skyes bu mchog tu 'bad |
| nor ni yongs 'dzin chos kyi don nyid de |
| chos kyi 'bras bu mchog ni 'dod par brjod | 59.53 |

53a che] DZ; cher Σ. 53c ni] DZ; 'di Σ.

長い間、筆舌に尽くし難い苦痛で激しく憔悴しながら、利を求めて男達は最善の努力をなします。この実利の獲得は実にダルマを目的としているのに他ならず、ダルマのもたらす最高の果報が性愛だと〔人々は〕言います。」

5.9 クナーラの諫言 (II)

5.9.1 実利、性愛のもたらす果が法である

iti bruvāṇāṃ bahubhiḡ prakārais
tām abravīd ākūlitāṃ kumāraḡ |

mātas trivargasya phalaṃ samūlaṃ
dharmāḥ pradhānaṃ kuśalasya nābhiḥ || 59.54 ||

l rnam pa mang pos de skad smra byed cing |
l 'khrugs pa de la gzhon nus rab smras pa |
l ma ma tshogs gsum gtso bo'i 'bras bu ni |
l dge ba'i lte ba rtsa ba dang bcas chos | 59.54 |

太子は、取り乱し数多の手段を尽くしてかく語る彼女に言った。「母上様、三大目的は土台となるものがあってこそ果をもたらします。〔そしてダルマこそが〕最も重要なものであり、善の核心です。

5.9.2 証人としての神々の存在

na nirjane pāpam *upaiti guptim
antarhitaḥ svargigaṇo 'tra sākṣī |
chāyā prayātā hi sahāyabhāvaṃ
jāyeva jānāti janasya [A230b1] sarvaṃ || 59.55 ||

55a *upaiti guptim] Ex conj. Ed.; upeti guptim Σ; upeti guptam DZ.

l skye bo med par sdig pa sbas mi 'gyur |
l 'dir ni dbang po snang min mtho ris tshogs |
l grogs kyi dngos por gyur pa'i grib mas kyang |
l chung mas bzhin du skye bo'i thams cad rig 59.55 |

55c grogs] DZ; grags Σ. 55d skye bo'i] DZ; skye bo Σ.

人気のない場所で〔犯された〕過失が明るみに出ないことなどありません。人目にはふれなくとも、ここには神々の集団という証人がおります。恰も妻の如くに、実に影は〔人に〕付きまとい、人の全てを知っているのです。

5.9.3 毒の喩え

rahaḥkṛtaṃ karma phalaty avaśyaṃ
na karmaṇām asti phalapraṇāśaḥ |
viṣaṃ nipītaṃ vijanāndhakāre
prāṇeṣu kiṃ na praharaty asaḥyam || 59.56 ||

56d prāṇeṣu] Σ; prāṇeṣu A.

l dben par byas pa'i las 'bras nges par smin |
l las rnams 'bras bu rab nyams yod ma yin |
l mun [G282a1] nag dben par dug ni 'thungs pa na |
l srog rnams mi bзад 'phrog pa min nam ci | 59.56 |

56d bзад] Σ; zad G.

人気のない場所でなされようが、業は必ず果をもたらします。諸業の果が消えてなくなるなどありません。〔身体にとって〕耐え難い毒を人気のない暗闇の中で飲んだとして、〔それが〕 どうして生命を害さないことがありますでしょうか。

jātyā striyaḥ pāpanimittabhūtās
tatrāpi ghorāḥ paradārasaṅgaḥ |
māte[B23b1; Z376a1]ti mohāt kalahe 'bhiyuktām
*nāntyo 'pi jantuḥ spr̥ṣati svakāntām || 59.57 ||

57d *nāntyo] Ex conj. DE JONG; nānte Σ; nāntyo DZ, Tib. translates *gzhan ... mi* (*nāntyo).

| rigs *kyis bud med sdig pa'i mtshan mar gyur |
| de la'ng 'jigs rung gzhan gyi bud med 'grogs |
| 'thab mo [Z376a2] la rmongs ma zhes mngon sbyar ba'i |
| rang gi chung mar skye gzhan yang mi reg 59.57 |

57a *kyis] Ex conj.; kyī Σ.

生来、女というものは悪の原因です。その〔悪の〕中でも、他人の妻との姦通は恐ろしいものです。男は最低の者でさえ³³、「母親だ。」と〔思えば〕、愚かさ故に痴話喧嘩に現を抜かず、愛しい自分の女に触れることはありません。」

5.10 太子の目を奪い取ることを予言する王妃

ity artha[D56a1]nābhaṅgaparānmukhī sā
tiraskṛtā tena nitāntataptā |
harāmy avaśyaṃ tava netradarpam
uktveti pāpā svapadaṃ jagāma || 59.58 ||

| de ltar don gnyer [D56a2] nyams pas phyir phyogs shing |
| de yi smad pas shin tu gdungs gyur te |
| khyod kyī mig dregs nges par bdag gis dbrog
| ces smras sdig can ma de rang gnas song | 59.58 |

58b yi] DZ; yis Σ.

以上のように〔クナーラに〕邪険にされ、彼女は切なる望みを砕かれたので〔彼に〕顔を背け、激昂し、「必ずや、爾の目という驕りを奪ってくれよう。」と述べ、〔その〕邪悪な女は、自分の住処へと戻って行った。

6 タクシャシラー遠征に派遣されるクナーラ

tataḥ purīm takṣaśilābhīdhānām
mahīpateḥ kuñjarakarṇanāmnah |

³³相当箇所をネパール系写本は nānte 「最後には・・・しない」、梵文音写、Tib. は nāntyo (*gzhan yang*) 「他者は・・・しない」とするが、これでは意味が通じない。そこで、DE JONG は相当箇所を *nāntyo 「最低の者は・・・しない」と修正するよう提案する。ここではその修正案に従う。

senārajaḥpuñjavinirjitārkaṃ
jetuṃ kumāraṃ visasarja rājā || 59.59 ||

59a puriṃ] Σ (DE JONG); purān DZ; *puram Ex conj. Ed.

l de nas grong khyer rdo [N199b1] 'jog ces par ni l
l sa bdag glang po'i rna ba zhes bya ba l
l 'dul du gzhon nu dpung gi rdul tshub tshogs l
l nyi ma 'pham byed ldan par rgyal pos btang l 59.59 l

59d 'pham] DZ; phan Σ.

それから〔アショーカ〕王はクンジャラカルナという名の王が領有するタクシャシラーという都城を服従させるべく、太子を送り出した。〔その太子は〕軍勢の立てる夥しい砂埃で太陽の光をも遮っていた。

sa tāṃ puriṃ prāpya gajāndhakāra-
grastākhi[E27b1]lāśaḥ parivārya tasthau l
kṣhubdhābdhidhīrair bhāṭakuñjarāṇāṃ
dvidheva kurvan bhuvanāṃ ninādaiḥ || 59.60 ||

l grong der des phyin glang po'i mun [P226b1] pa yis l
l ma lus phyogs bzung yongs su bskor te gnas l
l glang po dpa' sgra chu gter bskyod pa ltar l
l zab pas srid pa mam gnyis byed pa bzhin l 59.60 l

60d mam] DZ; mams Σ.

彼はその都城に着くや、象の〔影の〕暗闇で四方を飲み込み、〔都城を〕包囲し続けた。〔その彼は〕恰も戦士達の象が上げる、大しけの大海の〔立てる音の〕如く低い鳴き声で大地を真二つに裂いているかのようであった。

tataḥ prasādyā praṇipatya mūrdhnā
nṛpātmajaṃ takṣaśilādhināthaḥ l
gajāśvaratnair abhipūjya dhīman
svaraḥjadhānīm svayam ānināya || 59.61 ||

61a mūrdhnā] AE (Ed.); mūrdhā Σ. 61d svaraḥjadhānīm] Σ; svaraḥjadhāni DZ.

l de nas rdo 'jog rgyal pos rgyal sras la l
l spyi bos phyag 'tshal rab tu dang bar byas l
l glang po rta dang rin chen dag gis mchod l
l blo ldan rang gis rang gi rgyal sar bos l 59.61 l

61c rin chen] Σ; rin cen Z.

それからタクシャシラーの藩主は王子の機嫌を取り、頭をつけて平伏し、落ち着いた〔彼を〕象や馬や宝珠を用いて供養し、自分の宮殿に自ら連れて行った。

priyopacārair upasevyamānas
tenādarāt tatra sa rājaputraḥ |
di[Z376b1]neṣu tasthau ghanayauvanārdrā-
samullasan meghamalīmaseṣu || 59.62 ||

62a upasevyamānas] Σ (DE JONG); *abhipūjyamānas Ex conj. Ed. Tib. translates *nye bar bsten cing*. 62c -yauvanārdrā-] Σ; -yauvanābhra- DZ.

| der ni de yis dga' ba'i rim gro yis |
| gus pas nye bar bsten cing rgyal sras de |
| sprin [Z376b2] tshogs gzhon nu gsal ba rab rgyas pas |
| dri mar bcas pa'i nyin rnams rab tu gnas | 59.62 |

62b bsten] Σ; bstan DZ. 62c gsal ba] DZ; gsal bar Σ. 62d bcas] DZ; byas Σ.

〔クナーラを〕大切にすゝる気持ちから、彼はそこでその太子を友情のこもった待遇でもてなした。雨雲の故に暗い日々が続く時にも、〔太子は美質を〕余さず具備した若々しさ故に瑞々しい輝きを放っていた³⁴。

7 病に苦しむアショーカ王

7.1 アショーカと後宮の女の描写

atrāntare putramukhā[D56b1]ravinda-
saṃdarśanotkaṇṭhitamānasasya |
cintānubandhād iva bhūmibhartur
vyādhir babhūvodarabaddhamūlaḥ || 59.63 ||

63d -mūlaḥ] Σ (DE JONG); *-mūtraḥ Ex conj. Ed., Tib. translates *rtsa ba* (*-mūlaḥ). Cf. footnote.

| skabs der bu yi bzhin ras pad [D56b2] mo dag
| blta bar yid la rab tu 'dod pa yi |
| sa bdag lto bar rtsa ba bcings pa'i nad |
| byung bar gyur te bsams pas bcings las bzhin | 59.63 |

63b yi] DZ; yis Σ.

[A231a1] vaidyair vṛto 'ntaḥpuradhāmni nānā-
bhaiṣajyacintāvihitāvadhānaiḥ |
asādhyarogāvagamābhiyoga-
saṃdehasaṃdarśitakhedavakraiḥ || 59.64 ||

³⁴ghanayauvanārdrasamullasan の解釈が難しいが、これに類した ghanayauvananirbharā という表現は、Av-klp 第 64 章 Sudhanakinnarī 第 301 詩節に物語の女主人公の限定句として見られ、STRAUBE [2006: 201] は “mit ewiger Jugend begeben” 「永遠の若さを付与された」と解釈する。但しここでは主人公クナーラの限定句となっているので、ghana-を「永遠なる」というよりは寧ろ、「完璧な」、「非の打ちどころのない」という意味で理解した方が適切であるように思われるので、このように訳す。

l sna tshogs sman bsam bsam gtan sgrub [G282b1] byed cing l
l nad gsos min par rtogs pa'i rnal 'byor dang l
l the tshom gyis ni bzhin log mthong gyur pa'i l
l sman pas pho brang khang par rab tu bskor l 59.64 l

64b gsos] DZ; bsos Σ. || rtogs] DZ; rtog Σ.

udvegabhītyeva niṣaṅṅamauna-
kāñcīkalāpena vadhūgaṇena l
citrārpitākāratulāśritena
*niḥspandanetreṇa vilokyamānaḥ || 59.65 ||

65a niṣaṅṅamauna-] Σ (DE JONG); niṣaṅṅa_ _ _ _ A; niṣaṅṅamānaḥ B; *niṣadyamāna- Ex conj. Ed. Tib. translates *smra*
bcad. 65d *niḥspanda-] Ex conj YOKOCHI; nispana- Σ; nesanda- DZ; *niṣpanda- Ex conj. Ed.

l mya ngan 'jigs pas bzhin du dril chung ste l
l smra bcad du gnas btsun mo'i tshogs mams ni l
l ri mo bris pa'i rnam pa dang mtshungs la l
l rten pa'i g.yo med mig gis lta bar byed l 59.65 l

65d rten] Σ; brten DZ.

āsannakāntākaramandamanda-
vispandinā cāmarapallavena l
ucchvāsabhājā paripāṇḍureṇa
śokākuleneva sa vījyamānaḥ || 59.66 ||

66d śokākuleneva] DZ (Ed.); śokākulenaiva Σ.

l dal bu dal bur mnga yab 'dab ma ni l
l nyer 'khod mdzes pa'i lag pas rnam bskyod pa l
l mya ngan gyis 'khrugs shugs rings bsten pa *yi l
l yongs su dkar ba lta bus g.yob pa de l 59.66 l

66b 'khod] DZ; 'khor Σ. 66c *yi] Ex conj. yis Σ. 66d lta bus] DZ; lta bu Σ.

śītāmbubhṛṅgā[B24a1]raniviṣṭadrṣṭiḥ
kaṣā[Z377a1]yapāne vihitāvamānaḥ l
nidrāniṣedhapratipannakopaḥ
pathyopadeśapraviśadviśādaḥ || 59.67 ||

l chu grang ldan pa'i bum par mig gtad cing l
l bska ba'i btung [Z377a2] ba dag la zhen log bskyed l
l gnyid ni dgag pa'i khro ba rab rdzogs shing l
l phan pa'i nyer bstan dag la chags bral zhugs l 59.67 l

67b bska] DZ; ska Σ.

[D57a1] nindyāmayodvegajugupsamānaḥ
kāye 'pi sa dveṣadaśām avāptaḥ l

patnīstanotsaṅganiṣaṅgamūrdhā
kṣāmasvaraḥ kṣmāpatir ācacakṣe || 59.68 ||

68c-mūrdhā] Σ; mūrdhna DZ; *-mūrdhnā Ex conj. Ed.

| [D57a2] zhe sdang bcas pa'i skabs thob lus la yang |
| smad 'os rang bzhin chags bral gyis smod cing |
| btsun mo'i nu ma'i bar du mgo bzhag pa'i |
| skad gdangs [P227a1] zhan pa sa bdag gis smras pa | 59.68 |

68d zhan pa] DZ; zhan pas Σ.

その間、その心が息子の蓮華のような顔を見ることを切望する〔アショーカ〕王に、内臓に深く根を生やした病が³⁵、〔息子への〕絶えざる心配を原因としているかのように生じた。〔彼は〕後宮の住まいの中で医師達に囲まれていた。〔彼等は〕多様な薬について考察することにその注意を向け、治療できない病気について〔この病気は何だろうか〕理解しようと努めることと〔その病因を様々に〕疑うことで、その顔に疲労の色を滲ませていた。〔そしてまた彼は〕妻達に見守られていた。〔彼女達は〕恰も〔愛しい男との別離を〕恐れているかのように、その腰帯は沈黙を保っており³⁶、絵の中に描かれた姿にも等しく³⁷、その目は動くことがなかった。〔彼は〕新芽のような扨子に風を送られていた。〔それは〕近侍する妻の手で非常にゆっくりと揺れ、恰も溜息を吐き、悲しみに打ちひしがれ、青白い顔をした人のもようであった。〔彼は〕冷水を入れた水差しに視線を向けては、濃い飲料に心を向けず、眠りを禁ぜられて憤っては、適切な処方に対する失望の念を起こそうとしていた。彼は病気への憎むべき恐れを嫌悪しながらも、体をも厭う気持ちを抱いた。そして妻の乳房や膝に頭を置いては、か細い声をして、〔アショーカ〕王は述べた。

³⁵校訂本は当該箇所を vyādhir babhūvodarabaddhamūtraḥ 「内臓に尿と結び付けられた病が生じた」とするが、ネパール系写本、梵文音写、Tib. 共にこの読みを支持しない。写本の読み vyādhir babhūvodarabaddhamūlaḥ を採用すべきであろう。baddhamūla の用例は、DE JONG [1965: 234] が指摘するように、PW に Śīsupālavadhā 2.38 が典拠として挙がっており、このことも写本の読みを支持する証左となろう。

³⁶校訂本は a 句末を niṣadyamāna- とするがこれでは解釈が困難である。しかしネパール系写本 A は niṣanna- 以下が判読出来ない。DE JONG は Tib. smra bcad に従い、niṣaṅṅamauna- と読むよう提案する。これは梵文音写、写本 E から裏付けられるので、この読みを採る。

³⁷静止物を絵に喩える表現は、古典期のカーヴィア作品で頻繁に見られ、その典型例がカーリダーサの Kumārasambhava 3.42 である。

[Kum 3.42]
niṣkampavṛkṣaṃ nibhṛtadvirephaṃ
mūkāṅḍajaṃ sāntamrgapracāram |
tacchāsanāt kānanam eva sarvaṃ
citrāpitārambham ivāvatasthe ||

彼(シヴァ)が命令を下したので、木々が揺れ動かなくなり、蜂が騒ぐのをやめ、鳥が鳴くのをやめ、鹿が歩き回るのをやめた森全体は、恰も絵に描かれているかのように静止していた。

この用例については川村悠人氏の御指摘を頂いた。記して御礼申し上げます。

7.2 讓位を考えるアショーカ王

7.2.1 業苦を受ける者には法の教示が治療薬である

vaidyaiḥ kim adyāpi nivṛttavidyair
vyathānimittaiḥ kim atathyapathyaiḥ |
[E28a1] aśarmakarmopanipīḍitānām
dharmopadeśapraṇayaś cikitsā || 59.69 ||

69d dharmopadeśapraṇayaś] DZ (DE JONG); dharmopadeśaḥ praṇayaś Σ.

| rig bya rdzogs pa'i sman pas ding yang ci |
| gdung ba skyed [N200a1] byed bden med spyad kyis ci |
| bde med las kyis yongs su gzir ba mams |
| gso byed chos kyi nyer bstan la chags yin | 59.69 |

69a rig bya rdzogs] DZ; rig byed rdzogs Σ. 69b spyad] Σ; dpyad DZ. 69c bde] DZ; bden Σ. 69d kyi] Σ; kyis D.

「[自分の病を治すだけの] 知識のない医師達が今さら何になろうか。苦痛の原因である誤った食が何になろうか。不幸をもたらす業に苛まれた者にとっての治療薬とは、法の教えを愛することである。

7.2.2 享樂のない王權は苦しみである

kāyaḥ prayāto 'yam apāyabhūmiḥ
śalyāyate bhogagaṇo 'py abhogyāḥ |
andhasya lāvaṇyavatīva kāntā
bhogojjhitā śrīr ghana eva śāpaḥ || 59.70 ||

| lus 'di gnod pa'i sar song spyad mi 'os |
| longs spyod tshogs kyang zug rngu lta bur spyod |
| long ba'i chung ma mdzes sdug ldan pa bzhin |
| spyod spangs dpal ni dmod pa stug po nyid | 59.70 |

70a 'di] DZ; ni Σ. || spyad] Σ; dpyad DZ. 70c chung ma] Σ; bung ba G. || mdzes] Σ; mdzas Z. 70d dmod] Σ; smod DZ.

この体は災厄の〔巢くう〕場と化してしまった。諸々の楽しみも楽しまれ得ず、棘と化した。楽しみのない諸々の王權など実に絶え間なく続く呪いである。恰も盲人にとっての美しい妻のように。

atyantamandāgnir api *prasakta-
pradīptaśokānalada[A231b1]hyamānaḥ |
pravṛddhatṛṣṇo 'py anapetajāḍyaḥ
sukhī gatāsur na tu dīrgharogī || 59.71 ||

71ab *prasaktapradīptaśokānala] Ex conj. Ed.; prasaktadīptaḥ śokānala- A; prasaktaḥ pradīptaśokāgni- B; prasaktaḥ pradīptaśokānala- E; prasaktapradīptaḥ śvakānala- DZ. Cf. footnote.

l me dag shin tu dman yang rgyun du ni l
l rab 'bar mya ngan me yis sreg byed cing l
l gdung ba rgyas kyang [G283a1] rengs dang mi 'bral ba'i l
l ring po'i nad ldan ma yin srog song bde l 59.71 l

71b sreg] Σ; srog D.

〔身体の〕消化能力は著しく衰え、絶えず燃え続ける悲しみの火に焼かれている³⁸。
〔身体の〕活力はないのに渴愛は増している。幸せな者は死んだ者であって、長い間
病む者ではない。

[Z377b1] pracchannam antaḥparivarti pāpaṃ
nīcāvamānaḥ kalahānubandhī l
vyādhiḥ sthirā[D57b1]rambhajugupsitaś ca
dīptāgnitāpena śamaṃ prayānti || 59.72 ||

72d śamaṃ prayānti] B; sa samprayānti A; samaṃ prayānti E; samaṃ prayānti DZ; *śamaṃ prayānti Ex conj. Ed. Cf. footnote.

l [Z377b2] sdig pa rab bsgrigs nang du yongs gnas dang l
l dman pa brnyas shing rtsod pa rjes 'brel dang l
l nad kyi brtan par [D57b2] zil mnan smad pa dang l
l rab 'bar me yi gdung ba zhi bar 'gyur l 59.72 l

72b 'brel] Σ; 'bral Z. 72c kyi] DZ: kyis Σ.

内にある秘められた悪、諍い付随する卑しい蔑みの念、忍耐強い者に嫌悪される病
気は、燃えている〔火葬の〕火の熱で鎮まるであろう³⁹。

7.2.3 病や貧困は悪業に起因する

kukarmaṇām eṣa vicitrarūpa-
viparyayāyāsamayo vilāsaḥ l
dāridryakaṣṭaṃ yad arogabhājāṃ
lakṣmīvatāṃ yac ca sadaiva rogaḥ || 59.73 ||

l las ngan rtse dga' nyon mongs rang bzhin 'di l
l mnam par bkra ba'i gzugs ni zlog pa ste l
l nad med bsten gang dbul bas sdug bsngal zhing l
l phun tshogs ldan gang rtag tu nad can no l 59.73 l

³⁸DE JONG が指摘するように、ネパール系の若い写本 B のみが-anala-「火」に相当する語を-agni-として
いる。また何れの写本にも prasakta-ないしは-dīpta-の後にヴィサルガが挿入されているが、校訂本の採用
するヴィサルガを削除した写本 A の読み prasaktapradīptaśokānala-を採用すべきであろう。

³⁹d 句末を校訂本はśamaṃ prayānti とする。しかしネパール系写本、梵文音写共に prayānti という三人称
複数語尾の形を提示している。c 句末の ca は abc 句の実名詞 pāpaṃ, nīcāvamānaḥ, vyādhiḥ を結んでいると
考えられるから、śamaṃ prayānti という読みをとるべきであろう。ネパール系写本 A は sa samprayānti と
いう読みを保持しているが、これは“s”と“ś”の混同、“s”と“m”の筆写過程での誤写から派生した異読で
あり、śamaṃ prayānti → samaṃ prayānti → sa samprayānti と伝承されたものと思われる。従って写本 B の
示す śamaṃ prayānti という読みを採用して問題ない。

73b zlog] DZ; bzlog Σ.

悪業を背負う者達には、次のような多様な逆境や苦難という娯楽がある。それは、健康を享受できる者達にとっては赤貧という辛苦であり、さらにそれは、財ある者達にとっては常に病氣〔という辛苦〕である。

7.2.4 健康は生の根源である

bandhyaṃ janma śarīriṇāṃ virahitaṃ buddhyā vicāreddhayā
dhig buddhiṃ na kṛtaḥ prasādhanaividhir yasyāḥ śrutenojjvalaḥ |
kiṃ tena śrutavistareṇa na gato nirdainyatāṃ yaḥ śriyā
kiṃ śrīvibhramajṛmbhitena nitarāṃ ārogyabhogyam na yat || 59.74 ||

74a vicāreddhayā] AE (DE JONG); vicārena ca B vichāredbaya DZ; *vicārecchayā Ex conj. Ed. 74b dhig buddhiṃ] Σ (DE JONG); dhig buddhi AE; *dhig buddhir Ex conj. Ed.

| rnam dpyod rgyas pa'i blo dang bral ba'i lus can rnam kyi skye ba 'bras med de |
| gang gis blo gros thos pas rgyan gyi sgrub byed rab 'bar byas pa min pa smad |
| gang gi dpal gyis dbul ba nyid min ma gyur thos pa rgya che de yis ci |
| shin tu nad med nyid kyis gang zhig spyod med dpal gyi rnam 'phrul rgyas pas ci | 59.74 |

辯別能力によって光輝を発する知性なくして、衆生の生は無益だ。知性は何と貧しいものであることよ。もし、それが学識によって飾られもせず、燦々と輝かねば。その膨大な学識とて何になろうか。もし、それ(学識)が、富によって豊かさ(品性)を得ぬならば。富という美が開こうとて何になろうか。もし、それ(富という美)が残りなく健常時に楽しまれ得ぬならば。

7.3 クナーラの召喚を命じるアショーカ王

ānīya[B24b1]tāṃ me tvarayā kumāraḥ
prajāpriyas takṣaśilāniyuktaḥ |
paśyāmi tasmin vimale suvṛtte
*saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam || 59.75 ||

75d *saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam] Ex conj. Tib. *me longs la bzhin ... rang gi rgyal srid 'phos pa* (DE JONG); saṃkrāntam ato iva svarājyam A; sa_ _numato_ _svarājyam B; saṃkrāntam āva svarājyam E; saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam DZ; *saṃkrāntam adyaiva kṛtam svarājyam Ex conj. Ed. Cf. footnote.

| bdag gi gzhon nu skye rgu dga' ba ni |
| rdo 'jog du bskos myur du dgug par bgyi |
| me longs la bzhin dri med legs spyod zlum |
| de la rang gi rgyal srid 'phos pa lta'i | 59.75 |

75a gi] DZ; gis Σ. || skye rgu] DZ; skye dgu Σ. 75b bgyi] DZ; gyis Σ. 75c zlum] DZ; zum. Σ. 75d 'phos] Σ; 'pos DZ.

速やかに私の王子を連れて来い。〔彼は〕タクシャシラー〔平定に〕任命されたが、臣民が愛する者だから。私は鏡に映された自らの王たる様をあの汚れなく行い正しい彼に見るのだ⁴⁰。

samarpitodagra[Z378a1]sitātapatram
nibaddhamauliṃ praṇayān mayaiṃ |
paśyantū taṃ puṇyaraśāyana
mām e[D58a1]va paurās taruṇatvam āptam || 59.76 ||

76b praṇayān mayaiṃ | BE (Ed.); praṇāyān mayeva A; pranayān mayaiṃ DZ. 76d āptam | Σ; avāptaḥ A (unmetrical); āptaḥ E.

| nga nyid gus pas dbu rgyan [Z378a2] bcings byas shing |
| gdugs dkar mchog ni yang dag gtad pa de |
| grong pas nga nyid bsod nams bcud len gyis |
| [P227b1] gzhon nu [D58a2] nyid thob bzhin du lta gyur cig 59.76 |

実に私が愛情の故に、高く聳える白い日傘(王の象徴)を〔彼に〕譲り渡し、王冠を結んでやれば、都城の民は彼を福德という錬金薬で若くなった私に他ならないと見るだろう。」

7.4 讓位を断念させようとするアショーカ王妃

ity uktam ākaṇya nareśvareṇa
taṃ tiṣṭarakṣā nijagāda jāyā |
tulyapavṛttair bhayaśokadainya-
mātsaryamohaiḥ paripūryamānā || 59.77 ||

77c -dainya- | Σ (DE JONG); *-dyainya- Ex conj. Ed.

| ces pa mi yi dbang pos smras pa de |
| mtshungs par rab zhugs 'jigs dang mya ngan dang |
| dman dang phrag dog rmongs pas yongs khengs pa'i |
| btsun mo skar rgyal srung bas thos nas smras | 59.77 |

王が以上のように語ったのを聞いて、妃ティシュヤラクシャーは彼に言った。等しく起こった恐れ、悲しみ、さもしさ、嫉み、愚かさでいっぱいになって。

ahaṃ mahīpāla nirāmayam tvam
karomi me paśya viśeṣayuktim |
[A232a1] yāntu svaśikṣārthakadarthitārthā
janakṣayāvadyajuṣaḥ kuvaidyāḥ || 59.78 ||

78b karomi me | Σ (DE JONG); karomi te AB (Ed.), Tib. translates *bgyi bdag gi* (*karomi me). Cf. footnote.

⁴⁰ネパール系写本は d 句に欠損があり、何れも的確な意味を伝えていない。DE JONG は Tib. に従って *saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam という読みを復元しており、梵文音写の読み saṃkrāntarm (sic) ādarśa iva svarājyam がこれにほぼ同じである。従って DE JONG の推定する読みを採用する。

l sa skyong khyod ni nad med bdag gis bgyi l
l bdag gi rigs [N200b1] pa'i khyad par [G283b1] blta bar mdzod l
l rang gi bslab don nor nyams skye bo mams l
l brlag slad tshe sten sman pa ngan pa song l 59.78 l

78b bdag] Σ; bad Z. ll rigs] Σ; rig DZ. 78d sten] Σ; bsten DZ.

「王様、私が貴殿を健常にして差し上げましょう。病の恢復をもたらす、私の方策を御覧下さい⁴¹。自らの学習のために〔本来の〕目的を軽んじ、人に破滅をもたらす不道德な行いを好む悪しき医師の方々は去って下さい。

mithovivādaiḥ śrutagarvavādais
*tājñāpavādair abudhānuvādaiḥ l
nirvidyavaidyāḥ kṣapayanti nityaṃ
kṣayodyatā vāsaram āturaṃ ca ll 59.79 ll

79a mithovivādaiḥ] Σ, but Tib. translates *phan tshun chags bral* (*mithovirāgaiḥ?). 79b *tājñāpavādair] Ex conj. Tib. *de nyid shes smod* (DE JONG); tājñāpavādair Σ; tājñāpavāder DZ. Cf. footnote.

l rtag tu brlag brtson sman pa rig byed bral l
l phan tshun chags bral thos dregs snyems pa dang l
l de nyid shes smod mi mkhas rjes smra bas l
l nyin zhag dang ni nad pa 'phen par byed l 59.79 l

79b snyems] Σ; bsnyems DZ.

互いに口論することで⁴²、学識故の驕りから口に出る言葉で、知識あるものを誹謗することで⁴³、愚者の言葉を繰り返し述べることで、知識のない医者達は、滅に努めて、日々と病む者をいつも損っているのです⁴⁴。

tyājyaṃ na rājyaṃ svasute 'pi rājan
sprhāṃ parasthaṃ vidadhāti sarvam l
tyaktā ca lakṣmīḥ kurute kṣaṇena
[E28b1] vi[Z378b1]patsahasrajvalanānutāpam ll 59.80 ll

80c tyaktā] AB (Ed.); tyaktvā E; tyaktva DZ, Tib. translates *btang na*.

l rang gi bu la'ng rgyal srid mi gtang ste l
l rgyal po gzhan la yod kun dga' skyed byed l

⁴¹b 句冒頭部をネパール系写本は全て *karomi te* とするが、これでは「貴殿の方策をご覧下さい」となり意味が通じない。DE JONG は Tib. に従い *te* を *me* に修正する読みを提案しており、梵文音写はこれを支持する。従って *karomi me* の読みをとる。

⁴²該当箇所 の Tib. は *phan tshun chags bral* 「互いに反感を抱き合う」である。Tib. は該当箇所を **mithovirāgaiḥ* と読んでいた可能性がある。

⁴³該当箇所 のネパール系写本の読みは *tājñāpavādair* 「彼が低唱するのを誹謗することで」であり、校訂本はこの読みを採る。しかしこの読みを採用すると *taj-* の指す指示対象が不明瞭になる。DE JONG は Tib. に従いこれを **tājñāpavādair* 「知識あるものを誹謗することで」と復元することを提案する。この読みは梵文音写 *tājñāpavāder* (lies: *tājñāpavādair*) から支持されるので、これを採用する。

⁴⁴*kṣapayanti* 「〔医者達は〕損ってしまう」に相当する訳を Tib. は '*phen par byed* 「投げさせる」とする。Tib. は相当箇所を √*kṣip* 「投げる」の使役形と理解したらしい。

l phun sum tshogs pa btang na skad cig gis l
l [Z378b2] rgud pa stong phrag me yis gdung bar byed l 59.80 l

80a gtang] Σ; gtong D.

自分の息子の為といえども、王権を捨ててはなりません。王様、他者の手に渡っているあらゆるものは〔人に〕羨望をもたらすものです。そして王権を捨ててしまえば、忽ち不幸という幾千もの後悔の炎に焼かれることになります。

sadyaḥ sutāropitaśekharāṇām
tatkāla[D58b1]mīlatprabhugauravāṇām l
rājñām anamrair avadhīritāni
ṛṇībhavanty eva hi śāsanāni ll 59.81 ll

81a -śekharāṇām] Σ; -śeṣarāṇām AE. Cf. footnote. 81d ṛṇībhavanty] Σ; ṛṇībhavaty DZ.

l 'phral la bu la zur phud bkod gyur cing l
l de dus rje bo'i [D58b2] gus pa nyams gyur pa'i l
l rgyal po'i bka' ni dud pa min rnams kyis l
l cha yi gcod cing rtswa dang mtshungs par 'gyur l 59.81 l

81d yi] DZ; yis Σ.

何故なら、王が息子に王冠を載せ⁴⁵、その時支配者としての威厳が閉じて（死滅して）しまえば、〔彼の下す〕命令というものが、高慢な者達によって忽ち軽んぜられ、実に小草に等しいものになってしまうのですから。」

7.5 治療法を見出すアショーカ王妃

iti kṣitīśasya dhṛtiṃ vidhāya
nirgatya tasmād bhavanāntarāt sā l
anviṣya tattulyagadābhibhūtam
ābhīram ekāntam athānināya ll 59.82 ll

82c -gadābhibhūtam] Σ; -madābhibhūtam B.

l zhes pas sa dbang brtan pa bsgrubs nas ni l
l khang nang de las de ni phyi rol song l
l ba rdzi de mtshungs nad kyis gzir ba zhig
l btsal nas dben pa'i gnas su bos byas te l 59.82 l

82c kyis] DZ; kyi Σ.

このように王を勇気付けて、彼女はその御殿の中から外に出て行った。それから、彼と同じ病気に冒された牛飼いを探し、人気のない場所に連れて来た。

⁴⁵ネパール写本 AE は -śeṣarāṇām という読みを提示するが、これはプロト・ベンガル文字での伝承過程で生じた “kh” と “ṣ” の字形の類似に起因する誤写であろう。

krūrāśayā krūradhiyaiva dāsyā
hatvā tam utpātitanābhikoṣam |
tasyāntralagnaṃ paruṣaṃ dadarśa
ghṛṇāvihīnā vikṛtaṃ kṛmim sā || 59.83 ||

83d vikṛtaṃ | AE (Ed.); vikṛtiṃ B; vikṛta DZ.

| gdug pa'i bsam pas 'bangs mo gdug pa'i blos |
| de bsad lte ba'i mdzod ni rab phyi ste |
| brtse bas dman des de yi rgyu mar ni |
| mnam 'gyur rtsub mo'i srin bu chags pa mthong | 59.83 |

83c dman | Σ; sman DZ.

彼女は無慈悲であったので、残忍な意図を以て、残忍な心から、婢を使って臍の球を切り裂いて彼を殺害し、彼の内臓にとどまっている、形の荒い奇妙な虫を目にした。

ūrdhvaṃ pracāreṇa javād adhaś ca
śakṛt srjantaṃ tam avekṣya hantum |
sā pippalīhinguviḍaṅgayuktaṃ
cikṣepa tasmai maricā[B25a1]divargam || 59.84 ||

84b avekṣya | Σ; apekṣya E. || hantum | Σ (DE JONG); *hanta Ex conj. Ed. 84d maricādivargam | A (DE JONG); paricādivargam Σ; *parivādivargam Ex conj. Ed.

| gyen du rab rgyu mgyogs par thur du yang |
| gci ba spro byed de mthong gsad phyir des |
| byi dang ga sbyar shing kun pi pi ling |
| pho ba ris sogs sde tshan de la blugs | 59.84 |

84b gsad | DZ; bsad Σ. 84d pho ba ris | Σ; pho ba ril Z.

素早く〔体内を〕上下して動き回り、糞を排出しているそれ(虫)を見て、〔それを〕殺す為に、彼女(ティシユヤラクシャー)は畢鉢の実(*Piper Longum L.*)、阿魏の樹脂(セリ科 *Ferula* 属の植物⁴⁶)、ヴィダンガの実(*Embelia Ribes Burm.* ヤブコウジ科の植物)に加えて、胡椒の実(*Piper nigrum L.*)等の類を、それ(虫)に振り掛けた。

tais taiḥ sa kīṭaḥ saviṣaiś ca kaiścīt
kṣārair asahyair na mumoca jīvam |
palāṇḍunā *khaṇḍitakandakena
saṃsprṣtamātrah pralayaṃ jagāma || 59.85 ||

⁴⁶APTE の辞書では、*Ferula Asafoetida* に学名同定されている。しかし、*Ferula Asafoetida* には、アフガニスタンから西パキスタンにかけて *Ferula hindukushensis*、*Ferula baluchistanica* などの亜種が存在することが報告されており (Shiro KITAMURA, *Plants of West Pakistan and Afghanistan* (Kyoto: Kyoto University, 1964), 109–111)、hiṅgu を学名同定することは困難と思われるので、ここでは「セリ科 *Ferula* 属の植物」としておく。

85a kīṭaḥ] Σ; kīṭaiḥ B. || kaiścit] Σ; kaiści B. 85c *khaṇḍitakandakena] Ex conj.; khaṇḍitakaṇṭhalena AE; khaṇḍitakaṇṭhakena B; ṣaṇḍitakandalena DZ; *khaṇḍitakhaṇḍalena Ex conj. Ed.; *khaṇḍitakhaṇḍakena Ex conj. DE JONG. Cf. footnote.

l mi bzad 'gyur byed dug ldan gang dag ste l
l de des srin bu de ni srog ma btang l
l sgog skya'i rtsa ba dag ni gtubs pa yis l
l reg pa tsam las rab tu zhig [P228a1] par gyur l 59.85 l

85a dug] Σ; drug DZ. 85b btang] Σ; gtang DZ. 85c gtubs] Σ; btubs G.

その虫はあれこれの〔虫にとって〕有毒な耐え難い刺激物の如何なるものによっても死ぬことがなかった〔が〕、鱗茎を細かく砕いた玉葱に触れるや否や⁴⁷、死んでしまった。

7.6 王の病を治すアショーカ王妃

[Z379a1] upāyam āsādyā paraprahṛṣṭā
gatā [A232b1] ta[D59a1]taḥ sā nṛpateḥ samīpam l
palāṇḍunā cchannatarārpitena
kṣaṇena taṃ svasthatanuṃ cakāra || 59.86 ||

86b gatā] Σ; gatvā DZ. Tib. translates *song ste*. 86c cchannatara-] Σ; cchinnatena DZ; *cchinnatara- Ex conj. Tib. *legs par bcaḍ pa* (DE JONG). Cf. footnote.

l [Z379a2] thabs mchog rnyed nas [G284a1] rab tu dga' ba de l
l de nas mi yi [D59a2] bdag po'i drung song ste l
l sgog skya legs par bcaḍ pa byin pa yis l
l skad cig gis ni de lus bsos par byas l 59.86 l

86c skya] Σ; cha G. 86d bsos] Σ; bsod G.

〔病気を治す〕方法を得て、彼女（ティシュヤラクシャー）は非常に喜んで、それから王のもとへ行った。〔そして彼女は〕極秘の下に差し出された玉葱の鱗茎を用いて⁴⁸、彼（アショーカ）の体を忽ち健常にさせた。

⁴⁷c 句 khaṇḍita-以下は早い段階で写本伝承に混乱を生じたようである。ネパール系写本 AE の読みは khaṇḍitakaṇṭhalena、写本 B の読みは khaṇḍitakaṇṭhakena、梵文音写の読みはṣaṇḍitakandalena (lies: khaṇḍitakandalena) であり、Tib. は *sgog skya'i rtsa ba dag ni btubs pa* 「砕かれた玉葱の根」の訳語を充てている。校訂本は khaṇḍitakhaṇḍalena という読みを復元するが、DE JONG [1965: 235] は khaṇḍalena の用例が koṣa 類に見られないことからこれを疑問視し、*khaṇḍitakhaṇḍakena と復元することを提案する。しかし palāṇḍunā の限定句として解釈した場合「破片を砕かれた〔玉葱〕」となってしまう、意味が通じない。Tib. に基づくならば寧ろ*khaṇḍitakandakena 「その鱗茎を細かく砕かれた〔玉葱〕」という読みが適当であろう。但しこの読みは梵文写本の読みからかなり乖離してしまう点で問題が残る。あくまで梵文写本の読みに近づけようとするならば、*khaṇḍitakhaṇḍitena 「よく砕かれた」の読みも想定されようが、今度は Tib. の解釈から乖離することになる。ここでは暫定的に*khaṇḍitakandakena の読みを採用する。要検討。

⁴⁸DE JONG が指摘するように、該当箇所にはネパール系写本とチベット系伝本の読みに相違が見られ、前者に従って読むと、palāṇḍunā cchannatarārpitena 「極秘の下に差し出された玉葱の鱗茎を用いて」、後者に従って読むと、palāṇḍunā cchinnatarārpitena 「よく切り刻まれてから差し出された玉葱の鱗茎を用いて」となる。引田 [2006–2007: 183(154)] が指摘するように、*Yājñavalkyaśmṛti* 1.176 には、

viśasya yatrāsti na jātu śaktir
yatrāśu śaśtrāny api kuṅṭhitāni |
yatrālasotsāhahato hutāśas
tatrāpy abhaṅgapraṇayā yuvatyaḥ || 59.87 ||

87d abhaṅgapraṇayā] Σ (DE JONG); abhargapraṇayā E; *abhagnapraṇayā Ex conj. Ed.

| gang la dug gi nus pas cang yod min |
| gang la mtshon gyis kyang ni myur mi phugs |
| gang la me ni spro nyams le lo can |
| de la yang ni bud med brtan nyams min | 59.87 |

毒が決して効力を発揮できないもの、剣も忽ちなまくらとなるもの、火が勢いを失い、〔燃焼〕能力を消失してしまうもの、そんなものに対しても、女というものの望みは碎かれることがないのである。

8 眼を抉られるクナーラ太子

8.1 七日間の王権を得るアショーカ王妃

tataḥ kṛtajñāḥ kṣitivallabho 'syai
premānubandhapratibaddhabuddhiḥ |
varam dadau jīvitalābhaharṣāt
tayārthitaṃ saptadināni rājyam || 59.88 ||

88a 'syai] Σ (DE JONG); 'sau DZ; *'smai Ex conj. Ed. Tib. translates *de la*.

| de nas sa bdag byas shes mdza' ba yi |
| 'ching bas blo gros bcings pas de la ni |
| 'tsho ba thob pa'i dga' bas mchog dag byin |
| de yis nyin zhag bdun du rgyal srid bslang | 59.88 |

88a yi] Σ; yis DZ. 88d bslang] DZ; blangs Σ.

そして王は彼女に感謝した。〔彼は妻への〕愛情の結果、知性を妨げられて彼女に七日の間の王権を求められると、〔彼は〕命を取り戻したことに喜んでいたので、恵みとして〔王権を彼女に〕与えてしまった。

[*Yājñavalkyaśmṛti* 1.176]

palāṇḍuṃ viḍvarāhaṃ ca chatrākam grāmakukkuṭam |
laśunaṃ grñjanam caiva jagdhvā cāndrāyaṇam caret ||

実に、玉葱 (palāṇḍu)、村で飼育された豚、茸、村で飼育された鶏、ラグナ、グリーンジャナ (いずれも蒜の一種) を食べた後は、チャーンドラーヤナをなすべきである。

という蒜類を食することを禁じる規定があり、Divy (409.21–22)、『王伝』(108c16)、『王経』(145a29–b1)、Kun (D231b4; P287a3; G331b3; N260b4–5) にはアショーカが玉葱を食べることを躊躇う記述が見られる。この点を考慮すると前者が文意に沿っていると思われるが、字形上 cchinna→cchanna-の読みの派生は想定され得ても、逆は想定されにくいこと、また第 85 詩節 c 句に khaṇḍita- 「粉々に碎かれた〔玉葱の鱗茎〕」とあることを考慮すると後者の可能性も否定できず、何れの読みが本来の読みであるか判断し難い。ここでは写本 A の読みを採用する原則に従い、梵文写本の読みを採る。

8.2 勅書の発送

samprāptarājyā svavaśaiva sarvaṃ
kartuṃ pravṛttā kṣitipālakāryam |
sā prāhiṇot takṣaśileśvarāya
lekhaṃ samudraṃ saha cāsuratnaiḥ || 59.89 ||

| [N201a1] rgyal srid thob nas sa skyong bya ba ni |
| thams cad rang dbang nyid kyis byed par zhugs |
| rdo 'jog dbang po la ni spring yig dag
| rgya ldan rin chen mdzes pa dang bcas springs | 59.89 |

89d rin chen] Σ; rin cen DZ.

彼女は王権を手に入れ、実に思うが尽に振る舞えるようになったので、王がなし得る全てのことをなし始めた。〔そして〕印章を押した手紙を美しい宝石と一緒にタクシャシラーの王に送った。

lekhaṃ tatas taṃ nrpaśāsanāṅkam
ādāya mānyaṃ vinayāvanamraḥ |
svayaṃ vibhaktākṣaralakṣitārtham
avāca[Z379b1]yat takṣaśilādhināthaḥ || 59.90 ||

90a -śāsanāṅkam] Σ; -sasanāṅkam B; -śāsanākem E. 90c vibhakta-] Σ, Tib. translates *gsal ba* (*vyakta-?).

| de nas mi bdag bkas mtshan spring yig de |
| dul zhing rab tu dud pas mchod de blangs |
| rdo 'jog bdag po rang gis gsal ba yi |
| yi ges [Z379b2] mtshan pa'i don ni rab tu bklags | 59.90 |

90c gis] DZ; gi Σ. || gsal] Σ; bsal G. || yi] Σ; yis DZ. 90d mtshan] Σ; mtshon DZ. || bklags] Σ; ___s Z.

それから、畏敬さるべきその勅令の印の入った手紙をタクシャシラーの藩主は、謙遜心から頭を下げて受取り、自らはっきりとした文字でその内容が記されている〔手紙を〕読み上げた。

8.3 勅書

svasti śrīpāṭa[D59b1]lipu[E29a1]trād asamasamarasāhasasamāsāditasamastasindhusīmāsa-
mucchaladaviralavimalayaśaḥkalāpakalitadhavaladukūlavasudhāvadhūdattabhogasaubhāg-
yagarvakharvīkṛtavipularipupratāpaḥ śāpa ivārātiramaṇīvilāsānāṃ praṇatipratibimbītānant-
asāmantavaktraśatapattraikapātrīkṛtavimalamaṇīpādapīthaḥ sukṛtakuśalakamalavikāsavāsa-
reśvaraḥ sphītasauryaamaurya[A233a1]mahāvamśavanapañcānanāḥ śrīmadaśokadevas takṣ-
aśilādhipaṃ śrīkuñjarakarṇaṃ sam[D60a1]bodhaya[Z380a1]ti | yathā eṣa me nirapatrapaḥ
kucaritamaitrī parisrastacāritraḥ putramukhaśatrur apavitraḥ śāstravidveṣī pitṛkalatrā[B25b
1]bhilāṣaviṣapātrīkṛtanetraśatapattraḥ pāpānurūparūpayauvanotsāhasāhasaḥ *samutpāṭitalo-
canamaṇir nirvastro nirvāsyatāṃ jananījanabhujaṅga ity asmadabhyarthanāpraṇayaḥ ||

2 -bhoga-] Σ; -bhogya- DZ, Tib. translates *spyod par bya ba* (*-bhogya-). 2-3 -saubhāgya-] BE (Ed.); -sobhāgya- Σ. || -kharvikṛta-] AB (Ed.); -kharvibhūta- E; -khanvikṛta- DZ. || -ripu-] AB (Ed.); -ripuḥ E -risu- DZ. 3 -pratibimbitānanta-] ABE^{Pc}DZ (Ed.); -prabimbitānanta- E^{ac}; -prabimbitānanta- A. Cf. footnote. 4 -vaktra-] Σ; -vaktraṃ B. || sukṛtakūśala-] DZ; sukṛtakūśala- A; suhṛtakūśala- BE (Ed.), Tib. translates *legs byas dge ba*. Cf. footnote. 5-6 sphītasauryamahāvamsāvanapañcānaḥ śrīmadaśokadevas takṣaśīlādhipaṃ śrīkuñjarakaṇṇaṃ] Σ; sphītasauryamahāvatsalavarakarṇaṃ DZ. 6 nirapatrapaḥ] ABE^{Pc}DZ (Ed.); nirapaḥ E^{ac}. 7 -maitrī] Σ; metrī A. || parisrasta] B (Ed.); paristrasta- A; paritrasta- Σ, Tib. translates *yongs su skrag pa*. Cf. footnote. || -śatrur] ABE^{Pc}DZ (Ed.); -śakrur E^{ac}, A is difficult to decipher, it seems to be written -śatrur. || apavitrah] Σ; apivitraḥ AE, Tib. translates *mi gtsang* (*apavitrah). Cf. footnote. 7-8 -kalatrābhilāṣa-] Σ; -kalahābhilāṣa- B. 8 -viṣa-] Σ; -dviṣa- E, A is difficult to decipher, but it seems to be written -viṣa-. 9 *-mañir nirvastro] Ex conj. Tib. *nor bu ... gos dang bral bar*; -mañir nivasano Σ; -mañir nivasano DZ; *-mañinirvasano Ex conj. Ed.

l swa sti grong khyer *pā ṭa [D59b2] li pu tra las mtshungs pa med pa'i g.yul la dpa' bas yang dag par thob pa l rgya mtsho mtha' dag gi mtshams su rab tu 'phro zhing mi zhan la dri ma dang bral ba'i grags pa'i tshogs las bsgrubs pa'i du ku la'i ras dkar pos nor 'dzin gyi bu mo la longs spyod par bya ba skal ba bzang po nyid kyis bsnyems pa byin pa l dgra bo'i gzi byin nyams par byed cing mi dga' ba rnams kyī dga' ma'i rtse dag'i dmod pa bzhin du gyur pa l dri ma med pa'i nor bu'i rkang stegs mtha' yas pa'i rgyal phran gyis rab tu btud [G284b1] pa'i bzhin gyi pa dma'i gzugs brnyan gyi gcig tu byas pa l legs byas dge ba'i pa dmo rnām par rgyas par byed pa'i nyin mo'i dbang phyug rtul phod pa dang brtson 'grus dang spro ba chen po rab tu rgyas pa'i nags tshal gyi gdong lnga pa [P228b1] dpal lha mya ngan med pas rdo 'jog gyi dbang po dpal glang po'i rna ba la yang dag par rtogs par byed pa [D60a2] 'di [Z380a2] lta ste l bdag gi bu'i bzhin dang ldan pa'i dgra l khrel med cing ngan pa'i spyod pa la byams la yongs su skrag pa'i spyod pa can l mi gtsang zhing bstan bcos la sdang ba l mig gi 'dab brgya pha'i chung ma la mngon par sred pa'i dug gi snod du byed pa sdig pa'i rjes su mthun pa'i gzugs dang lang tsho dang spro ba dang rtul phod pa dang ldan pa l skye bo mi'i lag 'gro 'di'i mig gi nor bu rab tu phyung ste gos dang bral bar bskrad par mdzod cig l ces pa bdag gi 'bad pas don du gnyer ba'o l

1 *pā ṭa li pu tra] Ex conj.; pā ṭa la'i bu ṭa D; pā ṭa la yi pu tra Z; pā ta lī pu tra PN; pā ṭa lī pu ṭa G. || dpa' bas] DZ; dpa' ba Σ. 2 yang dag par] Σ; yang dag pa G. || mtha' dag gi] Σ; mtha' dag gis G. 4 spyod par] Σ; spyad P. || kyis bsnyems] DZ; kyī snyems Σ. 7 bzhin gyi] DZ; bzhin gyis Σ. || gzugs brnyan gyi] Σ; gzugs can snod D; gzugs can snad Z. 8 phod pa] Σ; phod DZ. 10 med pas] Σ; med pa yis Z. 11 dgra] DZ; sgra Σ. || khrel] Σ; khel Z. 14 phod pa] Σ; phod DZ. 15 'di'i] Σ; 'di DZ. || mig gi] DZ; mig Σ. || 16 bskrad par] Σ; bskrad G.

幸あれ。吉祥なるパータリプトラより。

〔その数、激しさの点で〕無比なる干戈において〔発揮された〕勇猛さにより得られた、全ての（四方の）大海まで広く行き渡る⁴⁹、大いなる、汚れなき名声という飾りを付け、白い絹衣に身を包んだ大地という女が付与した楽と繁栄と誇りによって⁵⁰、夥

⁴⁹-samastasindhusīmāsamucchalad-の解釈が難しい。当該個所を Tib. は *rgya mtsho mtha' dag gi mtshams su rab tu 'phro zhing* 「全ての海の境界に広がる〔大地〕」と訳していることから、恐らく、「閻浮提の四方の海の際にまで帝国の領土が及んでいる」という内容を意味していると思われる。但し、samucchalad-が「広がる」の意味で用いられる用例は他になく、この解釈には問題があるかもしれない。

⁵⁰avilala-以下の Tib. の解釈にはかなり相違が見られ、Tib. は *mi zhan la dri ma dang bral ba'i grags pa'i tshogs las bsgrubs pa'i du ku la'i ras dkar pos nor 'dzin gyi bu mo la longs spyod par bya ba skal ba bzang po nyid kyis bsnyems pa byin pa* 「途切れることなく、汚れなき諸々の名声故に獲得された白い衣で、大地という女に楽しまれるべきもの、即ち幸福より生じる自負を与える者」と解釈する。

しい敵のもたらす苦しみを退ける者であり、敵が妻との間で交わす戯れにとっては、恰も呪いの如きであり、その無垢な宝珠の足載せ台を、平伏して写し出された無数の藩王の蓮華のような顔を一つに収める場とし⁵¹、善い行いから生まれる幸福という蓮華を开花させる太陽であり⁵²、最盛の極にある日種のマウリヤという偉大な一族の獅子である⁵³、吉祥なるアショーカ王は、タクシャシラー藩主、吉祥なるクンジャラカルナに次のように申し伝える。ここにいる者(クナーラ)は、凶々しく、素行悪しき者に好意を寄せ、善き振る舞いを失い⁵⁴、息子の顔をした私の敵であり、不純な者であり⁵⁵、教書を厭い、蓮瓣のようなその目を〔自分の〕父親の妻への欲求という毒の器とし、邪悪さに見合った美しい容姿を備え、若く、堅忍不拔で、勇猛である。〔この者の〕宝珠のような目を抉り出し、衣を剥ぎ⁵⁶、追放せよ。〔この者は〕母親にとっても蛇のような輩である。以上の私の要求〔を満たすこと〕を所望する次第である。

8.4 困惑するタクシャシラーの藩主

lekhārtham ity ugrataraṃ vicārya
*viśīryamāṇaḥ kṛpayā kṛpāluḥ |
prītyā kumārasya nṛpasya bhītyā
dolāyamāno nṛpatir babhūva || 59.91 ||

91a lekhārtham] Σ; leśārtham B. 91b viśīryamāṇaḥ] A^{pc} (DE JONG); vicīryamāṇaḥ A^{cc}; vicāryamāṇaḥ BE; vicāryamaṇaḥ DZ; *nivāryamāṇaḥ Ex conj. Ed. Tib. translates *mam par 'gems byed cing* (*viśīryamāṇaḥ). Cf. footnote.

| spring yig don 'di rab drag mam dpyad nas |
| brtse ldan brtse bas nram par 'gems [N201b1] byed cing |
| gzhon nu la mdza' mi bdag la 'jigs pas |
| mi bdag yid ni khyogs la bteḡ par gyur | 59.91 |

⁵¹pratibimbīta-「写し出された」に相当する個所が写本 A には prabimbīta-と誤写されている。写本 E の本文には prabimbīta-とあるが、欄外に記された“ti”を補うよう指示している。梵文音写は pratibimbīta-の読みを保持しており、Tib. *gzugs brnyan* はこれを支持する。従って pratibimbīta-の読みを採用する。

⁵²当該個所を梵文写本 A は sukṛtakula-「善い行いの一族」、校訂本及び梵文写本 BE は suhṛtkula-「友人の一族」とするが、これでは意味が通じない。そこで梵文音写、及び Tib. を見てみると、sukṛtakula- (*legs byas dge ba*)「善い行いから生まれる幸福」となっていることが知られる。これに従って読むと、「善い行いから生まれる幸福という蓮華を开花させる太陽である〔アショーカ〕」という隠喩 (rūpaka) が成立する。従って、恐らくこれが本来の読みであり、梵文写本は文字 la の脱落と kṛ と hr̥ の混同の結果、上記の読みを派生したものと思われる。

⁵³当該個所は梵文音写に欠損が見られ、殆ど意味を成さない。またネパール系写本と Tib. に大幅な乖離が見られ、Tib. は当該個所に *dbang phyug rtul phod pa dang brtson 'grus dang spro ba chen po rab tu rgyas pa'i nags tshal gyi gdong lnga pa*「自負に満ち、勇敢で、多大な歓喜を抱く〔支配者 (dbang phyug)〕」であり、最盛の極にある森の獅子である〔アショーカ王は〕という訳語を充てる。

⁵⁴DE JONG が指摘するように、当該個所は伝承に混乱が見られる。意味の通る読みを伝えているのは梵文写本 B と梵文音写二本であり、前者に従って読むと、parīrastacāritraḥ「善き振る舞いを失った」、後者に従って読むと、parīrastacaritaḥ「その行いが恐れられた」となり、これは Tib. の解釈、*yongs su skrag pa'i spyod pa can* と一致する。但し、当該個所は直前の kucaritamaitrī「素行悪しき者に好意を寄せ」という語句との対比表現と考えられ、写本 A の読みも写本 B の読みに近い。従って校訂本通りの読みを採用する。

⁵⁵ネパール系写本 A の読みは apivitraḥ であるが意味が通じない。梵文音写は apavitraḥ の読みを伝え、Tib. *mi gtsang* はこれを支持する。従って校訂本の読みを採用する。

⁵⁶当該個所はネパール系写本、梵文音写、校訂本いずれの読みも意味を成さない。Tib. を見ると、*'di'i mig gi nor bu rab tu phyung ste gos dang bral bar bskrad par mdzod cig*「この者の目という宝珠を抉り出し、衣を剥いで追放せよ」とある。従って当該個所を *maṇir nirvastro にかえて読む。

91a 'di] Σ; ni DZ. || drag] Σ; brtags DZ. 91d yid] DZ; yod Σ.

以上の、手紙に書かれているとても恐ろしい事柄を考えると、王は憐みの心から〔悲しみに心を〕引き裂かれた⁵⁷。〔彼は〕情け深かったので、太子への親愛の情と、王への畏怖の念で、ぶらんこのように心が揺れた。

8.5 勅書の内容を知るクナーラ太子

tatra sthitas taṃ kṣitim īkṣamāṇaṃ
nirīkṣya bāṣpākulitaṃ kumāraḥ |
kim etad ity āgatasamśayārthiḥ
svayaṃ samādāya dadarśa le[Z380b1]kham || 59.92 ||

| mchi mas 'khrugs shing sa la blta ba de |
| gzhon nu de na gnas pas mthong gyur nas |
| 'di dag ci zhes the tshom gyis gzir gyur |
| sbring yig rang gis yang dag blangs nas [Z380b2] bltas | 59.92 |

92a blta] DZ; lta Σ.

彼が〔目に〕涙を浮かべて地を向いているのをそこにいた太子は見ても、「どうしたのだろう。」という沸き起こる疑念に苛まれ、自ら手紙を受け取って見た。

ājñāṃ guror duḥ[D60b1]sahadurgrahāṃ tām
niścītya mithyotthitatīvrāmanyoh |
tasmīn asahavyasanodaye 'pi
so 'cintayan niścādhairyaṅvṛttiḥ || 59.93 ||

93a ājñāṃ] Σ; ājñā BE.

| brdzun gyis rab bskrun cher khros [D60b2] bla ma'i bka' |
| gzung dka' bzod par dka' ba de mthong nas |
| mi bзад gdung ba rgyas pa de la yang |
| brtan pa'i spyod tshul g.yo med de yis bsams | 59.93 |

93a gyis] Σ; gyi DZ. 93d brtan] DZ; bstan Σ. || bsams] DZ; bsam Σ.

〔タクシャシラーの藩主には〕耐え難いものであり承服し難い、父親が激しい怒りを生じて下したその命令が「偽りだ。」と確信したが、彼は〔自身に今まさに〕そのような耐え難い不幸が生じようとしているにもかかわらず、動揺することなく沈着冷静さを保った俛考えた。

icchā pitus tāvad iyaṃ na laṅghyā
rakṣyaś ca tatkopabhayān nrpo 'yam |

⁵⁷校訂本はb句冒頭部をnivāryamāṇaḥとするが、写本に裏付けられない。写本Aはvicīryamāṇaḥという読みを伝えるが、DE JONGは写本Aの欄外に“s”の書き入れがあるのを基にviśīryamāṇaḥと修正するよう提案する。対応するTib.はrnam par 'gems byed cing「砕かれて」であり、これを支持する。従ってDE JONGの指摘する読みを採る。

mithyāparādhāt kupito 'pi rājā
prasādam āyāti na śuddhavādaiḥ || 59.94 ||

94a pitus tāvad iyam] AE (Ed.); pituṣ tāvad iya B; pituṣ tāvad iyam DZ. 94c kupito] Σ (DE JONG); *kupite Ex conj. Ed.
94d prasādam] AE (Ed.); presādam B; prapādam DZ.

l re zhig pha yi [G285a1] bzhed 'di 'gong mi bya l
l de khros 'jigs las mi bdag 'di yang bsrung l
l rgyal po rdzun gyis gnod pas khros mod kyang l
l dag pa brjod pas rab tu dang mi 'gyur l 59.94 l

94b bsrung] Σ; bsrungs DZ. 94c gyis] Σ; gyi DZ.

「父の望みである以上、これを無視してはならない。そして彼の怒りへの恐怖からこの王を守らねばならない。〔父王は〕偽りの過失のせいで怒りを抱いているにせよ、清廉潔白なる主張をした所で王の心は鎮まりはすまい。

netre parityajya pituḥ karomi
kopāgnitāpapaśamaṃ sukhāya l
asyāpi tacchāsanabhaṅgajanmā
mahīpater mā vyaśanodayo 'stu || 59.95 ||

95c asyāpi] Σ; asyāḥ B. 95d 'stu] Σ; 'bhūt B (Ed.).

l mig ni yongs btang bde slad yab kyi ni l
l khro ba'i me gdung rab zhi bdag gis bya l
l sa bdag 'di yang de yi bka' bcag las l
l skyes pa'i gdung ba rgyas par mi 'gyur ro l 59.95 l

95b bya] Σ; byas G.

父に楽をもたらすべく、目を捨て〔父の〕怒りの熱を鎮めよう。この王にも彼の命令を反古にすることから生じる不幸が起こってはならない。

vinaśvare kleśa[A233b1]maye [E29b1] śarīre
cakṣur jalastokavikārarūpam l
kā nāma tasmin kṣaṇikaprakāśe
ṛṇapradīpapratime guṇāsthā || 59.96 ||

96a kleśa-] DZ; kleśa- Σ, Tib. *mi gtsang*. Cf. footnote. 96d -pratime] Σ; -pratibimba DZ, Tib. translates *gzugs brnyan* (*-pratibimbe).

l mi brtan mi gtsang rang bzhin lus dag la l
l mig ni chu yi thigs pa'i mam 'gyur gzugs l
l rtswa sgron gzugs brnyan skad cig rab gsal ba l
l de la nges par yon tan ci zhig gnas l 59.96 l

96b thigs] Σ; thags P. || mam] Σ; mams D.

移ろい易い、煩惱の汚れから成る身体にある目は⁵⁸、水滴が形を変えたものを本質としている。小草の燈明のような、一瞬にして消えてしまうその輝きに美質があるなどと、どうして考えたりしようか。

loke yad ālokanalābhalobhāt
saṃrakṣyate cakṣur atiprayatnāt |
rūpaṃ tad etat taralendrajāla-
svapnāvalīmi[Z381a1]tram abhitticitram || 59.97 ||

97b atiprayatnāt | DZ; iti prayatnāt Σ, Tib. translates *shin tu rab 'bad. 97d -mitram* | Σ; -maitram E.

| gang zhig blta [P229a1] thob la chags 'jig rten na |
| shin tu rab 'bad mig ni yang dag bsrungs |
| de dag gzugs de rab g.yo mig 'phrul dang |
| rmi lam 'phreng [Z381a2] grogs rten med ri mo'o | 59.97 |

97b bsrungs | Σ; bsrangs D. 97d grogs | DZ; thog Σ.

視覚対象を無暗に得ようとすることから、世間では〔人は〕目を守ることに殊の他尽力する⁵⁹。まさにその〔目は〕一連の儂い術現や夢にも似た姿であり、壁面を失った壁絵である。」

8.6 眼を扶らせるクナーラ太子

ciraṃ [D61a1] vicāryeti narendrasūnus
tasminn anicchāvimukhe 'pi rājñi |
nivāryamāṇo 'pi janaiḥ sabāṣpair
akārayat tatra viḥātam akṣṇoḥ || 59.98 ||

| yun ring [D61a2] 'di spyad mi dbang sras po yis |
| rgyal po de ni bzhed min phyir phyogs shing |
| skye bo mchi mar bcas pas bzlog gyur kyang |
| der ni mig dag nyams par byed du bcug 59.98 |

98b min | Σ; mig G.

太子はかく長い間熟考し、かの王は不承不承で顔を背け、人々は涙を流して制止しているにもかかわらず、そこで目を潰させた。

[B26a1] hemapradāḥ krūratareṇa puṃsā
sa vittalubdhena samuddhṛtākṣaḥ |

⁵⁸ネパール系写本は全て *kledamaye* の読みを伝え、校訂本はこの読みを採用が意味が通じない。梵文音写は *kleśamaye* の読みを伝えており、Tib. はこれを支持するので、梵文音写の読みを採用。。

⁵⁹b 句末をネパール系写本は *iti prayatnāt* とし、校訂本はこの読みを採用。しかしこの読みで ab 句を解釈すると「視覚対象を無暗に得ようとすることから、世間では『目だ』と考えて、尽力して守られること、[まさにそのことが]」という cd 句と結び付かない意味不明の文になる。寧ろ Tib. が支持する梵文音写の読み *atiprayatnāt* を本来の読みと見て採用すべきであろう。

durvāramātāṅgahṛtābjapuñja-
padmākarākāratulām avāpa || 59.99 ||

99c -hṛtābja-] Σ; -kṛtābja- DZ, but Tib. translates *bcom pa'i pad ma* (*hṛtābja-). 99d -padmākarākāra-] Σ; -padmo karākāra B.

l gdug pa'i skyes bu nor la brkam pa yis l
l gser sbyin mig ni rab tu phyung ba des l
l mi zlog glang pos chu skyes tshogs bcom pa'i l
l pa dma'i 'byung gnas rnam par mtshungs pa thob l 59.99 l

99b sbyin] Z; byin Σ.

彼が黄金を差し出すと、財を貪る非常に残忍な男が〔彼の〕目を抉り出した。〔彼は〕抑止できなくなった象によって一群の蓮華を破壊し尽くされた蓮池の姿のようになった。

8.7 悲嘆するカーンチャナマーリカー妃

jayodyame tatra sahopayātā
premocitā kāñcanamālikāsya l
taṃ deśam abhyetya vinaṣṭanetraṃ
dṛṣṭvaiva taṃ mohahatā papāta || 59.100 ||

l de yi mdza' bos gser gyi 'phreng ldan ma l
l rgyal bar sbyor tshe lhan cig der 'ongs pas l
l gnas der mngon phyogs mig ni rnam nyams de l
l mthong ba nyid na rmongs pas bcom nas 'gyel l 59.100 l

100a yi] Σ; yis DZ.

〔戦〕勝に力を尽くしている時、常々〔太子の〕寵愛を受けていた彼の〔妻〕カーンチャナマーリカーはその場所に一緒に来ていたのであるが、その場所に到着して〔彼が〕目を潰されたのを見るや否や、気絶に襲われて倒れた。

8.8 預流果を得、無常を説くクナーラ太子

avāptasamjñāṃ vipulapralāpāṃ
tāṃ netralāvaṇyavilāsasubdhām l
anityatācintanadrṣṭasatyāḥ
srotahphalāptyā sa jagāda dhīraḥ || 59.101 ||

101a avāptasamjñāṃ] AE; avāptasamjñā B; avāptasamjñi DZ; *avāptasajñāṃ Ex conj. Ed.

l 'du shes thob cing rgya cher rab gdung ba l
l mig mdzes rtse dga' la chags de la ni l
l mi rtag [N202a1] nyid bsams bden pa mthong gyur cing l
l rgyun zhugs 'bras thob brtan pa des [G285b1] smras pa l 59.101 l

101a cher] DZ; che Σ.

意識を取り戻し、酷く悲嘆に暮れては、目の美しさとあでやかな動きを無暗に求める彼女に、預流果を得ているが為に志操堅固な彼は無常を思念し、真実を見て語り掛けた。

mugdhe dhṛtiṃ saṃśraya viklavatvān
mā mohadainyodayakātarā bhūḥ |
ava[D61b1]śya[Z381b1]bhogyāni bhavanti bhīru-
svakarmanāṃ eva phalāni jantoḥ || 59.102 ||

102a saṃśraya viklavatvān] Σ; saṃśraya viklavatvā B. 102b -kātarā] AE (Ed.); kātaro B; katarā- DZ.

| mdzes ma 'khrugs pa nyid las brtan pa brten |
| rmongs dang dman rgyas skrag par ma byed cig
| srog chags [D61b2] rnam [Z381b2] kyis rang las 'bras bu ni |
| 'jigs pa nges par spyad par bya ba yin | 59.102 |

102a brten] P; bsten] Σ. 102d 'jigs pa] DZ; 'jigs ma Σ.

「ねえ可愛い君よ、沈着冷静さを頼りとしなさい。恐れ故に心の迷いや惨めな状態が起こることで怯んではいけない。生ける者は実に恐ろしい自らの行為が生み出す果を必ず享受せねばならないのだよ。

andho 'dhunāhaṃ vijanaṃ vrajāmi
kleśāsahā tvam śraya bandhugeham |
kāryo na śokaḥ subhagopabhoga-
viyogasāro hi bhavasvabhāvaḥ || 59.103 ||

103b kleśāsahā] Σ; kleśāsaha B.

| da ni dben par long ba nga nyid 'gro |
| khyod kyis nyon mongs mi bzod gnyen *khang bsten |
| skal bzang longs spyod 'bral ba'i snying po ni |
| 'khor ba'i rang bzhin mya ngan yongs mi bya | 59.103 |

103b kyis] Σ; kyi DZ. || bzod] DZ; bzad Σ. || *khang] Ex conj.; khab Σ. 103c 'bral] Σ; 'bras G. 103d yongs] DZ; yong Σ.

今や私は盲目となったのだから、人気のない所へ行こう。苦しみに耐えられねば、爾は親族の家に身を寄せなさい。悲しんではならないよ。何故なら、輪廻生存の自性は、幸福の享受と〔幸福からの〕離別を本質としているのだから。」

8.9 貞女の誓いを述べるカーンチャナマーリカー妃

iti bruvāṇaṃ tam uvāca jāyā
viyogabhītā parikampi[A234a1]tāngī |
nīlāñjanāsrāiḥ kucayor likhantī
duḥkhasya vikṛitam iva svacittam || 59.104 ||

104c *nīlāñjana-*] DZ (DE JONG); *līlāñjana-* Σ, Tib. translates *mig sman gyis sngo* (**nīlāñjana-*).

l zhes smra de la 'bral ba'i 'jigs pa yis l
l yongs 'dar lus can btsun mos rab smras pa l
l rang sems sdug bsngal la btsongs nu ma la l
l mig sman gyis sngo mchi mas 'bri ba bzhin l 59.104 l

104b lus] Σ; yus DZ. 104c btsongs] DZ; bcongs Σ. 104d mchi] Σ; phyi G.

かく語る彼に妻は言った。別離を恐れ、四肢を震わせながら。〔その彼女は〕恰も苦しみに売り渡された自分の胸中を黒い眼膏の混じった涙で乳房に書いているかのように見えた⁶⁰。

tyajāmi na tvām aham āryaputra
naitat kulārhaṃ vratam aṅganānām l
yad āpadi svam patim anyarūpaṃ
vibhūṣaṇaṃ [E30a1] śīlam iva tyajanti ll 59.105 ll

l bdag ni rje yi sras khyod yongs mi gtong l
l gang zhig rgud tshe rang bdag gzugs gzhan gyur l
l rgyan dang tshul khriims bzhin du gtong ba 'di l
l bud med rnams kyi rigs 'os brtul zhugs min l 59.105 l

105c gtong Σ; gdung P. 105d min Σ; om. G.

「貴方、私は爾を捨てたりなどしません。それは良き一族に相応しい、女達の生き方ではありません。不幸に陥っている時、恰も品行という飾り〔を捨てるか〕のように、姿を変えた自分の夫を捨てるなどということは。

satīvratam vittavatām priyāya
yatnena veśyā api darśayanti l
patiḥ satīnām adhikaṃ priyas tu
vipadgato 'rthīva mahājanānām ll 59.106 ll

l [P229b1] dag pa'i brtul zhugs mdza' slad nor ldan la l
l smad 'tshong rnams kyang 'bad nas *ston par byed l
l bdag po rgud gyur dag rnams lhag par mdza' l
l skye bo che rnams slong ba dag la bzhin l 59.106 l

106a dag pa'i brtul zhugs] Σ; om G. ll mdza'] Σ; mdzad G. 106b *ston] Ex conj.; sten Σ.

遊女でさえ、財ある男達のうちで愛する男に、努めて貞女としての生き方を見せませす。貞女というものは、夫を殊の外愛するのです。実に偉大な者達が、不幸にある物乞いを〔愛する〕ように。

⁶⁰c 句冒頭をネパール系写本は全て *līlāñjana-* 「戯れの眼膏」とする。DE JONG はこれを相当する Tib. *mig sman gyis sngo* に基づいて **nīlāñjana-* と読むよう提案する。“n” と “l” の字形の類似に基づく異読と考えられるし、梵文音写も DE JONG の復元案を支持するので、この読みを採用。

yaṣṭiḥ prakṛṣṭā nayanāndhakāre
chāyā vipattāpapari[D62a1]śrameṣu |
[Z382a1] padacyutānām viṣameṣu
pumṣām nāsty eva jāyāsadrśaḥ sahāyaḥ || 59.107 ||

| mig ni long ba'i rab mchog 'khar ba ste |
| rgud pa'i gdung bas ngal la grib bsil [D62a2] yin [Z382a2] |
| gnas nyams skyes bu rnams kyi mi bzad la |
| grogs mo chung ma dang mtshungs yod ma yin | 59.107 |

107b bsil] Σ; gsil GN. 107c nyams] DZ; skabs Σ.

男達にとって〔彼の〕目が見えない時には、妻に勝る優れた杖はなく、災いをもたらす熱の苦しみに憔悴している時には、妻に勝る日陰はなく、苦難にある時、地位から転落した〔男達〕には、妻に勝る伴侶は存在しないのです。」

ity arhitah pādayuge nipatya
patnyā prayatnād atha rājaputraḥ |
sahaiva jīrṇāṃśukamātraśeṣas
tayā ca dhrtyā ca śanair jagāma || 59.108 ||

| de ltar 'bad pas don gnyer rgyal po'i bu |
| stod g.yogs hrul po tsam lhag brtan pa dang |
| zhabs zung la gtugs chung ma de yang dang yang |
| lhan cig nyid du dal gyis song bar gyur | 59.108 |

108c gtugs] DZ; btugs Σ.

かく妻は〔太子の〕両足にひぎまいて、ひたすら請うた。そこで太子は、破れた衣だけを持つことを許されて、彼女と自制の心だけとを伴って、徐に去って行った。

9 クナーラの帰還

9.1 乞食先で歌を奏でるクナーラ

vīṇāpravīṇaḥ sa sugītagītaḥ
pūrvaṃ tadā vartmasu vṛttim āpa |
vi[B26b1]patsu paṇyaṃ vibhave vilāsaḥ
kalāsamaṃ nāsti dhanam narāṇām || 59.109 ||

109c paṇyaṃ] AB (Ed.); punyam Σ, Tib. translates *bsod nams* (*punyam).

| rgyud mangs sbreng mkhas glu snyan len mkhas des |
| [G286a1] dang por de tshe lam du 'tsho ba thob |
| rgud na bsod nams 'byor na rtse 'jo yis |
| sgyu rtsal mtshungs pa'i nor ni mi la med | 59.109 |

109a mangs] Σ; mang DZ.

彼は琵琶〔の演奏に〕長けていたので、まず先に美しい歌を奏で、その際に道々で生きる糧を得た。不幸に有る時の商いの種として、権力の座にある時の余興として、人にとって技芸に勝る財はないのである。

mattālimālākvaṇitopamena
vīṇāsvanena śravaṇāmṛtena |
siktaḥ sa bhikṣāpraṇayī praviśya
geheṣv agāyad dayitāsahāyaḥ || 59.110 ||

| bung ba'i 'phreng ba myos pa'i sgra lta bu |
| rgyud mangs sgra snyan rna ba'i bdud rtsi yis |
| bran bzhin bsod snyoms slong de chung ma dang |
| lhan cig khyim rnams su zhugs glu blangs pa | 59.110 |

110b mangs] Σ; mang DZ.

彼（クナーラ太子）は、酔った蜂の群れが奏でる音にも似た琵琶の音という、耳に〔快樂を与える〕甘露を浴びて、施し物を求め、妻を従えて家々に入っては歌を歌った。

9.2 クナーラの歌

gurujanakopasamudgama-
rāhunigīrṇaprabhāvasūryāṇām |
[A234b1] vitathaparivādaviplava-
kṛṣṇadinakṣapitacaritacandrāṇām || 59.111 ||

111c -viplava-] AE (DE JONG); -viklava- B (Ed.); -vislava- DZ.

| skye bo bla ma [N202b1] khros pas rab bskrun sgra gcan gyi ni mthu yis nyi ma rnam par
nyams byas shing |
| bden med yongs su smra ba'i rnam par bslad pa nag phyogs nyin gyis spyod pas zla ba zad
par byas | 59.111 |

111cd spyod pas] DZ: spyod pa'i Σ.

guṇigaṇadūṣaṇani[Z382b1]patita-
[D62b1]guṇavararatnaprabhādaridrāṇām |
bahutaraduṣkṛtapariṇati-
pavanāhativigatanetradīpānām || 59.112 ||

112d -vigata-] Σ (DE JONG); *-vigalita- Ex conj. Ed. (unmetrical). || -netra-] ABE^{Pc}DZ (Ed.); -neca- E^{ac}, A is difficult to decipher, but it seems to be written -netra-. || -dīpānām] AE (Ed.); -paṃthānām B; -dīpānām DZ.

| yon tan ldan pa'i tshogs la sun [Z382b2] 'byin lhung [D62b2] bas yon tan mchog gi rin
chen 'od kyis dbul bar 'gyur |
| rab mang nyes byas yongs su smin pa'i rlung gis bsnun pas mig gi sgron ma dag dang bral gyur pa | 59.112 |

112ab rin chen] Σ; rin cen DZ.

bhavavipulajalavidyut-
taralataśrīprakāśarahitānām |
puṇyaiḥ prasaratī punar api
dharmasmaraṇam navālokaḥ || 59.113 ||

113b -śrīprakāśa-] Σ; -śrīprakāra- DZ, Tib. translates *dpal gyi nram pa dag* (*-śrīprakāra-). 113d -smaraṇam] Σ (DE JONG):

*-smaraṇa- Ex conj. Ed. (unmetrical).

| srid pa'i chu 'dzin che la glog bzhin shin tu g.yo ba'i dpal gyi nram pa dag dang bral nams la |
| bsod nams dag gis slar yang dam chos dran par gyur pa'i snang ba gsar pa rab tu spro bar byed | 59.113 |

「父の怒りから現れ出た者であるラーフにその力を飲み込まれてしまった太陽、嘘の醜聞に起因する不幸という暗い夜の日にその動きを止められてしまった月、有徳者を難ずることに陥り、優れた美德という宝珠の輝きを欠いている者達、数多の過失の異熟という風に打たれて目という燈明を消失した者達、輪廻生存という大きな雨雲から起こる稲妻のように儂い世俗の富に執着するがゆえに輝きを失った者達に、法の想起という新しい光明が、福德を通じて、再び訪れてくれるだろう。」

9.3 パータリプトラに向かうクナーラの描写

kālam kalāvān ativāhya gāyan
paiṇḍinyavṛtīḥ sa vivekacakṣuḥ |
yayau priyāṃ yaṣṭim ivāvalambya
pituḥ puram pāṭaliputram eva || 59.114 ||

114b paiṇḍinya-] DZ (Ed.); paiṇḍilya- AE (DE JONG); paiṇḍila- B; Tib. translates *slong zhing*. Cf. footnote.

| sgyu rtsal dang ldan mig gi bden pa de |
| glu len slong zhing 'tsho bas dus 'das nas |
| yab kyi grong khyer *pā ṭa li pu trar |
| 'khar ba la [P230a1] bzhin chung mar brten te song | 59.114 |

114a gi] Σ; gis DZ. || bden] Σ; dben DZ. 114c *pā ṭa li pu trar] Ex conj.; pā ṭa li pu tar DZ; pā tra li pu trar PG; pra tra li pu trar N.

彼は〔目こそ見えなかったが〕辯別能力を目としており、技芸を身に着けていたので、歌を歌って時を過ごし、物乞いをしながら⁶¹、恰も杖〔に頼るか〕の如く〔細い体をした〕妻を頼りに、実に父親の領有するパータリプトラの都城に戻った。

⁶¹ 当該箇所を梵文写本 AE は *paiṇḍilyavṛtīḥ* としており、DE JONG [1965: 235] はこの読みが EDGERTON が BHSD に *Sikṣāsamuccaya* 150.18 の用例を典拠として挙げる *paiṇḍilika* “mendicant, monk” という語と意味的に結び付けられ得、Tib. *slong zhing 'tsho bas* 「乞食を生業とすることで」からも支持されるとする。しかし、*slong zhing 'tsho bas* 「乞食し生計を立て」というかなり意識した Tib. からは必ずしも *paiṇḍilyavṛtīḥ* という読みは支持されない。また語形、用例的にも *paiṇḍilya* という特殊な形は奇妙である。寧ろ *pinda* の抽象名詞形である *paiṇḍinya*- “das Leben von Almosen” (*Trikāndaśeṣa* 2.7.28) PW の読みを呈示する梵文音写の読みに従って読む方が自然なように思われる。従って、校訂本通り *paiṇḍinyavṛtīḥ* と読む。

taṃ dīrghaduḥkhādhvadaridradehaṃ
śītātapāpītamukhābjavarṇam |
kāntāsakhaṃ vīkṣya janaḥ kumāraṃ
śāpakṣataṃ manmatham eva mene || 59.115 ||

| ring po'i sdug bsngal lam gyis lus dman zhing |
| bzhin pad mdog gis grang dang *tsha bas 'thungs |
| gzhon nu mdzes ma dang 'grogs de mthong nas |
| skye bos yid srubs dmod pas nyams par shes | 59.115 |

115b mdog] Σ; dag DZ. || *tsha bas] Ex conj.; tsha ba Σ. 115d srubs] Σ; bsrubs Z. || dmod pas] Σ; dmod pa G.

彼は長い苦難の旅を経て来た為に体がみすぼらしくなり、〔その〕蓮華のような顔の色は寒さや〔照りつける太陽の〕熱で褪せていた。妻を伴侶とした〔そのような〕太子を人々は見て、〔彼は〕呪いのせいで傷つけられたカーマ神に他ならないと考えた。

śanaiḥ sa rājopavanāvalīnāṃ
samīpam āptaḥ kṣaṇaviśramārthī |
udyānapālaiḥ paruṣapralā[Z383a1]pair
amaṅgala[D63a1]tvāt pratiṣidhyamānaḥ || 59.116 ||

116d amaṅgalatvāt] Σ; amaṅgalatvā B.

| dal gyis rgyal po'i nags 'tshal 'phreng nye bar |
| phyin cing skad cig ngal gso don [G286b1] gnyer de |
| rtsub mor smra byed skyed tshal skyong mams kyis |
| bkra [Z383a2] mi shis [D63a2] phyir rab tu bkag gyur pa | 59.116 |

116b ngal gso] DZ; gnal so Σ.

漸くにして、彼は王の領有する一連の園林の近くに辿り着いた。〔彼は〕ほんの僅かの間の安らぎを求めたが、園林の守衛達は〔彼が〕めでたくない者であるので、罵詈雑言を発して〔彼を〕追い払ったので、

9.4 王宮の象舎に入るクナーラ

[E30b1] niḥsaṃśrayaḥ saṃśrayam īhamānaḥ
sa hastiśālāṃ nṛpater viveśa |
vīṇāvinodādarakautukena
dattāvakāśaḥ karipālakena || 59.117 ||

117d karipālakena] DZ; paripālakena Σ, Tib. translates *glang po skyong ba dag gis* (*karipālakena). Cf. footnote.

| gnas med gnas ni 'tshol bar byed pa des |
| mi yi bdag gi glang po'i gnas su zhugs |
| rgyud mangs rtsed mo la gus dge mtshan gyis |
| glang po skyong ba dag gis go skabs byin | 59.117 |

117a 'tshol] DZ; tshol Σ. 117c mangs] Σ; mang DZ. 117d gis] Σ; gi DZ.

彼（クナーラ）は寄る辺なく、身を寄せる場所を求めて王の象の飼育場に入った。象の飼育人は⁶²、〔クナーラが〕琵琶を奏でることに興味関心を抱いて、〔クナーラに〕居場所を与えた。

9.5 クナーラに気付く象

tatrāndham ālokya nibaddha[A235a1]saṃjñas
taṃ kuñjarendraḥ parivṛttavakraḥ |
tatsvāgatāyeva ghaṇaṃ jagarja
krīdāsīkhaṇḍivrajadattanṛttaḥ || 59.118 ||

118d -nṛttaḥ] Σ; *-nṛtyaḥ Ex conj. Ed.

l der ni long ba de mthong shes gyur pa'i |
l glang po'i dbang pos gdong ni yongs bskor cing |
l de la legs 'ongs 'dri bzhin sgra chen bsgrags |
l gtsug ldan rtse ba'i tshogs kyis gar dag phul | 59.118 |

118d kyis] Σ; gyi DZ.

最高の象はそこに盲目となった彼（クナーラ）がいるのを見て、〔彼がクナーラだと〕認知して顔を向けた。〔そして象は〕彼を歓待するため〔に鳴き声を発するか〕の如く深く鳴き声を発した。〔王宮に〕飼われている孔雀の群れに踊りを添えられて。

taṃ niścalaṃ kuñjaragarjitena
niḥsambhramaṃ hastipakā vilokya |
aho nu sattvodadhir aprakampyaḥ
suksatriyaḥ ko 'py ayam ity avocan || 59.119 ||

l de ni glang po'i sgra yis mi g.yo zhing |
l 'khrul pa med mthong lag ldan bdag po yis |
l kye ma snying stobs rgya mtsho rab mi 'dar |
l rgyal rigs bzang po 'di ni su zhes smras | 59.119 |

119a yis] Σ; yi Z. 119d su] Σ; sus DZ.

彼が象の嘶きにも動じず、狼狽することも無いのを象使い達は目にして、「おお、実はこちらにいる優れた武士族は誰とも知れないが、善き性質を湛える海であり、〔彼は〕動揺することを知らない者だ。」と述べた。

[B27a1] gajonmukhī kāñcanamālikāpi
niśvasya dīrghaṃ sahasoditāsṛā |
ūce smṛtaśrīvibhavābhimānā
saṃvāhayantī caraṇau priyasya || 59.120 ||

⁶²ネパール系三写本の読みは *paripālakena* であり、校訂本はこの読みを採用が意味が通じない。梵文音写は *karipālakena* という読みを伝えており、Tib. はこれを支持する。従って *karipālakena* の読みを採用する。

l glang por mngon phyogs gser gyi phreng ldan ma l
l dpal 'byor mngon par khengs pa dran gyur te l
l 'phral la mchi ma 'dzag cing shugs rings 'byin l
l [N203a1] khyo yi zhabs dag nyed cing rab smras pa l 59.120 l

120b dpal] DZ; rnal Σ. 120c 'byin] DZ; bas Σ.

カーンチャナマーリカーも象に顔を向け、長く溜息をつき⁶³、不意に涙を流し、王権や富から生じた〔自らの〕驕りのことを思い出して述べた⁶⁴。愛しい夫の両足を撫でながら。

*nr̥tyanti te tava puraḥ śikhino ghanāśā-
lolāḥ param karipativrajaḥgarji[D63b1; Z383b1]tena l
kaumārabarhikulāsambhava eṣa barhī
garjatkaṣaṇe gaṇapater api nirvikāraḥ || 59.121 ||

121a *nr̥tyanti te] Ex conj. DE JONG; nr̥tyanti ye Σ.

l glang po'i sgra yis lag ldan bdag po khyod kyi mdun na gang l
l sprin gyi bsam pas g.yo ldan gtsug phud can [D63b2; Z383b2] ni gar rab byed l
l rma bya 'di dag gzhon nu'i rma bya'i rigs las 'khrungs pa ste l
l tshogs kyi bdag pos sgra bsgrags tshe yang mam par 'gyur ba med l 59.121 l

「最高の象の群れの上げる嘶きの故に、その孔雀達は爾の前で雨雲を待ちわびてひどく動き回り、舞を舞っています⁶⁵。この孔雀は軍神の子孫である孔雀の家系に生まれたので、軍団の首(象)が嘶く瞬間にも動じることがないのです。」

tataḥ sarāgā capalābhipatya
doṣonmukhī dveṣavatīva saṃdhyā l
hṛtvā raviṃ locanajīvabhūtaṃ
*vivṛddham āndhyaṃ vidadhe janasya || 59.122 ||

122d *vivṛddham] Ex conj. Tib. rnam par rgyas par (DE JONG); vibaddham Σ; vibaddhas DZ.

l de nas chags ldan g.yo ba'i thun mtshams ni l
l skyon la mngon phyogs zhe sdang ldan bzhin 'ongs l
l mig ldan 'tsho bar gyur pa'i nyi ma bcom l
l skye bo mun pa [P230b1] rnam par rgyas par bsgrubs l 59.122 l

122b bzhin] DZ; zhing Σ. 122c mig ldan] Σ; mi ldan G.

それから束の間の赤色の夕暮れは、色欲を抱いた、移り気で憎しみ深い女が過ちを犯そうとして近づいて来るかのように、夜を求めて近づいて来て、目にとっての命である太陽を奪って、人に深い暗闇をもたらした。

⁶³Tib. は *dirgham* 「長い間」に相当する訳語を欠く。

⁶⁴Tib. は *vibhava*- 「富」に相当する訳語を欠く。

⁶⁵ネパール系写本、梵文音写、チベット訳は a 句冒頭部を全て *nr̥tyanti ye* (Tib. *gang ... gar rab byed*) としている。しかしこれに従って読むと、関係代名詞 *ye* に率いられる副文を受ける主文を詩節中に見出すことができなくなり、解釈が難しくなる。このため DE JONG は *ye* を *te* に変えて読むべきであるとする。写本、Tib. いずれからも裏付けられないが、DE JONG の修正案を否定する根拠はないので、*nr̥tyanti te* と読む。

9.6 王妃の嘆き

lakṣmīviyogaglapitaṃ vilokya
padmākaraṃ saṃkucitānanābjam |
śokābhibhūtā bhavitavyatāyā
jagau svabhāvaṃ bhramarāvalīva || 59.123 ||

l pa dmo 'byung gnas chu skyes bzhin zum pa |
l phun tshogs bral zhing dman pa mthong gyur nas |
l bung ba'i 'phreng ba mya [G287a1] ngan gyis zil mnan |
l nges par myong bya'i rang bzhin glu len bzhin | 59.123 |

123a pa dmo 'byung] Σ; pa dmo'i 'byung DZ. 123c gyis zil mnan] DZ; zil gyis gnon Σ. 123d glu len] DZ; glur len Σ.

〔カーンチャナマーリカーは〕一団の蜂のようであった。というのも彼女は、幸運を喪失して憔悴し、顔という蓮華の萎びてしまった蓮池を目にしたからである。〔そして彼女は〕避けられぬ定め故に起こった自らの現状を述べたのであった。

viśvaprakāśaikamaṇipradīpe
yāte ravau dīpasahasralakṣaiḥ |
nābhūd dinālokalavānukāraḥ
sarvātiriktaṃ mahatāṃ hi tejaḥ || 59.124 ||

l kun gsal nor bu'i sgron ma gcig bu nyid |
l nyi ma 'das tshe mar me stong 'bum gyis |
l nyin mo'i snang ba cha la mtshungs ma gyur |
l gang phyir chen po'i gzi byin kun las lhag 59.124 |

太陽は全てを照らし出す者であり、全てのものにとっての唯一の宝珠であり、燈明であるが、〔それが〕去ってしまえば、何億もの燈明を以てしても、ほんの僅かな日中の光に匹敵したためしがない。実に偉大な者の放つ鋭い光というものは全てに勝っているのである。

9.7 闇の中で輝く王宮の描写

sā rājadhānī maṇihemaharmyā
prakāśamānā timire rarāja |
bhaktyaiva bhartur vihitopakārā
kr̥cchre [A235b1] ca śīlābharaṇā satīva || 59.125 ||

125c bhaktyaiva] Σ; bhaktyeva AB (Ed.), Tib. translates *gus pas phan pa nyid* (*bhaktyaiva). Cf. footnote.

l rgyal khang nor bu gser gyi ba gam can |
l rab gsal de ni mun la rab mdzes te |
l bdag po rgud tshe gus pas phan pa nyid |
l sgrub byed tshul khriṃs rgyan ldan dag pa bzhin | 59.125 |

宝珠や黄金からなる御殿を備えたその王宮は、闇の中で光を発して輝いていた。丁度貞節な妻が善き品行を飾りとして、実に夫への信愛の故に〔彼の〕扶助を成し遂げて苦難の中で〔輝く〕ように⁶⁶。

9.8 月の昇天

labdhādhikā[E31a1]rā timirodgaṭiḥ sā
kṛtvā [Z384a1; D64a1] nirālokam aśeṣalokam |
indūdayārambhābhayābhibhūtā
nilīyamāneva śanair babhūva || 59.126 ||

126d babhūva] Σ; babhūvaḥ E.

| rab rib rab rgyas gtso bo nyid thob des |
| ma [D64a2; Z384a2] lus 'jig rten snang ba med byas nas |
| zla ba 'char rtsom 'jigs pas zil mnan te |
| dal bu yis ni yib pa bzhin du gyur | 59.126 |

その暗闇の現れは主権を得ると、全ての世界を真っ暗にし、〔それから〕月が昇り始めるのではないかという恐れに屈せられて、恰も徐にその姿を隠そうとしているかのように見えた。

athāyayau śyāmalalakṣmalekhā-
saṃdeśalīlālipisaṃniveśaḥ |
kumudvatīharṣasuhṛt sitāṃśuḥ
padmākaraśrīparihāralekhaḥ || 59.127 ||

127b -saṃniveśaḥ] Σ; -siṃniveśaḥ E.

| de nas nag po'i mtshan ma'i ri mo ni |
| 'phrin gyi ngang tshul yig 'phreng rab bkod pa |
| ku mud can dag'i legs byas bsil zer can |
| pa dmo'i 'byung gnas dpal 'phrog spring yig byung | 59.127 |

そして月が訪れた。〔月というのはその表面に〕言伝や戯れの為の文字のような一連の黒い斑点が配列されており⁶⁷、〔その光線は〕蓮池の美を奪うけれども、月待睡蓮にとっては喜びをもたらす友人なのである。

⁶⁶写本 AB は b 句冒頭部を bhaktyeva と読んでおり、校訂本はこの読みを採用。しかし、これでは c 句と d 句末に二度 iva が使われることになり、以下の比喩の構造が成り立たなくなる。

王宮 (rājadhānī)	宝珠や黄金からなる御殿を備えている (maṇihemaharmyā)
貞節な妻 (satī)	〔夫の〕扶助を成し遂げる (vihitopakārā)

共通性：光輝を発する (prakāśamānā)

“ai” と “e” の混同は写本 A では頻繁に見られる上、梵文音写、Tib. いずれも bhaktyaiva の読みを支持するので、本文を bhaktyaiva に修正する。

⁶⁷-līlā-「戯れ」に相当する語を Tib. は ngang tshul (*śīla) とする。

apūrayat kāntisitāṃśukena
śuciḥ sudhāṃśuryaśaseva viśvam |
dugdhatviṣā mugdhamṛṇālavallī-
navāṅkurākāramayūkhalekhaḥ || 59.128 ||

128d -navāṅkura-] Σ; -navākura- DZ; *-navāṅkara- Ex conj. Ed. || -mayūkha-] Σ; -mayūra- E.

| bdud rtsi'i zer dkar yid 'ong pad rtsa yi |
| 'khri shing myu gu gsar dbyibs 'od ris kyis |
| 'o ma'i 'od ldan mdzes pa'i gos dkar gyis |
| grags pas bzhin du thams cad khyab par byed | 59.128 |

128b kyis] Σ; kyi DZ. 128d khyab] Σ; khyad P.

白く輝く月は、若い蓮の茎、或いは新芽の形をした光線を発し、名声〔で全てを覆い尽くすか〕のように、乳のような色をした美という白い衣で全てを覆い尽くした。

9.9 琵琶を奏で、歌を歌うよう命じる象の飼育人

tataḥ kṣapāyāṃ ślathayauvanāyāṃ
śanaiḥ śaśāṅke divi lambamāne |
kṣaibyākṣayān nāgabhrto vinidrā
nidrāyamānaṃ jagaduḥ kumāram || 59.129 ||

129c kṣaibyākṣayān nāgabhrto] A (DE JONG); klaibyākṣayān nāgabhrto Σ. Cf. footnote.

| de nas mtshan mo'i lang tsho nyams gyur cing |
| zla ba mkha' la dal gyis babs pa'i tshe |
| skyo nges nyams pas mam par gnyid sad pa'i |
| gzhon nu la ni [N203b1] glang po 'dzin pas smras | 59.129 |

129b la] DZ; las Σ. || gyis] DZ; gyi Σ. 129c skyo nges] DZ; skyo ngas Σ. || gnyid sad pa'i] DZ; gnyid pa yi Σ.

それから月が空にかかっており、夜が若々しさを失って行っている時、象の飼育人達は酩酊が覚めて⁶⁸、目を覚まし、眠っている太子に言った⁶⁹。

uttiṣṭha gāndharvika kiṃ na vīṇāṃ
aṅkaṃ samāropya kalam kvaṇantīm |
kāntām ivaitāṃ nakha[B27b1]pātalolāṃ
gītiṃ navīnāṃ vitanoṣi kāṃcit || 59.130 ||

⁶⁸DE JONG が指摘するように、校訂本及び梵文写本 B、梵文音写は、該当箇所を *klaibyākṣayān* 「不能が尽きたので」という読みを提示するが、これでは意味が通じない。DE JONG はこれを梵文写本 A に従い *kṣaibyākṣayān* 「酩酊が醒めたので」と読む修正案を提示しており、これに従った。梵文音写の *klaibya-* に対応する Tib. は *skyo nges* であり、NEGI 及び LC suppl. は *klaibya-* の訳語と見るが、両者の挙げる典拠はこの箇所のみであり、語源的には稍問題があると思われる。尚、*kṣaibya* が “Rausch” の意味で用いられる用例については、SCHMIDT, Nachtr 及び、*Daśāvātāracarita* 7.34 を参照。

⁶⁹Tib. は当該箇所を *sad pa'i gzhon nu la ni glang po 'dzin pas smras* 「目を覚ましている太子に、象の飼育人は言った」という訳を充てている。Tib. は *vinidrā nidrāyamānaṃ* を *vinidrā anidrāyamānaṃ* と読んだ可能性がある。

130c nakhapāta-] AE; nakhaghāta- B (Ed.); nakhavato- DZ. 130d *gūṭim] Ex conj. Ed.; gūṭim Σ; griti DZ.

l dri za can longs mi 'am ci rnams kyis l
l mdzes ma bzhin 'di pang du rab bkod nas l
l sen mo btab bskyod yid 'ong snyan sgrogs shing l
l glu dang rgyud mangs 'ga' zhig mi len nam l 59.130 l

130a kyis] Σ; kyī DZ. 130b 'di] PN; ni Σ. 130d mangs] Σ; mang DZ. ll nam] Σ nams G.

「歌い手よ、起きよ。〔爾は〕如何して爪傷を求めるその妻〔を膝にのせる〕ように、爪で弾かれることを求め、心地良く音を立てる琵琶を膝にのせて奏で、新しい歌を何も歌おうとしないのか⁷⁰。」

9.10 象の飼育人の言葉に苛立つクナーラ

iti [D64b1] pra[Z384b1]lāpaiḥ śramanidrayārtah
sa tair *madoddhair anubādhyamānaḥ l
ādāya vīṇāṃ *vīmanā muhūrtam
acintayan nīcavacaḥ prataptaḥ ll 59.131 ll

131b *madoddhair anubādhyamānaḥ] Ex conj.; madoddhair anubaddhyamānaḥ A (Ed.); madoddhair anubaddhamānaḥ B; madāddhair anubaddhyamānaḥ E; mededair anubaddhāmānaḥ DZ, *madādhyair anubuddhyamānaḥ Ex conj. DE JONG, E is difficult to decipher, but it seems to be written madāddhair anubaddhyamānaḥ. Tib. translates *rgyags shing 'phyar ba de dag gis rjes bskul ngal zhing* (*tair madoddhatair anubādhyamānaḥ). Cf. footnote. 131c *vīmanā] Ex conj. Tib. *yid byung* (DE JONG); vimalāṃ BE (Ed.); vīmanāṃ A; camalā DZ. Cf. footnote.

l zhes [D64b2; Z384b2] smra rgyags shing 'phyar ba de [G287b1] dag gis l
l rjes bskul ngal zhing gnyid kyis gzir gyur pa l
l dman pa'i tshig gis rab [P231a1] gdung yid byung bas l
l rgyud mangs blangs nas yud tsam rab bsams pa l 59.131 l

131a 'phyar] DZ; 'char Σ. 131d mangs] Σ; mang DZ.

〔彼は〕疲労から生じる眠気に苛まれていたにもかかわらず、彼等が正しい判断の

⁷⁰王宮の象の飼育人が、クナーラに琵琶を奏でて歌を歌うよう命じる言葉は Kun では次の一文のみである。

[Kun D236a5–6; P293b7–8; G338b1; N266a1]
kye glu mkhan longs shig l re zhig pi wang sbrengs la glu longs shig l kho bos mnyan par bya'o l
「おい、歌い手よ、歌え。今すぐ琵琶を奏でて歌を歌え。我々はそれを聞こう。」

できない状態で発する言葉で悩ませたので⁷¹、平静の心を乱し⁷²、琵琶を手にとり、苦しめられて暫くの間卑しい言葉を頭に浮かべた。

jīvaty aho vyāghragaṇair niṣaktair
āghrātaraktair aghrṇair grhītaḥ |
kṣībair adhikṣepakaṭupralāpair
ābaddhapetair na tu rājaceṭaiḥ || 59.132 ||

132c kṣībair] AE (DE JONG); klībair Σ. || -kaṭu-] Σ; kaṭuḥ E. 132d -petair] E (Ed.); -petai A; -pete B; -leṭair DZ.

| kye ma stag gi tshogs ni brtse med dag
| khrag la snom zhing nye bar lhags pa dang |
| rgyal po'i 'bangs ni myos pa'i tshogs bcas te |
| smod rtsub brjod pas bzung ba 'tsho ma yin | 59.132 |

132b snom] Σ; snol G. 132d brjod] DZ; rjod Σ.

「ああ、〔この私を〕捕えているのは、命ある者に執着し、血の匂いを嗅ぐ、無慈悲な虎の群れであって、一団をなして、屈辱を与える痛烈な言葉を発する、〔この者がアショーカの息子であるという〕正しい判断のできなくなっている王の使用人達ではない。

nihanti mānaṃ vidadhāti lajjāṃ
china[A236a1]tti śarmāṇi tanoti tāpam |
asahyanirvedavipadvidhāyī
na nīcasevāsadr̥śo 'sti śokaḥ || 59.133 ||

| nga rgyal nyams byed ngo tsha sgrub par byed |
| bde ba 'joms byed gdung ba rgyas par byed |
| mi bzod sdug bsngal rgud pa skyed byed pa |
| dman pa'i bsten pa dang mtshungs mya ngan med | 59.133 |

133a nyams byed] Σ; nyams myong DZ. 133c rgud] Σ; rgyad D. 133d bsten] Σ; bstan DZ.

〔それは〕自負心を挫き、屈辱をもたらし、喜びを損ない、苦痛を与える。耐え難い絶望という不幸をもたらす〔その〕酷い扱いに勝る悲しみはない。〕

⁷¹校訂本及び写本 A は b 句末を madoddhair anubaddhyamānaḥ とするが、これでは意味が通じない。DE JONG は意味を最優先させ、AAM の対応詩節（第 210 詩節）の madādhyair anubuddhyamānaḥ 「横柄な〔喋り声〕のせいで、〔彼は眠りから〕起こされ」という読みを採用するよう提案する。しかしこの読みは、相当する Tib. *smra rgyags shing 'phyar ba de dag gis rjes bskul ngal zhing* 「酔って昂ったその言葉で〔彼は〕訓告され」から支持されない上に、梵文写本の読みからかなり遠ざかってしまうことになる。恐らく当該箇所は本来 madoddhair anubādhyamānaḥ であつたものを AAM の作者が madoddhair という見慣れない語形と、同意語 (-ārtah, prataptaḥ) の反復を避けて採用した二次的な読みであると考えられる。従って、当該箇所を *madoddhair anubādhyamānaḥ 「横柄な〔喋り声に〕悩まされ」にかえて読む。但し複合語末で用いられる -uddha については、PW 及び SCHMIDT, Nachtr. には用例を見ない。

⁷²ネパール系写本 BE は vimalām 「汚れなき〔琵琶を〕」という読みを提示し、校訂本はこれを採用。これに対し DE JONG は相当する Tib. *yid byung* に従い、これを *vimanā と修正するよう提案する。写本 A は vimanām という読みを提示しており、vimanā → vimanām → vimalām と筆写されていたことが推定される。従って DE JONG の復元する読み vimanā を採る。

muhur vicintyeti sa nīcavākyam
līlāvamānavyasanāgnitaptah |
niśvasya kālakṣapaṇābhikāṅkṣī
śanair agāyat kalayan vipaṅcīm || 59.134 ||

134b līlāvamāna-] Σ; līnāvamāna- DZ (Ed.). || -vyasanāgni-] Σ; -vyavasāgni- AB, Tib. translates *tsha ba'i mes*.

l dman pa'i tshig de yang yang des bsams nas |
l smad pa'i gdung ba tsha ba'i mes reg pas |
l shugs phyung dus ni 'phang bar mngon 'dod pas |
l dal gyis rgyud mang dag ni sbreng zhing blangs | 59.134 |

134c 'phang] Σ; 'phangs G. 134d gyis] Σ; gyi Z.

このように、彼は卑しい言葉を暫くの間考え、〔象の飼育人達が〕遊び半分で投げ掛ける蔑みという不幸の火の熱に苦しめられ⁷³、溜息をつき、時が過ぎ行くのを切に望みつつ、琵琶を弾いて徐に歌を歌った。

9.11 象舎で歌を歌うクナーラ太子

9.11.1 輪廻のもたらす苦しみ

mānonmāthaiḥ prathitavibhavabhraṃśahelopahāsair
nirmaryādair ucitacaritotpāṭa[E31b1]naiḥ sāvādaiḥ |
marmasparśa[Z385a1]vyatha[D65a1]naviṣamakleśasālyāyamānair
hā saṃsārāḥ khalakalanayā narmalīlāḥ karoti || 59.135 ||

135a -prathita-] BE^pcDZ (Ed.); -pratitha- AE^{αc}. || -bhraṃśa-] B (Ed.); -bhraṃsa- Σ. 135b nirmaryādair] Σ; nirmaryādair B. 135c -vyathanaviṣama-] Σ; *-vyasanaviṣaya- Ex conj. Ed.; *-vyasanaviṣama- Ex conj. DE JONG.

l khengs pa rab 'joms dregs dang nor nyams bde blag du ni nye bar rgod |
l tshul lugs min dang ngu ba'i spyod dang 'byed par byed dang skyon can dang |
l gnad du reg [Z385a2] pa'i gdung [D65a2] ba mi bzad nyon mongs zug rngu ltar spyod pas |
l kye ma 'khor ba dag ni mi bsrin tshul gyis sbyar ba'i rtse dga' byed | 59.135 |

135b can] DZ; bcas (also correct) Σ. 135c gnad du] Σ; gnod du G. || reg pa'i] D; rag pa'i Z; rig pa'i Σ. || bzad] Σ; bzod DZ.

「ああ、輪廻は悪党をけしかけては、誉れ高き権力の喪失を理由とする侮辱や蔑みを与えて、娯楽や気晴らしをする。〔その侮辱や蔑みは〕〔私の〕自負心を砕き、際限がなく、〔悪党自身の〕正しい行いを根絶やしにし、罵詈雑言に満ち、急所に触れて起る苦しみという激しい苦しみで〔私を〕刺す。

⁷³梵文音写のb句は līlāvamānavyasanāgnitaptah 「付着した蔑みという不幸の火の熱に苦しめられ」であり、校訂本はこの読みを採用。Tib. はこれを *smad pa'i gdung ba tsha ba'i me reg pas* 「誉れを汚す苦みの熱の火に触れ」と訳しており、梵文音写の読みと一致する。これに対しネパール系写本は līlāvamānavyasanāgnitaptah (写本 AB は -vyavasā- であるが、Tib. と梵文音写から写本 E の読みを本来の読みと見る) の読みを呈示している。「l」と「n」の誤写から生じた読みと考えられるので、ネパール系写本の読みを採用すべきであろう。

9.11.2 輪廻生存の中での王権は儂い

*vicaladanilodvelladvallīdalāñcalacañcalah
sthirataramahāmohaṃ puṃsām karoti bhavabhramah |
adhikataralās tatrāpy etā jalāvīlasaṃmilaj-
janaghanavanaprodyadvīdylāsarasāḥ śriyaḥ || 59.136 ||

136a *-anilodvellad-] Ex conj. Ed.; -anilovellad- A; -anilovellat- B; -anilovellad- E; -anilollad- DZ, Tib. translates *rlung gis rab bskyod*. Cf. footnote. 136c tatrāpy etā] AE (Ed.); tanrāpy etā B; trātrāpi etā DZ.

| *rlung gis rab bskyod 'khri shing rab tu g.yo ba'i 'dab rtse ltar mi brtan |*
| *srid pa 'khor bas kye ma skyes bu nmams la rmongs pa rab brtan byed |*
| *chus gang skye bo'i sprin tshogs yang dag 'dus pas rab brtsams glog gi ni |*
| *rtse dag'i nyams ldan dpal 'byor 'di dag de la yang ni lhag par g.yo | 59.136 |*

輪廻生存を彷徨うことは、人々に絶えざる深い迷いをもたらす。〔その輪廻生存の彷徨いは〕吹き荒れる風で揺れる蔓草の葉先のように落ち着くことがない⁷⁴。そこ（輪廻生存の彷徨い）でも、王権というものは一層移ろい易い。それは水を含んで色黒くなり、集まり合っている人間という無数の雲から起こる稲妻にも似た娯楽を本質としているのだから。

9.11.3 品行を大切にすべきである

vibhavavirahakleśaklāntaḥ sukhāntamahāvaṭe
nayanavikalāḥ paṅgur mūkaś cyuto 'pi virājate |
sakalavipadāṃ rakṣāratnaṃ prakāśasudhāmayāṃ
yadi na vimalaṃ śīlaṃ puṃsām manāg api khaṇḍitam || 59.137 ||

137d puṃsām] BE (Ed.); puṃsā Σ, but Tib. translates *skyes bu nmams kyi* (*puṃsām). || khaṇḍitam] A^pCBEDZ (Ed.); ṇaṇḍitam A^{cc}.

| *skyes bu nmams kyi rgud pa mtha' [G288a1] dag bsrung ba'i rin chen tshul khriṃs ni |*
| *rab gsal bdud rtsi'i rang bzhin dri med gal te cha yang ma nyams na |*
| *'byor pa dang bral nyon mongs kyis nyen 'dren byed ma tshangs 'phye bo dang |*
| *[N204a1] lkug par bde ba'i mjug tu g.yang sa chen por lhung yang rnam par mdzes | 59.137 |*

137a rin chen] Σ; rin cen Z. 137c nyon] Σ; nyan Z. 137d mjug] Σ; 'jug G.

権力を失うという苦しみに身をすり減らし、目を失い、足の自由を失い、口も利けなくなり、幸福の終わらせる大きな穴に転落しようと〔人は〕輝くだろう。ありとあらゆる不幸を背負っても、人々が汚れなき品行という、光輝の甘露から成る身を守る宝珠を決して砕くことがなければ。

yaṣṭyā vedmi jalāṃ sthalaṃ *ca sakalāṃ sparsēna gandhena vā
buddhyā sarvam avaimi durgamapathāṃ śrutvā vrajāmy anya[D65b1]taḥ |

⁷⁴ネパール系写本、梵文音写は a 句の vicalad- より後を正しく伝えていない。Tib. *rlung gis rab bskyod* 「風で揺れる」に従い、校訂本の読み-anilodvellad- を採る。

ni[Z385b1]śvāsāntara[A236b1]saktaghoranarakleśaṃ na jānāty asāv
andheneti viḍambyate bahutaraṃ mohāndhamugdho janaḥ || 59.138 ||

138a jalaṃ sthalaṃ] Σ; jalasthalaṃ DZ, Tib. translates *chu dang thang*. || *ca sakalaṃ] Ex conj. YOKOCHI; sasakalaṃ DZ;
saśakalaṃ Σ; *saśakalaṃ Ex conj. Ed., Tib. translates *dang ... mtha' dag*. 138b avaimi durgama-] Σ; avemi durgāma- A.
138c niśvāsāntara-] A^{pc}BE (Ed.); viśvāsāntara- A^{cd}DZ. 138d bahutaraṃ] Σ: bahutara A.

l chu dang thang yang dbyug pas rig cing mtha' dag reg pa'm dri dag gyis rtogs la l
l blo gros gyis ni bgrod dka'i lam kun rig cing thos nas gzhan du bdag [D65b2] 'gro ste l
l rmongs [Z385b2; P231b1] pas long zhing tshig pa'i skye bo 'di dag yid brtan dbus su chags gyur pa'i l
l 'jigs rung dmyal ba'i nyon mongs mi shes so zhes long bas rab mang co 'dri bzhin l 59.138 l

私は杖を使って水と大地を認識し、〔ものに〕触れること、或いは〔ものの〕匂いを嗅いで全てを〔認識し〕⁷⁵、知性で全てを理解し、他者から〔言葉を〕聞いて通り抜け難い道を進んで行く。『あの人は目が見えないから、息つく間にも付着してしまう、恐ろしい地獄へと導く煩惱の苦しみを知らないだろう。』と〔考えて〕、迷いの心で目の見えなくなった愚かな人は専ら〔私を〕まねる。」

10 父子の再会

10.1 クナーラの歌を耳にするアショーカ王

ity ātmavṛttānukṛtipravṛttam
gāyaty udāraṃ sarasena tasmin l
[B28a1] harṃyaprasuptaḥ sahasā prabuddhaḥ
kṣapāvasāne kṣitipaḥ pradadhyau || 59.139 ||

139a ātmavṛttānukṛti-] AE (Ed.); ātmavṛtyānukṛti- B; ātmavṛtṭyanukṛti- DZ.

l de ltar bdag nyid spyod pa'i rjes mthun 'jug
l yid 'ong nyams ldan de yis glu blangs tshe l
l mtshan mo'i mjug tu sa bdag khang bzang na l
l gzims pa 'phral la sad nas rab tu bsams l 59.139 l

139b yis] Σ; yi DZ. 139c mjug] DZ; 'jug Σ.

以上のような、自分の身に起こったことに事寄せてつくられた歌を、格調高く、詩情豊かに彼が歌っている間、寝所の御殿で眠りに就いていた王は突然眼を覚まし、考えた。

sadaiva duḥsvapnaniṛkṣaṇena
śaṅkākalaṅkair bhṛśam ākulo 'ham l
adyāpi me takṣaśilānivāsī
na kiṃ kumāraḥ prahiṇoti lekham || 59.140 ||

⁷⁵ネパール系写本は saśakalaṃ、梵文音写は sasakalaṃ の読みを提示するが、いずれも意味が通じない。そこで当該箇所を ca sakalaṃ と修正する読みを提案する。この読みは Tib. *dang ... mtha' dag* から支持され、jalaṃ sthalaṃ が接続詞 ca で結び付けられることになり、論理的な解釈が可能となる。

140a sadaiva] Σ; sadeva A. 140c me] Σ; te B. 140d lekham] Σ; leṣaṃ A, Tib. translates *spring yig* (*lekham).

l rtag tu rmi lam ngan pa mthong nyid kyis l
l dogs pa'i chu bos bdag ni rab tu 'khrugs l
l gzhon nu rdo 'jog na gnas da lta yang l
l bdag la spring yig ci phyir yongs mi spring l 59.140 l

140c rdo 'jog] Σ; rdo 'jeg P.

「いつも悪夢を見ては、私は〔息子に何か起こったのではないかという〕懸念の汚点で〔私の心は〕いっぱいになる。タクシャシラーにいる筈の私の太子が、今になってもどうして私に手紙をよこさないのだろうか。

kiṃ vismṛto nityam avismṛtasya
tasyāham āsannamukhonmukhasya l
cirapravāseṇa janasya nūnaṃ
snehānubandhāḥ śithilībhavanti || 59.141 ||

141b -mukhonmukhasya] B; -sukhonmukhasya A (Ed.); -mukhonmukhosya E; -mukhonmukhasyā DZ, Tib. translates *bzhin ras la mngon phyogs* (*-mukhonmukhasya). Cf. footnote.

l rtag tu mi brjed nye ba'i bzhin ras la l
l mngon phyogs de ni nga nyid brjed dam ci l
l nges par yun ring bral bas skye bo ni l
l mdza' ba'i rjes su 'ching ba lhod par 'gyur l 59.141 l

いつも〔物事を〕忘れてたりなどせず、〔私と〕近くで顔を合わせていたのに⁷⁶、彼は私のことを忘れてしまったのか。異国に長く留まれば、きっと人の愛情による結び付きも、緩くなってしまふのだろう。

śṛṇomi cemaṃ gamakānubandhaṃ
mūrcchadvipañcyā madhurasvarāṅkaṃ l
tattulyam eva śravaṇānukūlaṃ
gandharvalokād iva gītaśabdāṃ || 59.142 ||

142a gamakānubandhaṃ] Σ; gamanānubandhaṃ B. 142b -svarāṅkaṃ] Σ; -svarāṅka B; -svarāṅke E.

l ga ma kas bcings glu yi sgra 'di yang l
l rgyud mangs dbyangs snyan *gyi mtshan rab gsal ba l
l de yi nyid mtshungs snyan pa'i rjes mthun pa l
l dri za'i 'jig rten las bzhin [G288b1] bdag gis thos l 59.142 l

142a ga ma kas] DZ; ga ma bkas Σ. 142b mangs dbyangs] Σ; mang dbyangs DZ. || *gyi] Ex conj.; gyis Σ. 142c snyan] DZ; mnyan Σ.

⁷⁶校訂本は-sukhonmukhasya の読みを採り、写本 A はこれを支持する。しかし梵文音写の読みは-mukhonmukhasyā (lies: -mukhonmukhasya) であり、Tib. もこれを支持する。“m” と “s” の字形に起因する異読と考えられるから、本来の読みは-mukhonmukhasya であろう。従ってこの読みを採用する。

そして〔私は〕奏でられる琵琶が発する⁷⁷、低い音色と結びついたこの甘い調べの
楽曲を聞いている。〔この楽曲は〕彼の〔歌声と〕全く同じように耳に快い。恰も天上
の楽師の棲む世界から発せられる〔楽曲〕のようだ。

tasyaiva tā[Z386a1]van mṛ[D66a1]dugītam e[E32a1]tad
gūḍhaḥ sa kasmāt kim idaṃ na jāne |
kṣaṇaṃ vicintyeti visrjya rājā
mahattaraṃ putram athānināya || 59.143 ||

| re zhiḡ glu snyan [Z386a2] 'di [D66a2] ni de nyid kyi |
| ci slad de yib 'di ci yongs mi shes |
| skad cig de ltar rnam bsams rgyal po yis |
| nyug rum ba btang bu ni de nas bos | 59.143 |

143c de ltar] Σ; nyid ltar DZ. || yis] Σ; yi DZ.

あれ程迄に優美な歌、それは彼（クナーラ）のものに違いない。〔私が〕どうしてこ
れに気付かないことがあるのか。彼はどうして身を隠しているのだろうか。」
かく一瞬の間考えて、王は大臣を遣わし、そして息子を近くに呼んだ。

dūrāt tam āyantam udastanetra-
saroruhaṃ śrīrahitam vilokya |
putraṃ parijñāya vadhūsaḥāyaṃ
mahīpatir mohahataḥ papāta || 59.144 ||

144a udastanetra-] Σ; udastanetraṃ DZ.

| ring nas mig bral de ni 'ong ba dag
| mtsho skyes dpal dang bral ba bzhin mthong nas |
| chung mar bcas pa'i bu ni yongs shes te |
| sa yi bdag po rmongs pas bcom nas 'gyel | 59.144 |

144a bral] Σ; dral N.

蓮瓣のような目を抉られ、輝かしさを失い、妻を連れて遠方から彼が戻って来たの
を見て⁷⁸、王は〔彼が〕息子だとわかると、気を失って倒れてしまった。

sa labdhasaṃjñāḥ śanakair jalena
himacchaṭāśīkaradantureṇa |
samīpam āptaṃ nṛpatiḥ kumāram
utsaṅgam āropya ciraṃ śuśoca || 59.145 ||

145b -cchaṭāśīkaradantureṇa] Σ; *-cchaṭāśīkarasaurabhena Ex conj. DE JONG, Tib. translates *zer ma'i thigs 'dra chus reg pas* (*-cchaṭāśīkharasparśena?). Cf. footnote.

⁷⁷Tib. は該当箇所を *glu yi sgra* (*gītiśabdām) に同格であるとして、*rgyud mangs dbyangs snyan *gyi mtshan rab gsal ba* 「快い音の特徴が明瞭に現れる琵琶」という訳語を充てている。

⁷⁸ab 句に相当する Tib. *ring nas mig bral de ni 'ong ba dag mtsho skyes dpal dang bral ba bzhin mthong nas* 「遠方から、目を失った彼がやって来たのを、美しさを欠いた蓮華の如くに見て」は、梵本の読みと一致しない。Tib. は*dūrāt tam āyantam udastanetraṃ saroruhaṃ śrīrahitam ivālokya と読んだ可能性がある。

l kha ba'i zer ma'i thigs 'dra chus reg pas l
l dal gyis 'du shes thob pa'i mi bdag de l
l gzhon nu nye bar 'ongs pa phang par ni l
l yang dag bgod nas yun ring mya ngan byas l 59.145 l

145b dal gyis] D; dal gyi Σ. 145c nye bar] Σ; nya bar Z. 145d bgod] P; bkod Σ; bkad Z.

かの〔アショーカ〕王は雪塊から滴る雫に満ちた水を掛けられて⁷⁹、漸く意識を回復し、近くにやって来た太子を膝に乗せ、長い間悲嘆に暮れた。

hā putra netrotsava jīvaloke
kasmād imām duḥkhadaśām śrito 'si l
vilobhanaṃ tat surasundarīnām
kva lo[A237a l] canāmbhojayugaṃ gataṃ te || 59.146 ||

146c -sundarīnām] Σ; -saṃdarīnām A; -sundarānām B, A is difficult to decipher.

l 'tsho ba'i 'jig rten mig spro kyi hud bu l
l sdug bsngal skabs 'di [N204b1] khyod kysis ci slad bsten l
l lha yi mdzes ma rmongs byed khyod kyi ni l
l mig gi chu skyes zung de gang du song l 59.146 l

ああ息子よ。眼の喜びよ、生ける者達の世界で何故爾はこのような過酷な運命に陥ってしまったのか。あの爾の蓮瓣のような両眼は麗しき天女達をも魅力するものであったのに、〔あの眼は〕何処へ行ってしまったのか。

gāmbhīryabhūme guṇaratnakoṣa
sarasvatīvallabha sattvarāśe l
tvattaḥ kva sā vibhramabhūḥ prayātā
himāhatāmbhojavanād iva śrīḥ || 59.147 ||

147c kva sā] AE (Ed.); kaśā B; kva pā DZ. || vibhramabhūḥ] BE (Ed.); vibhramaḥ bhūḥ A; vibhramabhū DZ.

l zab mo'i sa gzhi yon tan rin chen mdzod l
l snying stobs phung po dbyangs can grogs khyod las l
l [P232a1] kha bas bcom pa'i chu skyes tshal las bzhin l
l rnam 'phrul sa gzhi dpal de gang du song l 59.147 l

147a rin chen] Σ; rin cen DZ.

思慮深さを集める場よ、美德という宝珠を収める箱よ、サラスヴァティーの愛する者よ、善い性質の集まりよ、雪に打たれた蓮池から〔なくなってしまう〕ように、あ

⁷⁹当該個所の訳には Tib. の翻訳官も苦労したらしく、Tib. は ab 句を *kha ba'i zer ma'i thigs 'dra chus reg pas dal gyis 'du shes thob pa'i mi bdag de* 「雪塊の細かな水滴に似た水に触れて、漸く意識を取り戻したかの王は」と意識している。AAM の編者もこの箇所を理解出来なかつたらしく、当該個所を *-chatāsīkharasaurasena* (AAM 5.247) という形に変えている。DE JONG はこれに従い、原文を **-chatāsīkharasaurabhena* 「〔雪〕塊から生じる細かい水滴から芳しい香りを放つ〔水を掛けられて〕」と修正すべきであろうかと推定している。しかし *-dantureṇa* を *-saurabhena* と修正するのは、余りに写本の読みと乖離してしまうことになるので、寧ろ校訂本の採用する写本の読みを採り、「雪塊から滴る雫に満ちた水」と解釈すべきと思われる。従ってここではそのように訳す。

の心をうっとりさせるような優美さ〔を集める〕場は爾のもとからなくなってしまう。
〔あの心をうっとりさせるような優美さは〕一体何処に行ってしまったのか⁸⁰。

rūpaṃ kva tat kvedam asahya[D66b1]m āndhyaṃ
kva sā vibhū[Z386b1]tiḥ kva ca durdaśeyam |
na dīryate me hr̥dayaṃ na jāne
kenāsya dattaḥ kuliśopadeśaḥ || 59.148 ||

148a āndhyaṃ | AE (Ed.); āndhyaṃ B; ābdhyaṃ DZ.

| gang du gzugs de mi bzod long [D66b2] 'di gang |
| 'byor de gang [Z386b2] du gang du skabs ngan 'di |
| bdag snying mi 'gas 'di la su zhig gis |
| rdo rje'i man ngag byin pa yongs mi shes | 59.148 |

148b skabs ngan | DZ; skabs na Σ. 148d yongs | DZ; yong Σ.

あの美しい容姿とこの耐え難い盲人たる様には何と開きがあることか。あの権勢とこの不幸なる様には何と開きがあることか。蓋し、私の心は切り裂かれることだろう。稲妻のような〔苛烈な〕教えを誰がこの者に教えたのだろう⁸¹。

kvāsau janas tvadvibhavānusārī
kulānurūpā tava niścaleyam |
ekaiva patnī parivāraśeṣaḥ
kṛcchre 'pi sādhor iva dhairyavṛttiḥ || 59.149 ||

149a tvadvibhava-] Σ; tadvibhava- E. 149b kulānurūpā] AE (Ed.); kulānurūpā B; kulānurūpā DZ. 149c -śeṣaḥ] Σ; -śeṣaṃ B.

⁸⁰当該詩節に述べられるクナーラの形容句は、古典詩の決まり文句からの借用が顕著である。vibhramabhūh「心をうっとりさせるような優美さ〔を集める〕場」、guṇaratnakoṣa「美德という宝珠を収める箱」に相当する文句はそれぞれ、Subhāṣitaratnakoṣaに収められた乙女、落胆を主題とする詩節に見られる。

[Subhāṣitaratnakoṣa 16.50 *433]
etal locanam utpalabhramavaśāt padmabhramād ānanam
bhrāntyā bimbaphalasya cājani dadhadvāmādharo vedhasā |
tasyaḥ satyam anaṅgavibhramabhruvaḥ pratyāṅgam āsaṅginī
bhrāntir viśvasṛjo 'pi yatra kiyatī tatrāsmadāder matiḥ || 16.50 *(433) ||

睡蓮の花弁と間違えてこの眼を、蓮華と間違えて顔を、ビンバの果実と間違えて愛らしさを備えた唇を創造主は造った。愛欲の神カーマの心を乱す場所である彼女の身体の至る所に、創造主〔自身〕さえも心の乱れを抱くとすれば、それならば我々を始めとする者は、〔彼女の身体の至る所に対して〕如何程の正常な判断力を抱いていられようか。

[Subhāṣitaratnakoṣa 42.29 *1489]
asmādr̥śāṃ nūnam apuṇyabhājāṃ
na svopayogī na paropayogī |
sann apy asadrūpatayaiva vedyo
dāridryamudro guṇaratnakoṣaḥ || 42.29 *1489 ||

私のような、幸福に与ることの出来ない者達が持っている美德という宝珠を収める箱など、自らの役にも立たねば、他者の役にも立たない。〔その箱は〕存在していても、貧困に入り口を塞がれているので、実に実際には存在しないものと見なされることになる。

⁸¹kuliśopadeśaḥ「稲妻のような〔苛烈な〕教え」の解釈が難しいが、過去の業の力で目を失うと定められていたクナーラの運命を意味するものと思われる。

l khyod 'byor rjes 'brang skye bo de gang du l
l khyod kyi chung ma g.yo med gcig bu 'di l
l sdug kyang dam pa'i brtan pa'i spyod tshul bzhin l
l rigs kyi rjes mthun 'khor gyi lhag mar gyur l 59.149 l

149c dam pa'i] DZ; dam pa Σ.

爾の権力に従うあの者達は一体どこだ。一族に相応しく、〔心の〕動じることのないこのたった一人の妻だけが〔爾に〕従う者として、爾に残されたのだ。恰も冷静な振る舞いが、苦境にある時にも善き者には〔従う者として残される〕ように。」

ity aśrusaṃvegaviśiṃnavarṇaṃ
pralā[B28b1]pīnas tasya vaco niśamya l
natvā kumāras tam uvāca dhīras
tūrṇaṃ tadañkāḍ avatīrya bhūmim || 59.150 ||

150a -varṇaṃ] AB (Ed.); -varṇa- E; om. DZ.

l zhes pa mchi ma'i rgyun gyis yi ge nyams l
l cho nge smra ba de yi tshig thos [G289a1] nas l
l de yi phang las myur du sar babs te l
l gzhon nu brtan pas de la btud nas smras l 59.150 l

150a gyis] Σ; gyi Z.

かく激しい涙のせいで声が途切れ途切れになった、咽び泣く彼の言葉を聞き、志操堅固な太子は速やかに彼の膝から地に降り、彼に頭を下げて言った。

vimuñca *pṛthvīpuruhūta śokaṃ
śucābhibhūtā na bhavanti dhīrāḥ l
kṣayāya jāgarti natonnatānām
eṣa svabhāvo bhavitavyatāyāḥ || 59.151 ||

151a *pṛthvīpuruhūta] Ex conj. Ed.; pṛthvīpurahūta Σ, Tib. translates *sa yi brgya byin* (*pṛthvīpuruhūta).

l sa yi brgya byin mya ngan nmam par thong l
l mya ngan dag gis zil mnan brtan pa min l
l mtho dang dma' rnams brlag slad nges par ni l
l myong bya'i rang bzhin 'di ni mel tshe byed l 59.151 l

「王様、悲しむのはおやめ下さい。自制心ある者とは悲しみに屈せられることのない者です。運命というものは、卑しき者であれ、気高き者であれ、彼等を破滅に追いやろうとして〔彼等を〕じっと見守っているのであり、これが〔運命というものの〕本質なのです。

aiśvāryam āścaryasukhāvataṃsaṃ
lāvaṇyalakṣmītilakaṃ vapuś ca l
kṣaṇena yāty eva kṛtāntanarma-
karmorminirmāṇaḥṛtaṃ narāṇām || 59.152 ||

l mi rnams dbang phyug ngo mtshar bde ba yi l
l rna rgyan can dang dpal mdzes thig le can l
l lus kyang mthar byed rtse ba'i las rlabs kyis l
l sprul pas phrogs pa skad cig nyid kyis 'gro l 59.152 l

152c rlabs] DZ; rnams Σ. || kyis] Σ; kyi D. 152d phrogs] D; phregs Z: phyogs Σ.

人々の、驚きと安楽を耳飾りとする支配力と、しとやかさと輝かしさに際立つ容姿とは、運命の悪戯という不断の業の所産によって奪われ、一瞬のうちに消え去ってしまうのです。

bhaved abhāvānubhave bhave 'smin
satyasvabhāvo yadi bhāvavargaḥ l
[D67a1] dhruvaṃ na [Z387a1] kuryur munayas tad ete
saṃtyaktabhogā vijane nivāsam || 59.153 ||

153b -vargaḥ] DZ (Ed.); -vargāḥ AE; -vargyaḥ B. 153c tad ete] Σ; tadaite B (Ed.).

l gal te dngos med nyams myong srid pa 'dir l
l dngos tshogs rang bzhin bden par gyur pa na l
l [D67a2] thub pa 'di dag [Z387a2] longs spyod yongs btang nas l
l nges par dben pa dag tu gnas mi byed l 59.153 l

この輪廻生存の中では有るものがなくなるということが直接的に経験されるにもかかわらず、仮に諸存在が真の自性を備えているとするならば、きっと、かの聖者達が享樂の対象をうち捨て人気のない場所に住まうことはないでしょう。」

iti bruvāṇaḥ sa vipannimittam
prṣṭaḥ punaḥ śokamayena rā[E32b1]jjñā l
nyavedayal lekhanibaddham asmai
nijaṃ śanair netravināśavṛttam || 59.154 ||

154c nyavedayal] Σ; nyavedayal A; nivedayal E, Tib. translates *bshad* (*nyavedayal). Cf. footnote.

l ces smras de la rgud pa'i rgyu mtshan ni l
l rgyal po mya ngan ldan pas yang yang dris l
l de la dal gyis spring yig dang 'brel ba'i l
l rang gi mig ni mam par nyams tshul bshad l 59.154 l

154a smras] DZ; smra Σ.

彼はこのように述べたが、〔身に降りかかった〕不幸の原因を王が悲しみでいっぱいになって幾度も尋ねたので、〔彼は〕この〔王に〕手紙に書き記されていた目の損壊についての事柄を自ら徐に語った⁸²。

śrutvaiva tat tīvranṣāmsavṛttam
nivṛttavṛtteṣv api napravṛttam l

⁸²写本 A は nyavedayal という読みを呈示するが、梵文音写及び Tib. に基づいて校訂本の読み nyavedayal を採用する。

kuṭhāradhārāparibhūta[A237b1]mūlah
papāta śākhīva *dharādhināthaḥ || 59.155 ||

155b nirvṛtavṛttesv] DZ (Ed.); nirvṛtavṛttasv AB; nirvṛtavṛttesv E. Cf. footnote. 155c -paribhūta-] Σ; -paripūribhūta- DZ; *-paricchinna- Ex conj. Tib. *rtsa ba yongs bcad pa'i* (DE JONG). Cf. footnote. 155d *dharādhināthaḥ] Ex conj.; dharāvamūlah Σ; dhara DZ. Cf. footnote.

l spyod ngan spyod pa rnams la'ng ma spyad pa'i |
l gtum pa'i spyod tshul mi bzad de thos nas |
l sta re rnon pos rtsa ba yongs bcad pa'i |
l yal 'dab can bzhin 'dzin byed yu ba 'gyel | 59.155 |

嘗て起こった出来事の中でも起こった例のない⁸³、凄惨な出来事を耳にするや否や⁸⁴、その王は⁸⁵、斧の刃で根の力を完全に奪われてしまった木の如くに⁸⁶、倒れてしまった。

sa labdhasaṃjñāḥ kuṭīlaṃ vicintya
taṃ tiṣyarakṣāracaṭaṃ prayogam |
samudyayau strīvadhapātake 'pi
dharmādareṇaiva vinigrahe 'syāḥ || 59.156 ||

156b -racitaṃ] Σ (DE JONG); -caritaṃ B; *-carita- Ex conj. Ed. 156d *dharmādareṇaiva] Ex conj. Ed.; dharmādareṇeva Σ, Tib. translates *chos la gus pas bzhin* (*dharmādareṇeva). Cf. footnote.

l 'du shes thob des skar rgyal srung ba yis |
l bkod pa'i sbyor ba gya gyu de [P232b1] bsams nas |
l [N205a1] de yi chad pa bud med gsod pa yi |
l sdig la'ng chos la gus pas bzhin brtson gyur | 59.156 |

156c gsod] DZ; bsod Σ. 156d gus pas] Σ; gus pa DZ.

彼は意識を取り戻すと、その不正なはかりごとはティシュヤラクシャーがなしたの

⁸³ネパール系写本は b 句冒頭部を正しく伝えていない。校訂本が採用する梵文音写の読み *nirvṛtavṛttesv* が本来の読みと思われる。Tib. は *spyod ngan spyod pa rnams la'ng* 「悪い行いをなす者達の間でさえも」と解釈する。

⁸⁴校訂本は b 句末を *na pravṛttam* とするが、これでは *na* が定動詞 *papāta* に掛ることになり、このままでは意味が通じなくなる。そこで *na* を複合語の前分要素として、*npravṛttam* と読み解釈を提案する。この解釈をとるならば、*na* が定動詞 *papāta* に掛かることを避けられるだけでなく、当該個所の Tib. *ma spyad pa'i* 「未だ起こったことのない」と一致する。

⁸⁵DE JONG が指摘するように、d 句末を校訂本、梵文写本は *dharāvamūlah* とするが意味不明である。しかし、梵文音写も *dhara*-以下を欠いているので原文を復元し難い。また、Tib. は *'dzin byed yu ba* 「大地の柄は」の訳語を充てるが、これでも意味は明瞭とならない。AAM の並行詩節は当該個所を *mahīpatiḥ saḥ* 「かの王は」と読み変えており、恐らく AAM の作者が *Av-klp* を手にした段階で既にこの箇所に伝承の混乱が起こっており、原文を推定できなかったが為に、AAM の作者が意味上 *mahīpatiḥ saḥ* という語を補ったものと思われる。原文が破損している以上、推定して原文を復元せざるを得ないが、当該個所は当初 **dharādhināthaḥ* 「王」と筆写されていた可能性があるため、ここではこの読みを提案する。但しあくまで推定する読みであるので、検討の余地は多分にある。後考を俟つ。

⁸⁶相当箇所を Tib. は明確に *sta re rnon pos rtsa ba yongs bcad pa'i* 「鋭利な斧で根を断ち切られた」と訳している。DE JONG はこれに従い、原文を **kuṭhāradhārāparicchinnamūlah* と読むよう提案するが、梵文写本、梵文音写いずれからも支持されない。寧ろ校訂本の採用する写本 A の読み「斧の刃で根の力を完全に奪われてしまった〔木〕」を採用して問題ないと思われる。従ってこの解釈をとる。

ものだと考え、彼女を拘束し、実にダルマを尊重する気持から⁸⁷、女性殺害という過失さえも犯そうとした⁸⁸。

krauryaparakāre vipulāpakāre
tasmin pratīkārasamudyataṃ tam |
avārayad duḥsahaduḥkhayogam
svakarmapākena vadan kumāraḥ || 59.157 ||

| gdug pa'i nmam pa gnod pa rgya che ba |
| de la lan sbyor rab tu brtson pa de |
| rang las smin pas bzod dka'i sdug bsngal [G289b1] dang |
| ldan par smra ba'i gznon nus rab tu bzlog 59.157 |

157b lan] Σ; len DZ.

彼がその残忍で酷い悪行に対して報復しようとするのを「自分の業のもたらす異熟として耐え難い苦しみとの結びつきがあるのだ。」と太子は言って制止した。

tam abravīd bhūmipatir vyathārtah
śokena kopena ca dahya[D67b1]mānaḥ |
mohāt kim etāṃ niśitām [Z387b1] anāryāṃ
krauryaprasaktāṃ parirakṣasi tvam || 59.158 ||

| sa bdag gdung bas gzir cing mya ngan dang |
| khro bas tshig pas de la rab [D67b2] smras pa |
| gdug pa la chags [Z387b2] 'phags min gtum mo 'di |
| khyod ni rmongs las yongs su srung ngam ci | 59.158 |

158b khro] DZ; gro Σ. 158c gdug pa] Σ; gdugs pa PG. 158d rmongs las] Σ; rmongs pas DZ.

王は苦しみに苛まれ彼に言った。悲しみと怒りに焼かれながら。「爾が、刺々しく、卑しい、残忍さを備えたこの女を守ろうとするのは、心の迷いからなのか。」

dveṣodyate snehanibandhane vā
tulyaṃ mano yasya sa kiṃ manuṣyaḥ |

⁸⁷ネパール系写本、梵文音写の読みは全て dharmādareṇeva であり、Tib. *chos la gus pas bzhin* もこれを支持する。しかしここでこの読みを採用すると dharmādareṇa の比喩基準を詩節内ないしは詩節前後に欠くことになり解釈できない。“ai” と “e” の正書法に起因する異読であり、Tib. の翻訳官がこの点を認識出来なかった点には疑問が残るが、本来の読みは dharmādareṇaiva であろう。従ってこの読みを採る。

⁸⁸vinigrahe samudyayau 「拘束しようとした」に相当する箇所を、Tib. は *chad pa ... brtson gyur* 「罰しようとした。」と意訳する。尚、転輪王を理想としていたアショーカが敢えて王妃を罰しようとしたことについて岡本健資氏は、*Manusmṛti* 9.232 に、

[*Manusmṛti* 9.232]
kūṭṣāsānakartṛiṃś ca prakṛtīnām ca dūṣakān |
stribālabrahmaṇaghñāṃś ca hanyād dviṭsevinas tathā || 9.232 ||

偽の勅令を下した者、大臣達を墮落させる者、女性、幼児、バラモンを殺害する者、同様に、敵に仕える者を〔王は〕殺すべきである。

という規定が背景にあったことを指摘する（岡本健資「アヴァダーナ文献における国王観」『印仏研』50-2 (2002): 926-930）。

yasyāpakāre 'sti na roṣaleśas
tasyopakāre 'pi katham prasādaḥ || 59.159 ||

159a dveṣodyate] Σ; dveṣodyata B.

l sdang bar sbyor dang mdza' bas bcings pa la |
l mtshungs pa'i yid can gang de mi 'am ci |
l gang la gnod la khro ba'i cha med pa |
l de la phan la drin yang ji ltar yod | 59.159 |

〔自分への〕憎しみに心を向ける者に対しても、〔自分への〕愛情を備えている者に対しても平等な心を持つ者は人間だろうか。悪行に対して微塵の怒りの気持ちも抱かない者、そんな者は〔他者からの〕恩恵に対しても、どうして清らかな心を抱いたりしようか。〕

iti śvasantaṃ pralapantaṃ ārtaṃ
dhīraḥ kumāraḥ pitaraṃ jagāda |
rājan na me duḥkhalavo 'sti kaścit
tīvrāpakāre 'pi na manyutā[B29a1]paḥ || 59.160 ||

l ces pa rab smra shugs 'byin gzir ba yi |
l yab la gzhon nu brtan pas rab smras pa |
l rgyal po bdag la sdug bsngal cha 'ga' med |
l mi bзад gnod la'ng khro ba'i gdung ba *med | 59.160 |

160d *med] Ex conj.; min Σ.

苦しめられて溜息をつき、このように呟く父親に志操堅固な太子は述べた。「王様、私にはどんな微塵の苦しみとてありません。酷い悪行に対しても、〔それに対する〕怒りから生まれる〔どんな〕熱の苦しみもありません。

10.2 真実語による目の回復

manaḥ prasannaṃ yadi me jananyāṃ
yenoddhṛte ca svakareṇa netre |
tat tena satyena mamāstu tāvan
netradvayaṃ prāktanam eva sadyaḥ || 59.161 ||

161d -dvayaṃ] Σ; -dvaya B.

l mig dag rang gi lag gis phyung ba bzhin |
l gal te ma la bdag yid rab dang na |
l bden pa de yis re zhig mig gnyis ni |
l sngon bzhin 'phral la yang dag 'byung bar shog 59.161 |

161a mig dag] Σ; mi bdag DZ. 161b yid] Σ; yi G.

両眼が抉り出されたのは、自分のなした行いによるのですから、母親に対する私の心は清らかなものです。もし〔そのことが真実である〕なら、その真実によって私には今すぐ両眼が全く元の通りに戻るはずです。」

ity uktamātre nrpanandanasya
prādurbabhūvākṣisarojayugmam |
satyavratapratyayakāri loke
vilobhanaṃ tatkṣanam eva lakṣmyāḥ || 59.162 ||

| ces brjod tsam la de yi dus nyid na |
| mi bdag bu yi spyan gyi mtsho skyes zung |
| 'jig rten bden pa'i brtul zhugs yid ches byed |
| dpal mo rnam par chags byed rab tu byung | 59.162 |

162b yi | DZ; yis Σ. || gyi | DZ; ni Σ.

かく述べるや否や、実にその瞬間に太子には一对の蓮瓣のような眼が現れた⁸⁹。〔その眼は〕人々に〔彼が〕不妄語の誓戒を守ったという理解をもたらし、吉祥天を魅了するものであった。

10.3 クナーラの息子の王位継承

nrpaḥ sukhotsāhakaram prajānām
virājamānaṃ nayanadvayena |
taṃ yauvarā[D68a1]jye vimu[Z388a1]khaṃ viditvā
*tadātmajaṃ sampratīnaṃ nyayūṅkta || 59.163 ||

163d *tadātmajaṃ sampratīnaṃ | Ex conj. YOKOCHI; tadātmajaṃ sampratīna AE; tadātmajaṃ sampratīnā B; tam ātmajaṃ sampadina D; tam ātmaja sampadina Z; *tam ātmajaṃ tatpratīmaṃ Ex conj. Ed.; *tam ātmajaṃ sampadinaṃ Ex conj. DE JONG.

| 'dren byed zung gis rnam par mdzes gyur cing |
| skye dgu rnams *gi bde dang spro byed pa'i |
| bu de rgyal tshab [D68a2] las phyir phyogs [Z388a2] shes nas |
| mi bdag de yis phun tshogs rnams la bskos | 59.163 |

163b skye dgu | Σ; skye rgu DZ. || *gi | Ex conj.; ni Σ.

⁸⁹以上に相当する箇所は、Kun では次のように述べられている。

[Kun D238b2–3; P297a7–297b1; G341b6–342a1; N268b4–5]
bden pa gang gis rgyal srungs ma dang skyes bu gnyis po'i bar la de'i tshe dang da lta'i bar du skyo ba'i sems med cing | bdag gis (| Σ; gi D) bu gcig pa skyed byed ji lta bar snying rje dang byams pa'i sems mnyam par gyur pa'i bden pa'i tshig des sngon gyi mig ji lta ba bzhin du gyur cig | tshig brjod pa dang dus mnyam pa nyid du ku na la'i mig sngon gyi ji lta ba bzhin du gyur to |

この真実によって、すなわち、ティシュヤラクスターと〔眼を抉った〕二人の人物に対して、あの時も今も嫌悪の心がなく、私が、産み落とされた一人の子供と同様に、〔他者に対し〕憐みと慈しみの心を等しくするようになったという、この真実の言葉によって、以前の眼のようになれ。」言葉を発すると同時に、クナーラの眼は以前の如くとなった。

〔彼は〕生ける者達に楽と力を与え、両目の輝きによって光輝を放っていた。王はその彼が、王位継承に関心がないのを知り、彼の息子サンプラティンを〔王位継承者〕に任じた⁹⁰。

10.4 王妃の処刑とタクシャシラーの藩主の処罰

ghorāpacāre sadrśaṃ vidhāya
patnyāḥ pra[A238a]tūkāram atha kṣitīśaḥ |
krodhānalaṃ takṣaśīlādhipa 'pi
tanmarṣaṇād duḥsaham utsasarja || 59.164 ||

| de nas sa bdag gis ni btsun mo la |
| drag po'i gnod la mtshungs pa'i lan bsgrubs bzhin |
| rdo 'jog dbang po la yang khro ba'i me |
| bzod dka' de yi bzod pas rab tu btang | 59.164 |

164d yi] Σ; yis DZ.

さて、王は〔王妃が太子に加えた〕恐ろしい危害と同等の報復を王妃に加え、タクシャシラーの王にも、彼が〔クナーラの目を抉り出すことを〕黙認してしまったので、耐え難い怒りの炎を放った。

11 過去世物語

11.1 五百匹の鹿の眼を抉る獵師

tatkautukād bhikṣugaṇena pṛṣṭaḥ
provāca saṅghasthaviraḥ sa vidvān |
janmāntare lubdhaka eṣa kāśī-
pure babhūva kṣitipālaputraḥ || 59.165 ||

| dge [G290a1] mtshan de las dge slong tshogs kyis dris |
| dge 'dun gnas brtan mkhas pa des [P233a1] smras pa |
| sa skyong bu 'di skye ba gzhan la ni |
| ka shi'i grong khyer dag tu rngon par gyur | 59.165 |

⁹⁰d 句に見られるクナーラの名にはネパール系伝本とチベット伝本で相違が見られ、前者は sampratīn、後者は sampadin (*phun tshogs*) という名を伝えている。DE JONG は Divy 433.21–24 に見られる王朝系譜に従い後者を採用し、d 句を *tam ātmajāṃ sampadināṃ nyayūnkta 「その息子サンパディンを〔王位継承者に〕任じた」と修正すべきであるとする。しかしこの読みでは cd 句に二度 tam が用いられることになり、指示対象が不明確になる。寧ろ *tadātmajāṃ sampadināṃ nyayūnkta 或いは *tadātmajāṃ sampratīnāṃ nyayūnkta と読んだ方が適当であるように思われる。但し sampratīnāṃ、sampadināṃ の読みの何れを採用すべきかは決定し難い。Av-klp 第 74 章 Prthivīpradāna 第八詩節にはアショーカの孫の名として Sampadin の名が見られるが、これに従って当該箇所を sampadināṃ に読むと写本の伝承からかなり乖離することになる。ここでは sampratīnāṃ の読みを採る。

尚 Sampratī 是 Hemacandra の *Pariśiṣṭaparvan* の伝承に見られる名であり、プラーナの王朝系譜が伝えるクナーラの息子の名は Bandhupālita である (PARGITER [1918: 28–29])。

165c ni] DZ; na Σ. 165d ka shi'i] DZ: ka shi Σ.

そのこと(クナーラが目を回復したこと)に興味関心を抱いて、比丘の集団が〔クナーラの前世に関する〕質問をなすと、その智慧ある僧団の長老は述べた⁹¹。「前世において、この太子はカーシーの都城に住む獵師であった。

guhāpraviṣṭaṃ himavattaṭānte
labdhvā mṛgāṇāṃ śatapañcakam saḥ |
andhaṃ vidhāyākṣivipātanena
yathopayuktaṃ nyavadhīt krameṇa || 59.166 ||

166a guhā-] ABE^{pc}DZ (Ed.); guṇā- E^{ac}. 166b labdhvā] AE (Ed.); labdhā Σ.

l de yis gangs ldan ngos kyi phug zhugs pa'i |
l ri dwags lnga brgya dag ni thob [N205b1] gyur nas |
l mig dag phyung nas long bar rab bsgrubs te |
l ji ltar nye bar mkho ba rim gyis bsad | 59.166 |

166b ri dwags] Σ; ri dags DZ. 166d mkho ba] Σ; 'khor ba DZ.

彼はヒマーラヤの懸崖にある洞穴に入り込んだ五百頭の鹿を手にする、〔鹿の〕目を潰して盲目にし、必要に応じて順次殺害した。

11.2 仏塔の眼を抉り、宝珠を嵌め込む長老の息子と仏塔を修復する男

athānyajanmany api bālako 'sau
mugdhābhidhaḥ śreṣṭhisutaḥ pramohāt |
cakāra caityapratimājinasya
śastreṇa nirlocanam ānanābjam || 59.167 ||

167c caityapratimā-] Σ; cetyapratimā- A.

l de nas skye gzhan la yang tshong dpon bu |
l mug dha zhes ni byis pa rab rmongs las |
l mchod rten gyi ni rgyal ba'i sku gzugs kyi |
l bzhin ras pa dma mtshon gyis mig med byas | 59.167 |

167b ni] DZ; 'di Σ. 167c gyi] Σ; gyis Z. 167d bzhin ras] Σ; bzhin ras P.

また別の生でも、その若者はムグダ(馬鹿者)という名の長老の息子であり、心の迷いから、剣を用いて仏塔の勝者像の蓮華のような顔から眼を抉り出した。

saṃjātasamjñāś ca navendranīla-
mayam vyadhād akṣiyugam sa tasya |
[Z388b1] tato [D68b1] 'nya[E33a1]janmany api śiṃcaitya-
samskārapūjām sa punaś cakāra || 59.168 ||

⁹¹ここでクナーラの前世物語を語る人物を Divy (418.4), 『王伝』(110a17)、『王経』(147b7)がウパグブタとするのに対し、Kun (D238b7; P297b7)は鷄園寺の長老 Yaśas (Grags pa) とする点で、伝承を大きく異にしている。クシェーメンドラ本では長老の名は最後まで明かされない。

168a samjātasamjñāś ca Σ; sajātasamjñāś ca DZ. 168d -saṃskārapūjām] BE (Ed.); -saṃskārapūjyaṃḥ A; -saṃskārapūjāḥ DZ.

l 'du shes skyes des de yi spyan zung dag
l i ndra nī la'i rang bzhin gсар du bsgrubs l
l [Z388b2] de nas [D68b2] skye ba gzhan la'ng mchod rten ni l
l zhig pa gṣo dang mchod pa dag kyang byas l 59.168 l

168a skyes] Σ; bskyed D; bskyad Z. ll spyan zung] Σ; spyān zur DZ. 168c skye ba gzhan la'ng] Σ; skye gzhan la yang D (also correct); skye gzhan la _ ng Z.

そして彼は正気を取り戻すと、新しいサファイアで出来た両眼をそれ（仏像）にあてがった⁹²。それから別の生でも、彼は再度、破壊された仏塔を元通りに完成させ、供養をなしたのである⁹³。

12 結合句

12.1 鹿の眼を抉り出した行為及び、仏像の眼を抉り出した行為と現世の果の連繫

netrāpahāreṇa vane mṛgānām
bālye ca caityapratimākṣilopāt l
avāptavān eṣa vināśam akṣṇor
janmāntareṣv adya ca rājaputraḥ ll 59.169 ll

⁹²以上が Kun の第三番目の過去世の物語に相当する。Kun の所伝は以下の通りである。

[Kun D239b4–240a1; P299a2–8; G343b2–6; N270a2–6]
dge slong dag sngon byung ba 'das pa'i dus na l yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'khor ba 'jig de nyid kyi mchod rten rin po che sna bzhi las byas pa rgyal po mdzes pas byas pa dang l mchod rten der sa las byas pa'i sku gzugs gcig kyang byas so l ji tsaṃ na tshong dpon zhig *gi (] D; gis Σ.) byis pa ma ma dang lhan cig mchod rten der song ba dang l de byis par gyur pas mde'u blangs te sangs rgyas kyi sku gzugs kyi spyān phyung ngo l ji srid du gzhan zhig na chen por 'gyur nas l yang mchod rten de nyid du song ngo l des mthong ma thag tu sku gzugs 'di byis par gyur pas bdag gis byas so dran pa dang l de khyim nas rdzas blangs te l de dang rin po che sna bzhi las byas pa'i sku gzugs byas nas l mig gnyis su rin thang che ba'i nor bu in dra nī la bcug ste l mchod rten de la yang mchod pa chen po dang bskor ba byas nas (] D; na Σ.) l gang bdag byis par gyur pas l bcom ldan 'das kyi spyān phyung nas sdig pa'i las bgyis te l sdig pa'i las 'di'i skal pa can du ma gyur cig l dge ba'i rtsa ba 'dis kyang ston pa 'di lta bu mnyes par byed kyi l mi mnyes pa byed par ma gyur cig ces smon pa byas so l

「比丘達よ、過去世において同じ正等覺者拘樓孫の四宝で出来た仏塔が*Sundara (mDzes pa) 王によって建立され、その仏塔には一体の土製の仏像も建立されたのだ。その時或る長者の息子が乳母に連れられてその仏塔のもとへ行つた。彼は幼かったが故に鏃を手に取つて、正等覺者の像の目を抉り出してしまった。そしてまた或る時、〔彼は〕成人してから同じ仏塔のもとへ行つた。彼は〔目の抉られた仏像〕を見るや否や、『自分が幼かったが故にその仏像を〔このような姿に〕なしてしまつたのだ。』と思ひ出した。彼は家から資材を持って来て、そ〔の資材〕と四宝で出来た像を建立し、両眼に高価なサファイアという宝珠を嵌め込んだのだ。〔彼は〕その仏塔に更に多大な供養と右繞をしてから、『私は幼かったが為に世尊の眼を抉り出し、悪業を犯してしまつた。この悪業の残滓に与る者とならぬように。この善根によってまた、師をかく喜ばせることがあつても、喜ばせないことがないように。』と誓願を立てたのだ。」

⁹³以上が、Kun、Divy、漢訳二本の第二番目の物語に相当する。

l nags su ri dwags rnams kyi mig phrogs shing l
l byis pas mchod rten sku gzugs spyen phis pas l
l rgyal po'i bu 'dis skye ba gzhan rnams dang l
l da lta mig dag nam par nyams pa thob l 59.169 l

169a ri dwags] Σ; ri dags DZ.

森で鹿達の眼を奪ったがために、そして幼少期に仏塔の像の眼を奪ったが為に、この者はそして今、別の生で太子となってからも眼を失ったのであり、

12.2 仏像に宝珠の眼を嵌めた行為、仏塔の修復と供養を行った行為と現世の果の連繫

sa ratnanetrām pratimām ca kṛtvā
dṛṣṭim vinaṣṭām punar āsasāda l
viśīrṇacaityapratipūraṇena
prāsādikāḥ kāntimayaś ca jātaḥ ll 59.170 ll

l rin chen mig ldan sku gzugs byas pa yis l
l nam par nyams pa'i mig ni slar yang thob l
l mchod rten zhig pa rab tu rgyas byas pas l
l rab tu dad ldan mdzes pa'i rang bzhin gyur l 59.170 l

そして〔仏〕像に宝珠の眼を施したので、消えた眼を再び得たのである。さらに破壊された仏塔を元通りに完成させたので、心の清らかな、美貌に溢れる者として生まれたのである。

srotahprāptiphalapravṛttavimalālokakrameṇāmunā
vairāgyojjvalasa[B29b1]tyadarśanavidhau labdhādhikārasthitih l
samyak puṇyavaśād upaiṣyati śanaiḥ kālena sambuddhatām
ity uktaṃ sthavireṇa bhikṣuni[A238b1]vahaḥ śrutvābhavad vismitaḥ ll 59.171 ll

171c upaiṣyati] E (Ed.); upeṣyati AB; bhaviṣyati DZ, Tib. translates 'gyur. 171d uktaṃ] Σ; *uktaḥ Ex conj. Ed.

l rgyun zhugs 'bras bur rab 'jug dri ma dang bral snang ba'i rim pa 'di yis ni l
l chags bral rab 'bar bden pa mthong ba'i sgrub byed dag la gnas pa'i dbang gyur thob l
l dus kyis yang dag bsod nams dbang las dal gyis rdzogs [G290b1] pa'i sangs rgyas nyid du 'gyur l
l zhes pa gnas brtan gyis gsungs dge slong tshogs kyis thos nas ya mtshan ldan par gyur l 59.171 l

171a 'bras bur] DZ; 'bras bu Σ. 171c dus kyis] Σ; dus kyi Z. ll dal gyis] Σ; dal gyi DZ. 171d gsungs] Σ; gsung Z.

預流果の獲得に向けて起こった、あの一連の汚れなき光の諸段階を経て、離欲で輝き、真実の直観を成し遂げる者となった後、〔彼は阿羅漢たる〕資格を得た者として持続し、福德の力で〔彼は〕ゆっくりと期が満つれば、正等覚に至るであろう。」と長老が語ったのを聞いて、比丘の集団は驚きを生じたのであった。

iti kṣemendraviracitāyām bodhisattvā[Z389a1]vādānakalpalatāyām [D69a1] kuṅālāvadānaṃ
nāma ekonaṣaṣṭitamah pallavaḥ

Colophon nāma ekonāṣaṣṭitamah pallavaḥ] Σ; om. B; nāma ṣaṣṭitamah pallavaḥ E.

l zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi [D69a2] 'khri shing las *ku ṅā [Z389a2] la'i rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste lnga bcu rtsa dgu pa'o l

Colophon zhes pa] DZ; ces pa Σ. ll *ku ṅā la] Ex conj.; ku lā la DZ; ku nā la PN; ku nā li G.

以上、クシェーメンドラによって著された『菩薩の偉業の如意の蔓草』中の「クナーラの偉業」と題する第59章了。

略号及び参考文献⁹⁴

(1) 一次文献

AAM *Aśokāvadānamālā*

See BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965].

Av-klp *Bodhisattvāvadānakalpalatā*

Avadāna kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra. With its Tibetan Version Called rTogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton Lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now first edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal (=Bibliotheca Indica N. S. #777, 826, 848, 860, 1168, 1257, 1262, 1295, 1310, 1354). Ed. Sarat Chandra DAS & Hari Mohan VIDYĀBHUṢAṆA / Satis Chandra VIDYĀBHUṢAṆA, 2 vols, Calcutta: Baptist Mission Press, 1888–1917.

Bhāratamañjarī *The Bhāratamañjarī of Kṣemendra (=Kāvyaṃālā #64). Ed. Mahāmahopadhyāya Paṇḍit ŚIVAD-ATTA & Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB, Bombay: Nirṇaya Sagar Press, 1898. (Reprint Delhi: Motilal Banarsidass, 1984)*

Carakasamhitā *The Charakasamhitā by Agniveśa Revised by Charaka and Dṛdhabala: With the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Chakrapāṇidatta. Ed. Vaidya Jādavaji Trikamji ĀCHĀRYA, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1941.*

Divy *Divyāvadāna*

The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends. Ed. Edward Byles COWELL & Robert Alexander NEIL. Cambridge, 1886. (Reprint Delhi: Indological Book House 1987)

Kun *Ku na la'i rtogs pa brjod pa. Tr. Vidyākaraṇaprabha and Rin chen bzang po (Tōhoku Cat #4145; Ōtani Cat #5646)*

Kum *Kumārasambhava*

Vallabhadeva's Kommentar (Śāradā-Version) zum Kumārasambhava des Kālidāsa (=Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 20,1). Ed. Mulakaluri Sriman Narayana MURTI, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1980.

Kuṭṭanīmata *Kuṭṭanīmatam Kāvyaṃ by Dāmodara Gupta (=Bibliotheca Indica N. S. #1551). Ed. Madhusudan KAUL, Calcutta: Baptist Mission Press, 1944.*

Mahāvamsa *The Mahāvamsa. Ed. Wilhelm GEIGER, London: Pali Text Society, 1908.*

Manusmṛti *Manu's Code of the Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra. Ed. Patrick OLIVELLE, Oxford: Oxford University Press, 2005.*

Rājanighaṇṭu *Rājanighaṇṭusahito Dhanvantarīyanighaṇṭuḥ (=Ānandāśrama Sanskrit Series 33). Ed. Ashubodh BHATṬĀCHĀRYA & Nityabodh BHATṬĀCHĀRYA. Calcutta, 1896.*

⁹⁴一次文献及び雑誌名の略号表記については、原則以下に採用されているものを用いた。Heinz BECHERT, *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literatur in Indien und Südostasien (=Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden Beiheft 3) (Göttingen: Vandenhöck & Ruprecht, 1990).*

- Subhāṣitaratnaḥ* *The Subhāṣitaratnaḥ Compiled by Vidyākara* (=Harvard Oriental Series 42). Ed. Damodar Dharmananda KOSAMBI & V. V. GOKHALE. Cambridge: Harvard University Press, 1957.
- Suśrutasaṃhitā* *Suśrutasaṃhitā of Sushruta: With the Nibandhasaṅgraha Commentary of Shri Dalhaṅāchārya* (=Chaukamba Ayurvijnan Granthamala 42). Ed. Jādvaji Trikuṃji ĀCĀRYA, Varanasi: Chaukamba Surbharati Prakashan, 1931.
- Suvṛ** *Suvṛttatilaka*
The Suvṛtta Tilaka by Mahākavi Śrī Kṣemendra (=Haridas Sanskrit Series 24). Ed. Nyāyopadhyāya KĀVYATĪRTHA & Paṇḍita DUṆḌHIRĀJAŚĀSTRĪ, Varanasi: Vidya Vilas Press, 1933.
- Tāranātha** *Dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar bston pa, dgos 'dod kun 'byung Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione.* Ed. Antonius SCHIEFNER, St. Petersburg, 1868. (Reprint Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1963)
- Yājñavalkyasmṛti** *Yājñavalkyasmṛti: With the Commentary Mitākṣarā of Vijñāneśvara.* Ed. Narayan Ram ACHARYA, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1882. (Reprint Delhi : Nag Publishers, 1985)

(2) 二次文献 (複数回用いたもの)

- BONGARD-LEVIN, Grigorii Maksimovich & VOLKOVA, O. F. 1963, 1965** “The Kuṅāla Legend & An Unpublished Aśokāvadānamālā Manuscript,” *Indian Studies Past & Present* 5–6, pp. 113–132, 315–318, 67–70, 309–319.
- DE JONG, Jan Willem 1965** “Review of G. M. BONGARD-LEVIN & O. F. VOLKOVA, *Legenda o Kunale*,” *IJJ* 8-3, pp. 233–240.
- **1979** *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā (Pallavas 42–108)* (=Studia Philologica Monograph Series II). Tokyo: Reiyukai Library.
- GEROW, Edwin 1971** *A Glossary of Indian Figures of Speech.* Hague: Mouton.
- LÜDERS, Heinlich 1926** *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (=Kleine Sanskrit-Texte Heft II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft. (Reprint Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1979)
- METTE, Adelheid 1985** “Zur tibetischen Überlieferung der Aśokalegende,” *ZDMG suppl.* vol. 6, pp. 299–308.
- MUKHOPADHYAYA, Sujitkumar 1963** *The Aśokāvadāna: Sanskrit Text Compared with Chinese Versions.* New Delhi: Sahitya Akademi.
- PARGITER, Frederick Eden 1918** *The Purāṇa Text of the Dynasties of the Kali Age.* Oxford: Oxford University Press.
- PRZYLUKSI, Jean 1923** *La légende de l'empereur Açoka (Açoka-Avadāna).* Paris: Paul Geuthner.
- STRAUBE, Martin 2006** *Prinz Sudhana und die Kinnarī: Eine buddhistische Liebesgeschichte von Kṣemendra Texte, Übersetzung, Studie* (=Indica et Tibetica 46). Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- **2009** *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṅgas Jātakamālā* (=Veröffentlichungen der Helmuth von Glasenapp-Stiftung Monographien Bd. 1). Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.
- 岡本 健資 1999, 2001–2002** 「クナーラ王子の物語—ku-na-la'i rtogs pa brjod pa 試訳 (1)(2)—」(『インド学チベット学研究』4–5, pp. 78–102, 98–116)
- **2001** 「チベット訳クナーラ物語—Ku-na-la'i rtogs-pa brjod pa について—」(『印仏研』49–2, pp. 937–941)
- 蓮沢 成淳 1936** 『国訳一切経 史伝部六』東京: 大東出版社
- 引田 弘道 2006–2007** 「クナーラ物語 (その一)(その二)」(『人間文化』21–22, pp. 159(152)–185(178), 173(227)–190(264))
- 松村 淳子 1984** 「ジャイナ所伝のクナーラ物語」(『仏教研究』14, pp. 63–88)
- 山崎 元一 1979** 『アショーカ王伝説の研究』東京: 春秋社

(やまさき かずほ, 広島大学大学院 [インド哲学])